42314
教科書文庫
4
810
42-1933
20000
44856

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

資料室

文部省檢定濟
昭和八年二月二日　高等女學校國語科教科書

教科書文庫
4
810
42-1933
2000044856

東京高等師範學校教授　垣内松三　編

國文鑑

第二版　卷一

株式會社　文學社

広島大学図書
2000044856

375.9
Ka9

一　女子教育の最近の進歩と國語科の重要なる使命とに鑑み程度を高めました。

二　教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三　縱に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四　右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

廣島大學圖書之印

廣島大學
44856
圖書

目次（巻一）

一 國語の愛護……五十嵐　力……六
二 櫻……芳賀矢一……一二
三 潮の音……島崎藤村……一六
四 みづすまし……横山桐郎……一八
五 岡に立つて……長塚　節……二六
六 犬ころ……二葉亭四迷……三四
七 順禮歌……近松秋江……四六
八 新　綠……荻原井泉水……五九
九 草の匂……前田夕暮……六五
一〇 蜂の巣……吉村冬彦……七五
一一 蚊……新井白石……八二
一二 蜃氣樓……橘　南谿……八五

一三 槍ヶ嶽紀行……芥川龍之介……八九
一四 露　營……窪田空穗……一〇一
一五 六代松……伊藤左千夫……一〇九
一六 比叡の鳥……高濱虛子……一一六
一七 大和俗訓鈔……貝原益軒……一二〇
一八 武士道の精神……一二三
一九 電　報……下位春吉……一二九
二〇 月見草……阿部次郎……一四五
二一 翼……吉江喬松……一四八
二二 野　菊……島木赤彦……一五四
二三 溪をおもふ……若山牧水……一五六
二四 野火止の用水……（國定讀本）……一六四
二五 國立公園……一六八

二六　母……坂本四方太……一九二
二七　將軍乃木……櫻井忠溫……二〇四
二八　短歌鈔…尾上柴舟…金子薫園…與謝野晶子…北原白秋…齋藤茂吉……二一八
二九　五箇條の御誓文……德富蘇峯……二二三
三〇　明治天皇の御遺物を拜す……笠井信一……二二七
三一　鸚鵡……小笠原長生……二三九
三二　雲萍雜志鈔……柳澤洪園……二四四
三三　否の一語……中村正直譯……二五〇
三四　自然の敎訓……羽仁もと子……二五二
三五　蜘蛛の絲……芥川龍之介……二五八
三六　水溜り……（トルストイ童話）……二六八
三七　散亂心……幸田露伴……二七五
三八　知行合一……南條文雄……二八〇

三九　阿蘇の麓……國木田獨歩……二八四
四〇　雜草……相馬御風……二九一
四一　春……島崎藤村……二九七
四二　日章旗……三〇四
四三　櫻井驛……松居松翁……三一二
附錄
國語假名遣一覽
字音假名遣一覽

五十嵐力
文學博士。早稲田大學教授。明治七年生。

一國語の愛護

五十嵐　力

こゝに獨立した一つの國があつて、其の國をそのまゝ維持し、或は更に一層立派なものに仕上げて行かうとするには、是非共國民の愛護して行かなければならないものが澤山あると考へます。先づその第一は國體でありませう。ついでは國民が祖先から傳へられた淳風美俗でありませう。或は更に建築・繪畫・彫刻等の古藝術もありませう。山水其の他の自然美もありませう。或は又其の國の特産といふやうな天産物もありませう。其の他にもいろいろありませうが、國語といふもの――我々が先祖から傳へられ、思想傳達の機關として片時も缺くことの出來ない――も、國民の愛護しなければならない最も大切なるものの一つであらうと考へます。

エマスン
Ralph Waldo Emerson
(1803—1882)

人によつては、それほど國語に重きを措かないで、「我々の重んずべきは思想である。實體である。言葉は思想・實體を現す符牒・形式に過ぎない。一種の表現方便に過ぎない。かゝる表現の形式や方便に骨を折るのは愚かな事である。」と考へるかも知れません。またさういふ人が實際かなり多くあるやうにも思はれます。しかしながら、これは眞相を知らない人のいふことで、事實に於ては、「表現卽ち實體である。言葉卽ち思想である。」とさへいつてもよいかと思はれます。少くとも表現が實體の半分であると位には考へることが出來ませう。アメリカの有名な詩人で哲學者であるエマスンは、「人といふものはたゞ半分だけが自分で、他の半分は自分の表現だ。」と言ひました。

伊藤仁齋　名は維楨、儒者。寶永二年（一三六五）歿、年七十九。

我々が自分といふものについて考へて見ても、人から「汝は何ものぞ。」と問はれた時に、先づ答として思ひ浮かべるものは、自分自身の現れである姓名・職業・資格・住所・事業等でありませう。自分自身の現れである姓名・職業・資格、乃至服裝・住宅・庭園・言語・文章等を除外して、何處に「我」といふものがありませうか。又國自身の現れである國土・山川・都會・田舍・諸制度・諸設備・諸藝術を除いて、何處に「國」といふものがありませうか。所謂內容を重んずると稱する人々はよく、「表現の樣式や外形などに支配されて堪るものか。衣服は寒暑が凌げれば澤山だ、言葉は思ふ事がいへれば澤山だ。」などと申しますが、事實に於て、內容と形式とはそんなに手輕に引き離せるものではありますまい。伊藤仁齋は井戸浚の場合にも袴を着けずには居られず、芭蕉は笠一蓋杖一本でなければ心が

芭蕉　名は宗房、松尾氏。俳人。元祿七年（一三五四）歿、年五十一。

アッシジ　Assisi　イタリヤの都邑。フランシスの生地。

フランシス　Giovanni Francesco Bernardone (1182—1226)

落ちつかず、アッシジのフランシスは敝れ衣に繩の帶を締めなければ安んじなかつたのです。そして其の袴姿・笠杖姿・繩帶姿に、彼等銘々の人物が最も鮮かに、最も適確に現れて居ると思ひます。かう考へると、「表現卽ち實體」とまではいはないでも、「表現卽ち實體の半ば」と位はいつても差支へなからうと思ひます。

表現はかやうに意味の深いものであります。特に言葉について見ると、言葉は其の人の爲人を現す所以のものであります。其の人の人格・嗜好を現し、また其の人の過去をも現在をも、時としては未來をも現すものであります。從つて言葉は、自分に對し、又他人に對して深く大いなる影響を及ぼすもので、其の表現上の用意・嗜み次第で、自分の品格を高め、運命を開拓することも出來、また之によつて他人に好感を與へ、ひいては社會を利し、文化の

道元禪師　我が國曹洞宗の開祖。建長五年（一九一三）歿、年五十四。

向上に貢獻することも出來るのであります。言葉といへば何となく末のことのやうに聞えますが、事實は決してさうでありません道元禪師は「愛語能く廻天の力あることを學すべきなり」と說いて居られますが、これは實に簡短な中に言葉の靈力を力强く道破した一句であると思ひます。

このやうに言葉といふものは人間生活の上に大きな力をもつものである上に、國語といふものは先祖から傳へられた一つの寶物で、大切な財產でありますから、これを立派に維持して、成るべく豐富にし、善美にするのが子孫たるわれわれの義務であります。又われわれの言葉を立派に守り立てるのが、取りも直さずわれわれ個人銘々を立派にする所以であり、同時に國を輝かす所以でもあるのであります。それでは、大亂脈を極めてゐる現

在の國語に對してはどうすればよいかといふに、大體四つの方針に歸するでありませう。卽ち第一には、語法・文法に合つた、少くとも正しい言葉にする事、第二には、正しきが上に更にこれを美しく磨き上げる事、第三には、正しい美しいと云つても、自ら狹く限るといふ事では面白くないから、自分の本領基調をちやんと立てこれに合し得る限り成るべく多くの要素を取入れて、豐かな姿のものに生し立てる事、第四には、豐かな中に統一のあるものに發達させることで此の標準により、我が國語を正しくし、美しくし、豐かにし、纏まりのあるものにして、國民生活の有力な表現たらしめると同時に、又これによつて國民生活そのものを向上發展させてゆくことが必要であると思ひます。

（國語の愛護）

芳賀矢一　文學博士。昭和二年歿、年六十二。

照りもせず　照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき（新古今集、大江千里の歌）

賀茂眞淵　縣居と號す。明和六年（二四二九）歿、年七十三。

二　櫻

芳賀矢一

櫻の咲くのは春である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない花曇の日、照りもせず曇りもせぬおぼろ月夜は、雲・霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。そよそよと面を吹くや春風。春の特色はどこまでものんびりとした心持にあつて、きりつめたやうなはげしさ、きびしさの少しもないところにある。櫻はちやうどこの時の氣候にはぐくまれて咲出でる花である。際立つた特色のないのが、卽ちその特色である。

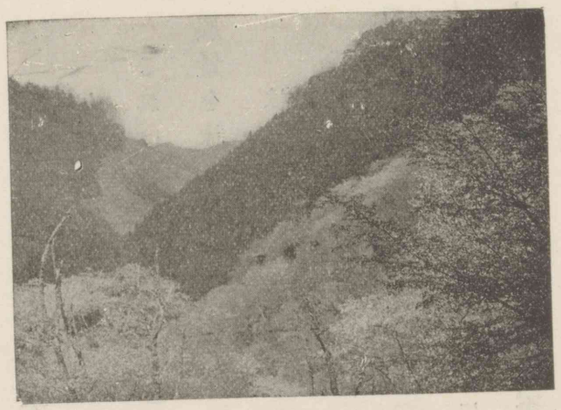
賀茂眞淵は、

うらうらとのどけき春のこころよりにほひ出でたる

久方の（古今集、紀友則の歌）

ももしきの（新古今集、山部赤人の歌）

山櫻花



吉野山の櫻

といつた。

春の日は永い。

久方の光のどけき春の日にしづごころなく花の散るらん

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大宮人のゆつたりとした優美な樣子なども思ひ浮かべられる。

ももしきの大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ

牛車の歩みおそく、花見て歸るたそがれの景、さながらの繪卷物である。

よし野山かすみの奥は知らねども
見ゆるかぎりはさくらなりけり

これは滿山櫻の雲に包まれた吉野山の風景を詠んだのである。

はなのくも鐘は上野か淺草か

これは大都會の櫻の花に蔽はれた光景である。

櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花ではなくして樹として賞翫する花である。否、多くの樹を集めて、人はたゞ花の中にゐて賞翫する花である。下に見て賞翫する花ではなくして、上

上野の櫻

よし野山（八田知紀の歌）

吉野山　奈良縣吉野郡吉野村山中の總稱。

はなのくも（松尾芭蕉の句）

上野　東叡山寛永寺。東京市下谷區。

淺草　金龍山淺草寺。東京市淺草區。

にながめて賞翫する花である。春風四月、日本人はすべて花の中の人となるのである。（女子新國文）

いざ子ども山邊に行かむさくら見にあすともいはばちりもこそせめ　良寛

山ざとにさくらかざして思ふどちあそぶはる日はくれずともよし

島崎藤村名は春樹。文學者。明治五年生。

三　潮の音

島崎藤村

わきてながるる
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴

しらべもふかし
ももかはの
よろづのなみを

よびあつめ

ときみちくれば
うららかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

（藤村詩集）

横山桐郎　農學博士。蠶業試驗場技師。

四　みづすまし

横山桐郎

空には麗かな日光が射し、野には枯草の間を縫つて流れる小川の水が溫み、鳥の聲にも春の讃美が聞かれる三月も終り頃になると、「待つてゐました。」とばかり、流の上をくるくるくるくる、いとも輕やかに走り回つてゐる六・七ミリメートルの小蟲がある。かういつてもまだ氣づかない人も、春から夏を通し、秋へかけて、池や河の水の面をさも面白さうにくるくる回りをしてゐる、小豆粒程な黑光りの小蟲といへば、まづ大抵合點がゆくであらう。彼の名は「みづすまし」、一名「まひまひむし」といふが、漢字では鼓蟲又は寫字蟲と書く。寫字蟲といふのは、この蟲の運動の仕方がちやうど水面に字でも書いてゐるやうに見える處から來てゐる

スピード・スケーティング Speed skating　直線滑り。

のであらう。「まひまひむし」もやはり其の運動狀態から來た名に違ひない。

實際その名の示してゐるとほり、この小蟲は蟲界まれに見る水上滑走の名手である。水上を巧みに滑つて歩く蟲はいろいろある。「かはぐも」(あめんぼう)の類、「めだかはねかくし」の類、ある「はへ」の類、「みづぐも」の類など、數へ立てれば澤山ある。しかしそれらのうち、どの蟲もこの「みづすまし」の妙技には到底及ばない。「あめんぼう」などはかなり巧みな方ではあるが、その運動は直線的でごつごつしてゐる。ところが「みづすまし」のそれになると、曲線的で優雅の趣に富んでゐる。これを人間のやるスケーティングに比べるなら「あめんぼう」のは單なる「スピード・スケーティング」に過ぎないが、「みづすまし」のになると、一歩進んで「フィギュア・スケー

フイギュア・スケーティング Figure skating 型滑り。

ティング」にたとへることが出來る。しかもその伎倆に至つては、人間の選手を拔くこと遙かに遠く、天晴れ水上の名滑走者たる名を奉つてもいゝ。

處で彼は如何してかゝる妙技を演ずるのであるかといふと、彼が滑走に使ふ道具は六本の脚である。而も、そのうち後方の四本は短くかつ扁平で、水をかいて敏速に體を前進させるのが其の重な役目であるが、前方の一對だけは非常に發達してゐて、體の方向を轉じる舵の役目をすると同時に、又食物を捕へるのにも便利なやうに出來てゐる。彼が滑走に使ふ道具はこれだけであるが、又その體が非常に滑かで、水面との摩擦を防ぐのに適してゐることも、其の妙技をしていやが上にも巧みならしめてゐる事は見逃してはならない。

「みづすまし」は一寸見ると、いつも絕えず水面を滑走して居るやうに思はれるが、彼もまた生物である以上、時に休息もする。さういふ場合に、彼は水面にじつと靜止してゐることもあるが、又水から出て棒杭や水草の莖にはひ上つて休んでゐることも多い。しかし、もし人が近づいたりすると、彼は忽ち滑走を始める。そしてその驚きが激しい時には、水中に潛り込んでゆき、水底に横たはつてゐる棒切の下とか、水草の根際とかの間に身を隱してしまふ。やがて時間がたつて危險が去つた頃、再びついと水面に浮かび出て來て、欣然と旋回してゐる。

この水面の愛敬者は、普通は水面に浮かんでゐるが、場合によると水から出ることも出來れば、又水中へ潛入することも出來る。又、時には水から飛出して空中を飛翔する事さへ自由なので

ある。卽ち、彼は水・陸・空の三界を自由にかけ回ることが出來る果報者である。彼は腹部の背面に呼吸器を持つてゐて、これを覆うてゐる羽根の下に空氣を貯へて置き、それから酸素をとることによつて、水中でも呼吸を續け生命を保つてゐる。しかし、その場合酸素の量には限りがあるから、いつまでも水中に居ることは出來ない。數分間の後には又水面に出て來て空氣を新たにする必要がある。又空中を飛翔するのは主に夜間で、晝間太陽が輝いでゐる時には飛ばない。夕方までは全く死の水溜であつたのに、翌朝見ると可愛らしい「みづすまし」がさも愉快さうに踊つてゐるのを見ることがあるが、さうした現象は彼等の夜歩きを物語るものである。

しかもかうした性質はたゞに「みづすまし」に限らず、水棲昆蟲

類の大部を通じて持つてゐるもので、神社の天水桶の中に「げんごらう」が泳いでゐたり、雨上りの水溜に「あめんぼう」が遊んでゐたりするのは、皆これらの水蟲には、水・陸・空の三界に生活し得る機能が與へられてゐるからである。さう思ふ時、萬物の長なりと自ら誇つてゐる人間などは、生活範圍の局限せられてゐる不自由極まる生物であることを痛感せざるを得ない。總じて昆蟲といふものは、元來陸棲を原則としてゐたものが漸次に水棲に移つて行つたものであるから、全然水棲になりきらないで、昔の陸棲時代の習性がいまだに殘つてゐるものと見なされてゐる。それ故彼等水棲昆蟲共は、全然水中ばかりに、若しくは全然陸上又は空中ばかりに生活するといふ事は難かしいので、水と陸若しくは空中とを半々に生活してゐる。そしてある者は幼蟲時代だ

けを水中に送り、親になると陸上若しくは空中生活に移る。「とんぼ」や「かげろふ」は其の例である。

ところで「みづすまし」は、親になると水陸兩棲生活をやることが出來るが、その幼蟲に至つては全くの水棲蟲で、一歩も陸上へ上ることが出來ない。そして體の兩側にある鰓で呼吸をしてゐることは魚同樣である。この蟲は、親子共に水棲の小動物を食して生活してゐる。そして面白いことには、親蟲の眼は上下に分れてゐる。それは、上方の眼は水面を、下方の眼は水中を見る役をなすものと解釋されてゐる。

秋十月・十一月頃になると、彼等は皆水底の泥の中に潜り込んで冬越しの準備に入る。そして、一冬を全く眠つて送る。が、再び春が訪づれ、春光が野にあまねく行き擴がると、いつの間にかその

隱家を出てひよつこり水面に現れ、銀の小粒のやうな體を惜しげもなく回轉させて、春の來た事を吾々に告げてくれる。私は春まだ淺き日、この蟲の姿を見る毎に、「おゝ春の使者よ、もう御前は來たのか。」と思はず獨言するのである。（東京朝日新聞）

枯蘆に春風吹けば目高かな　子規

氷解けて古藻に動く小海老かな

古沼の芥に春の小魚かな

水口に集つて來る田螺かな

長塚節　文學者。子規門下。大正四年歿、年三十七。

鬼怒川　栃木縣北部に發し、南下して利根川に合す。

五　岡に立つて

長塚節

小春の日光は岡の畑一杯に射して居る。田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれてゐる岡の一方は、村から村へ通ふ街道に面して居る。田は岡に沿うて狹く連なつて居る。田圃を越して竹藪の間から草家がぽつぽつと見え隱れする。箒草を中途から切離したやうに枝を擴げた欅の木が、そこにもこゝにもすくすくと突つ立つて居る。

鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つて居るので、近くの水は其の蔭に隱れて見られない。のぼる白帆が半分だけ見えて、しかも大きい。土手の篠を越して水が白々と見えるあたりは、もう遙かの上流である。だから篠の梢を離れて高瀨舟の全形が見える頃

筑波山　茨城縣筑波郡にある山。高さ八七六米。

兩毛　上野・下野。

には、白帆は遙かに小さく蹙まつて居る。土手の篠の上には對岸の松林が連なつて見える。更に其の上には筑波山が、一脚を張つて、他の一脚を上流まで延ばして聳えて居る。小春の筑波山は、常磐木の部分を除いては、赭く焦げたやうである。其の赭い項上に、點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。やゝ不透明な空氣は、針の尖でつゝいたやうに、其の白い一點を際立たせて眼に映じさせる。

岡の畑は幾らか傾斜して居るので、中央に立つて見ると、向うの櫟林は半ば隱れて、低い土手のやうに連なつて居る。林の上には兩毛の山々が雪を戴いて、それがぼんやりと白く見える。

こんな周圍の中に、岡の畑は朗かに輝りわたつて居るのである。土は乾き切つて居る。既に二三寸に伸びた麥は、岡一杯に薄く

綠青を塗つたやうになつて居る。

そこにもこゝにも百姓が小さく動いて居る。麥畑をうなつて居るものもあるが、大抵は芋掘の人々である。四五人の手で芋を掘つて居る。畑の緣には、馬が茶の木に繫いであつて、俵が轉がつて居る。此の俵があるので、遠くからでも芋掘の人々であることが判る。馬は退屈まぎれに、どうかすると茶の木を食ひむしることがある。其の時一人が驅けて出て、轡をがらんと一つ極めつけて叱り飛ばすと、馬はまたおとなしくなつて、ぱさりぱさりと尾を動かして居る。

百姓の手元は忙しい。しかし岡はたゞ長閑である。日がやゝ傾くと、忽ち筑波山の頂上から眩しい光がきらきらと射す。毎日同

じ時刻に此の光は此の岡へ強く射しかけて來るのである。百姓の或者は、筑波山で火を燃やすのだらうなどといつて居るが、それは觀測所の硝子窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば、數時間の中にたゞこれだけである。硝子窓の反射はやがて消えてしまふ。芋掘の人々は勿論此の光を知らないのである。

街道へ下り口の畑でも、一組芋を掘つて居る。隣の桑畑は葉が大抵落ちて、其の芋畑へも散らばつて居る。青いよわよわした小麥が生え出して居る。小麥は芋の間に二畝(うね)づつ作つてある。芋の莖はべたりと茹でたやうになつて居る。女は芋の莖を菜刀で根元から切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から男が鍬の先で芋の株を掘起して行く。ぴかぴかと光る鍬の先

をざくつと芋の株へ斜めに突きたてて、ぐつと鍬を持上げると、大きな土の塊がふわりと浮きあがる。鍬をそつと拔いて先の株へ移る。小麥に障らないやうに極めて丁寧に掘つて、先へ先へと行く。女は莖を切つてしまふと、後へ戻つて、掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺ばかり揚げて、どさりと打ちつける。細かに土がほぐれて、こゞつた小芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを兩の掌でぶりぶりと離して、やがて俵に取入れる。さうして穴の土を手の先でならして、又先の塊をほぐす。乾いた畑に濕つた丸い穴の跡が一つづつ殖えて行く。日光が其の土を後から後からと、細やかに乾かして行く。

世間にはまた春が蘇つた。鬼怒川の土手の篠の上には、白帆を

一杯に膨らませて、高瀬舟が頻りにのぼるのが見える。船頭が胡坐をかいたまゝ時々舵に手を掛けるだけで、舟の舳はぢやぶぢやぶと水に逆らつてのぼつて行く。冬の辛さがこゝで一度に取返されるので、此の南風の味を占めては迚も船頭はやめられないといふ時節である。

篠の中からは、鶺がそつちこつちへ移りながら下手な鳴きやうをして、麥畑の方へ飛んで出る。

麥が刈られて、さうして椋鳥が群を成して空を渡る頃、村のうちには毎日麥を搗く杵の響が、大地をゆすつてどこかに聞える。椋鳥はしらじら明けに西から疾風のやうな響をなして空を掩うて渡る。さうして夕陽の沒する頃、また西へ歸る。椋鳥が空を遙かに飛ぶ時に、麥搗は杵を持つ手の右と左を持換へながら、「今日

畑

も日和だ。」と叫ぶ。

椋鳥が少くなつて、稲刈になる。刈田の跡の水のやうな冷たい秋が暮れて、また冬が來る。鶸がよわよわした羽を擴げて、切ない鳴きやうをして、林から刈田を飛廻る。さうして寒さはまた小春に還つて、人々は岡の畑に芋を掘つて居るのである。短い日は、村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に、眞倒樣に落ちかゝる。横にさす光は麥の葉をかすつて、赭い櫟の林が一しきり輝く。

畑の緣の茶の木の花は白々と光を帶びて居る。筑波山は見る見る濃い紫に染まつて來る。秋の末の晩稻(おくて)を刈る頃から、夕日の射し加減で、筑波山は形容し難い美しい紫を染め出す。百姓に聞いて見れば、嘗てそんな筑波山は知らないといふ。知らないといふのは尤ものことである。日が落ちて殘光がなほ明かな數十分

間は、彼等の仕事が最も捗る時である。晩餐の支度をするために、女達は今どこの畑からも一人づつ立つて行く。手元が漸く薄暗くなる。頬白が淋しさうに桑の枝を飛びめぐる。百姓はそんな事には頓着無しに、せつせと芋を俵に詰める。

村の竹藪から昇つた青い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに幾筋も棚引いて、田圃から岡まで屆かうとして居る。其の時、黄昏の中を、百姓は田圃みちを相前後して歸つて來る。何處ともなく鳴がきゝと鳴いて去る。百姓の後姿を村の中へ押込んで、やがて夜の手は、田圃から、畑から、次第に天地の間を掩ふのである。

（長塚　節全集）

二葉亭四迷
本名長谷川辰之助。明治四十二年歿、年四十八。

六　犬ころ

二葉亭四迷

春雨のしとしとと降る薄ら寒い或夜の事であつた。私は例の通り宵の口から寢て了つた。ふと目を覺ますと、有明が朦朧と照らして、四邊は微暗く寂然としてゐる中で、耳元近く妙な音がする。或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、宛然大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。何だらうと思つて耳を澄ましてゐると、時々其の音がわれとわが單調さに厭いたやうに、忽ち慣れた調子を破り、凄まじい障子の紙の共鳴りのする音を立てて勢込んで何處へか行きさうにして、忽ち物に行當つたやうにはたと止む。と、しばらくひつそりとなる。その側から直ぐ又穏かな音が遠方に聞え出して、それが次第に近くなり、荒くなる。

私は夜中に滅多に目を覺ました事が無いから、初はひどく吃驚したが、能く研究して見ると父の鼾なので、やつと安心して其の儘再び眠らうとしたが、寢付かれないので、聞える儘に其の音に聽入つてゐると、思ひ做しで或は遠雷のやうに聞え、或は又浪の音のやうに聞える。それに耳をすましてゐると、何時からとなく、それに混つて、相の手のやうに、遠くから幽かにきやんきやんといふやうな音が聞える。ごうといふ凄まじい音の時にはそれにけおされて聞えぬが、すうといふ溜息のやうな音になると、それが判然と手に取るやうに聞える。不思議に思つて、益耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、確に門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けたゝましくきやんきやんと啼立てる。その聲尻

がやがてかぼそく悲しげになつて、滅入るやうに遠い遠い處へ消えて行くかとすれば、忽ち又近くで堪へ切れぬやうに啼出して、くんくんと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私は元來動物好きで、就中犬は大好だから、近處の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかよわい、いたいけな聲で啼くのは一疋も無い筈だから、不思議に思つてそつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの、寢られないのかえ。」

と、母が寢反りを打つて此方を向いた。私は此の返答は措いて、

「あれは白ぢやないねえ、大層小さい狗の聲だねえ。如何したんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つて……何(なあに)。」

「棄狗つて……誰かが棄ててつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄ててつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

「何處かの人が狗を棄ててつた。」と、私は二三度繰返して見たが分らない。

「如何して棄ててつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない。何處までも相手になつて、其の意味を説明してくれて、

「もう晩いから默つてお寢。」

と優しく言つて、又彼方を向いて了つた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか啼聲が稍遠くなるにつれて、又父の鼾がうるさく耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜着の中で今聽いた母の說明を繰返し繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼犬が緣の下で兒を生んだとする。小ぽけなむくむくしたのが重なり合つて、首を擡げて乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて來て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから舌の先で他愛もなく、ころころと轉がされる。轉がされては大騷ぎして起返り、又よちよちと這寄つて、ぽつちりと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、慌てて吸付いて、小さな兩手で揉立て揉立て吸出すと、甘い溫かな乳汁がどくどくと出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。と、腋の下からまだ乳首に有附

かぬ兄弟が鼻面で割込んで來る。奪られまいとして、產毛の生えた腕を突張り大騷ぎをやつてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸付く。其の中に親の肌で身體も溫まつて、溶けさうな好い心持になり、ついうとうととなると、含んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にもあわてて又吸付いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛もなくうとうととなつて、乳首が遂に口を脫ける。脫けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで一向正體がない。其の時忽ち暗黑から節くれだつた大きな腕がぬつと出て、正體なく寢入つてゐる所をむづと引掴み宙に吊す。驚いて目をぽつちりあき、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息氣が塞りさうだから、出ようとするが出られない。

暫く藻掻いて居る中に、ふと足掻が自由になる。と、領元を摑まれて、高い高い處からどさりと落された。うろうろとして其處らを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で誰も居ない茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、怕ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くんくんと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れてよちよちと這出し、雨の夜中を唯ひとり溫かな親の乳房を慕つて悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

「阿母さん阿母さん、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私が何だか居堪らないやうな氣になつて、又母に言掛けると、

母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつて——あら、あんなに啼いてる。……」

と、折柄絶入るやうに啼く狗の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見よう。……」

「本當に仕樣がない兒だねえ。」

と、小言を言ひ言ひ、母も澁々起きて雪洞(ぼんぼり)をつけて起上つたから、私も其の後について、玄關——と云つてもつい次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちらちらと靡く。其の時小さな鞠のやうな物がつと軒下を飛退いたやうだつたが、軈て雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の暗黑を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した處を見ると、つい其處に生後まだ一箇月も經たぬ、むくむくと肥つた赤ちやけた狗兒が、小指程の尻尾を千切れさうに掉立つて、此方を瞻上げてゐる。形體は私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を垂らし、ぽつちりと兩つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おやおや、まあ可愛らしい！……」

と、母もつい言つて了つた。

況や、私は犬好だ。じつとして視ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

が、左程畏れた樣子もなく、ちよこちよこと側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を下からぐいぐい推上げるやうにしてべろべろと舐廻し、手をくれる積りなのか、頻りに圓い前足を擧げてばたばたやつてゐたが、果はやんはりと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて可愛くて堪らない。母の面を瞻上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけど、居附いて了ふと仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。

早速履脱へ引入れて之をあてがふと、小狗は一寸香を嗅いで、直ぐ甘さうに先づぴちやぴちやと舐出したが、汁が鼻孔へ入ると見えて、時々くしんくしんと小さな嚏をする。忽ち汁を舐盡くして、今度は飯に掛つた。他に爭ふ兄弟もないのに、切りに小言を言ひながら、がつがつとたべ出したが、飯は未だ食慣れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなかなか取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔に藻搔く。

此の隙に私は母と談判を始めて、今夜一晩泊めて遣つてと、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もう斯うなつて

は仕方がない。「阿父さんに叱られるけれど。」と言ひながら、棧俵法師を捜して來て履脱の隅に敷いて遣つた。――は好かつたが、其の晩一晩啼通されて、私は些とも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌ひな父は、泊めた其の夜を啼明かされてうんざりして了つて、翌日は是非追出すと言出したから、私は小狗を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、其の中には小狗も獨寢に慣れて夜も啼かなくなる。と、追出す筈の者に、何時しか「ポチ」といふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒になつて捜すやうになつて了つた。

（平凡）

近松秋江 本名は德田浩司。明治九年生。文學者。

弘法大師 空海、眞言宗の開祖。讃岐國多度郡屏風浦の人。仁明天皇の承和二年（一四九五）歿年六十二。

七　順禮歌

近松秋江

山里に咲きわびてゐた櫻も漸う散りそめて、野には青い麥がやがて人の背も隱すほどに伸び、菜の花の黃もすがれて行く頃になると、毎年きまつたやうに村々から小豆島巡りといふものが出かける。

小豆島は、あの美しい瀨戸內海の水が備前と讃岐とによつて狹められた、その東端の海上に浮かんでゐる、周圍僅かに三十五六里にも足らぬ小さい島である。島は風光明媚、そして、弘法大師の開基といひ傳へられてゐる八十八箇所の札所があつて、晩春・初夏の頃になると、對岸の中國や四國から數多の順禮が日々渡つて來る。

ローマンス Romance 現實にありさうもなき夢のやうなること。

中國の田舍 岡山縣和氣郡藤野村。

阿波鳴門順禮歌 近松半二作淨瑠璃「傾城阿波鳴門」の八段目。特に順禮歌の段として知らる。

西國遍路 近畿地方に散在する三十三箇

私がその小豆島巡りの順禮の一行に加つたのは、もう今から二十三四年も昔の事である。小豆島巡りといふことは、それがいつも季節の好い時分であるのを背景として、過去の懷かしい無邪氣なローマンスとなつて私に殘つてゐる。やつぱり其の頃であつた。毎年春秋の時分になると、阿波から人形淨瑠璃が瀨戸內海を渡つて來て、私達の中國の田舍にまで旅を興行して歩いた。色々な外題をして見せたが、最も子供心に哀愁となつて記憶に殘つてゐるのは、「阿波鳴門順禮歌」といふのであつた。一體私は添乳の歌を聞く頃から常に父の語る淨瑠璃を聽かされてゐた上に、母がまた西國遍路といふやうなことに妙に憧憬をもつてゐて、彼女は私を連れた笈摺姿の二人を、丁度芝居などで見る順禮の親子のやうに空想して、遙けき旅にさすらひたい願望をもつ

所の觀音の靈場を巡拜すること。

てゐたのである。それを私に度々話してゐたのを記憶してゐる。

母のその空想は遂に實現されなかつたが、小豆島めぐりはいくらかそれに近いやうなものであつた。それに、その前の前の年の秋、母は私たちの父を亡つて後生を願ふ心が強くなつてゐたところへ、またその年の一月早々私の兄に死なれたので、母はひどく無常を感ずるやうになつて、遁世的な考から一層西國行脚を欲して、たとひ旅に死ぬやうなことがあつても厭はぬから、一旦出家した以上は、そのまゝ永く行方を晦まして、俗世の縁を絶ちたいといふほどの志がないでもなかつた。

すると、小豆島へはもう數十度も參つたといふ親類の老人が、今年もまた島めぐりをするから、一緒に行かうではないかといつて誘つてくれたので、母は私と共に出かける氣になつた。私も

兄の死は前年の父の死にもまさつて哀傷の情がひどく胸に響いて、それがために少なからず體にも障つたやうであつたが、執拗な感冒から動もすれば肺尖カタルでも起しさうな徵候さへ見えて、熱の高低があつて食慾も進まなかつた。それで醫者に島めぐりのことを相談すると、醫者はひどく賛成して、少しくらゐ熱があつても出掛ける事を勸めた。島山にはもうそろそろ麥が熟しそめる時分であるから、私は暑くなればだんだん皮を剝ぐやうに一枚づつ脫ぐつもりで、單衣を三枚重ねて家を出た。

背に笈摺こそかけなかつたが、頭には「四國八十八箇所順禮同行二人」と誌した菅笠をかぶり、手甲・脚絆に身を固め、納札を胸にかけ、金剛杖をつきながら、村はづれの板橋を渡つて、海のあるところまで三里の道を、野を過ぎ山を越えて歩いた。ところどころ

に蓮華の花の毛氈を敷きひろげた野は、見わたすかぎり薄い絖を張つたやうな眞白い霞が立罩めて、五月の日に暖められた軟かい風は、眞青な麥の波をわたつて吹いて來た。山路を行くと、ちやうど躑躅が眞盛りに咲いて、ものういやうな草木のいきれの中から、もう夏をさきがけるやうな松蟲の鳴く音が騷々しく山中に響いて聞えた。そして小高い山の項を一つ向うへ越すと、そこにはまた山と山との間に狹い野が開けて、その野の中を流れてゐる小川に沿うて下へ下へ下つて行くと、やがてその川が海に流れこむ川口の所に、一行の先達なる親戚の老人とはかねてなじみの船頭が、小さい和船を用意して私たちの來るのを待つてゐるところであつた。

そこは瀨戸内海の水が、また無數の小島の群つてゐる間を分

大師堂　弘法大師をまつれる堂。

けて、陸地に沿うて幾曲りかしながら深く彎入してゐる所で、長いゆく春の日が海岸の小山のかなたに春きかけた夕映を身に浴びながら、私たち同勢七人はその小舟に乘りこんだ。舟はまるで小さい池にでも浮かんでゐるやうな穩かな波の上を、夕暮れかゝる暗を分けて、ぎいぎいといふ櫓の音と共に靜かに滑つて行つた。そして、その夜は丁度對岸の山の上にある大師堂に夜ごもりをして、狹くるしい庫裡で脚絆と足袋を取つたばかり、着物もそのまゝのうたゝ寢をして、翌る朝、早曉、大師堂の山を下りて來ると、そこには、昨夕からそのまゝ山の下に舟を繫いで夜泊してゐた船頭が、もう苫を取除けて私たちの下りて來るのを待つてゐた。そこから十里ばかりの海を小豆島へ渡るのである。

四月の末からかけて五月頃の瀨戸内海の水の美しさと、氣候

の穏和なことは、一度それを知つてゐる人でなければ語ることが出來ぬ。私たちの乘つた舟は、朝なぎのした鏡のやうな水の上を、長閑な櫓の音を高く響かせて滑つて行つた。をちこちの島山はさながら夢を見てゐるかのやうな薄い霞にこめられて、うららかな朝日の影を照返してゐる。海の面は曇つた銀の板のやうに鈍く輝いてゐる。強い海の匂を含んだ爽かな風がそよそよと顏を撫でた。船は同じやうな山の鼻や島の陰を幾曲りして、次第に廣い海の方へと出て行つた。

屋根板を取つた胴の間には、同勢十人に近い一行の連中が環をつくつて坐りながら、先達の老人の音頭で、海の水にも鳴り響くやうな聲を揃へて順禮歌を唄ひ出した。

普陀落や岸打つ波は三熊野の那智のお山にひびく瀧

國順禮第一番の札所、和歌山縣東牟婁郡、那智山青岸渡寺の御詠歌。

ふるさとを　同第二番の札所、和歌山縣紀三井寺村、紀三井山金剛寶寺の御詠歌。

岩をたて　同じく第六番の札所、奈良縣高取町、壺坂南法華寺の御詠歌。

つ瀨

ふるさとをはるばるここに紀三井寺花のみやこも近くなるらん

深碧に晴れわたつた大空は、うらゝかな日光が一杯に漲つて、青疊を敷いたやうな海の上は、小波さへ立たず、遠く遠く眼のとどく限り白く霞んでゐる。舟はその煙霞の中を分けつゝ、悲しみの籠つた、そして長閑な順禮歌の合唱の聲を載せて滑つて行つた。

岩をたてみづをたたへて壺坂のにはのいさごも淨土なるらん

やがて午近くなると、船頭は十四五の子供に櫓を押さしておいて、自分は米を洗つて飯をたき、晝飯の支度に取りかゝつた。精

進の道中とて、添へるものは香物に若布の酢あへぐらゐのものであつたが、いくらか鹽加減のある御飯に澤庵の風味、空腹に得もいはれぬ味があつて、茶澁のついた、顔もはひりさうな大きな飯茶碗に、手垢に黑ずんだ杉箸で、私は幾杯かを重ねた。日は頭の眞上からあまねく照輝いて、海は一面にちろちろと鏡の破片のやうにまぶしく光つてゐるが、適度に氣溫を冷された軟風は、そよそよと絶えず頰から襟先のあたりをなぶつて行つた。

舟はまた幾つか同じやうな山の岬端を曲つて、とある小島と相對して狹い水道をなしてゐる所まで進んで來ると、折から午過ぎの空氣は少しづつ荒だつて來て、さすがに靜かであつた水の上に靑い細波が搖れて來た。

「ほら、向ひ風だ。」くはへ煙管で櫓を押してゐた船頭は、日に燒け

大部　香川縣小豆郡、小豆島の北岸。

た顏を上げて、行手の海の方を見わたしながらいつた。

「風が出たら仕方がない。仙さん、舟に弱い連中ばかりですから、夜まで待つてもらはう。明日の朝までに大部（おほべ）に着けてもらへばいゝんぢやから、急ぐことはないぞな。」老人はさういつて船頭をねぎらうた。

水道の彼方には今までに見なかつたやうな廣い靑海原が遠く展けて、眞白い波頭が白馬の鬣の如く、しぶきをあげて凄まじく押寄せてゐる。

「えゝ、夜なかまで待てば風が變る。」

仙さんはさういひつゝ、ところどころに人家の點在してゐる山裾の岸に舟を漕ぎ寄せた。山には麥畑が雛壇のやうに一枚一枚重なつて下から上まで續いてゐた。その麥畑の中を半里許り

奥にはひつて行くと御繁昌なお稲荷様があるといふので、女たちはみんな舟から上つて、その方にお詣りに行つた。私は母の誘ふのを聽かずに、水道の向うに横たはつてゐる島山に上つて見たくてたまらないので、船頭に頼んで舟をそちらの岸に着けさせ、一人雜木の茂みを掻分けて、その島の上にと登つて行つた。島は以前このわたりの土地を領してゐた藩の家老の墓地のあつた處であつたが、今は全く無人の島となり、墓守さへ住まず、藪叢の荒れるにまかせてある。私は八重葎を分けて墓碑のある方に深く進んで行くと、ところどころに海風に揉まれた老松が高く翠蓋を翳してゐて、大きな碑石はその下に春の小草に埋れたまま立つてゐるのを發見した。私は黑く苔むした花崗石のその臺石に腰を打ちかけて憩ひ、島の彼方に遠く開けた瀬戸内海の水

を遙かに見わたした。志す小豆島はその水の彼方に、白く霞をこめて、青螺の如く淡く横たはつてゐる。脚の下から白銀を延べたやうに續いた海原には絖の如き煙霞が一面に漂うて、あまねき日の光は天地の端から端まで殘る隈なくつゝんでゐるのである。

夜に入ると共に風は次第に凪いできた。晝間と同じやうな夕飯が濟むと、また老人の先達で一しきり御詠歌の合誦が始つた。

私は昨夕の睡眠不足に早くも睡氣を催して、船の胴の間からずつと奥の方の舳の處に這入つていつて、窮屈な體を横たへて睡を貪つた。胴の間の順禮歌もいつしか止んで、暫く念佛を唱へる聲がしてゐたが、それも終つてしまふと、跡は船頭の仙さんが櫓を操り乍ら人を笑はせる樣な大口をきいて、賑やかにさゞめ

いてゐるのが聞えてゐた。

それでもいつしかぐつすり寢入つてしまつて、そして今度心地よく眼を覺ました時には、艫の方では船頭の太い濁聲が朝ぼらけの海風に響いてゐるのが聞えた。

屋根を取つた船縁からついと顏を出して見ると、眼の前にはいつの間にか陸地が現れてゐて、船は小豆島に着いたのである。潮に濕つた沙地の渚には、透きとほるやうな清らかな水がのたりのたりと靜かに小さい波を寄せて、磯臭い爽かな風が冷たく襟首を吹いた。弓のやうに遠く延びた海岸につゞく漁村のところどころに大きな木組みをして船を造つてゐる方から、木を叩く槌の音がかんかんと長閑に靜かな朝の空氣に響いてゐた。

（煙霞）

荻原井泉水 名は藤吉。俳人。明治十七年生。

猿澤の池 興福寺塔下の池。

ベンチ Bench 共同腰掛。

荒池 興福寺の南方にあり。

奈良ホテル 荒池の南にあり。

八 新緑

荻原井泉水

奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。櫻の頃に來た時にはまだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、いきいきと青んで、鹿がその上に寢ころんだり、又その青い芽をたべたりしてゐた。

猿澤の池の柳は、萌黄色をした其の若々しい美しさが稍老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ水に映つてゐた。春によく來る團體の客のざわめきも今はなくて、池の縁にあるベンチには、木蔭を求めて子供を遊ばせてゐる女がゐるばかりだつた。

荒池のほとりはなほ靜かだつた。奈良ホテルに沿うて葉櫻のほの暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。池にはやゝ遠くの興

興福寺 奈良市の中央にあり。法相宗の大本山。藤原鎌足の創建。藤原氏の氏寺。

嫩草山 奈良市の東北にあり。

高圓山 奈良市の東南、春日山の南にあり。

高畑 春日野の南方の低地。

春日の社 春日神社のこと。官幣大社。武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣命を祀る。

福寺の塔の影が映つてゐた。其の水に石を投げて水の輪が出來るのに興じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつてそれが消えてゆくのを待つては、他の子供が又石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處では、園丁が其の枝をおろしてゐた。芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて來て香を嗅いでゐた。

嫩草山・高圓山がそれぞれにこんもりとして輝いてゐた。高畑のからりとした芝生の上には、大きな花が咲いたやうに美しい洋傘が動いてゐた。

あせびの花は大抵すがれてゐたが、其の花の多い谷のやうになつた路には美しい影が出來て、こまかく洩れてひそんでゐる光の戯れも面白かつた。

春日の社に近い杉の木立は夏らしく黑み渡つて、その葉の先

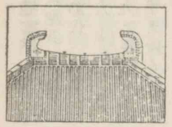
から愛らしい淺綠の爪のやうな若葉が出てゐた。參詣の人の多く通る道には鹿が澤山待ちうけてゐた。私は煎餅を手に持つてゐるだけ皆與へてしまつたが、彼等は圓々とした可愛い眼を私に向けて、いつまでもせびるやうに蹤いて來た。一つの鹿は私の前で首を上げたり下げたりした。それは御辭儀なのだつた。私は、おとなしく私の前に脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫でてやつた。文字通り鹿子斑の其の肌はつやつやしかつた。五月は毛並の光澤の一番美しい時だと

奈良公園の朝

いふ事である。ぬけ換つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで、赤みを帶びて柔かさうだつた。手に握つてみると其の赤い色の血のぬくみが感じられた。

南大門の通には燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間をすり拔けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土產物を並べてゐる店の軒についと飛入つたりしてゐた。

大佛殿を左へ、松林の間を行く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向うに、實に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると大佛殿の屋上の鴟尾が金光燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじいじいと鳴きはじめてゐた。



南大門 東大寺の總門。

大佛殿 東大寺の金堂。東大寺は華嚴宗の大本山。

戒壇院 東大寺に屬する堂宇。僧に戒を授けるための壇のある堂。

鴟尾

轉害門は奈良に殘つてゐる建築のうちで最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構はすばらしいものだと思つた。私は其の門をはひつて大佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿の若葉が日を照りかへしてゐたりした。古い寺院の土塀が崩れた事によつて却つて繪畫的に見えるやうな、淋しいひつそりした道だつた。築地のすそには「きんぽうげ」が咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。

嫩草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽の吸物を出した。嫩草山と春日山との間にある谿の道は、若葉の綠が顏にうつるやうな朗かな感じの處だつた。爪先上りに苦しくないほどの登りになつて、山の奥に踏込んでゆく。洞の楓といふ名のついてゐる通りに、楓がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤があち

轉害門 天平（聖武天皇の御代。一三八九―一四〇九）年間の建築といふ。

トンネル Tunnel 隧道、

らにもこちらにも咲き垂れてゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭のそれなどは大方すがれてしまつてゐるのに、こゝだけはまだふさふさとした紫を垂れて美しかつた。

歩けばさすがに暑さをおぼえる。道に添うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。青い「かまきり」の子が若い芒の葉先にとまつてふらふらしてゐた。

（觀音巡禮）

藤浪の花は盛りになりにけり平城のみやこを思ほすや君

萬葉集

前田夕暮　名は洋造。歌人。明治十六年生。

九　草の匂

前田夕暮

今日も、私は白いお握りと、ゆで卵と、落花生とを持つて向うの林に行く。

巴旦杏の木の立つてゐる――其の枝にはもう青い果がなつてゐる――村の小學校の庭を横切つて、往還へ出る。この村はどこへ行つても杉木立と桐畑とである。桐は今花盛りだ。

往還を荷車を挽いて行く若い男がある。車の上には新しい蓆を敷いて、一人の老爺が乘つてゐる。顏を上に仰向けて、道のはたの桐の花を褒めながら、大きな聲で何か話し話し行く。挽いてゐるのは息子で、乘つてゐるのは父親であることがわかる。

「今日は、よいお天氣で……。」と老爺がいふ。

全くよいお天氣だ。畑には麥が青く穗立ち、その麥畑のなかに桐の花が咲誇つてゐる。向うを見ると、赤い屋根が林間にぽつりぽつり建つてゐる。

道は少し下りになつて田圃に出る。田圃には紫雲英が咲盛つてゐる。狐の牡丹や、きんぽうげが光つてゐる。すかんぽが赤く穗を出して、風に吹かれてゐる。苗代田には水が見るから心地よく張られて、案山子がぽつんと立つてゐる。

田川の橋を一つ渡ると、其處に櫟の並木がある。其の並木路をぽつりぽつりと歩いて行くと、道は樫と杉と欅との古い森にはひる。其の森のなかには細い幽かな道が、木の枝のやうに分れてゐる。どの道を辿つて行つても、人の家の庭に出られる。庭にはよく地車が挽きすててある。雞がきよときよとと遊んでゐる。

庭の隅の日あたりには苗場があつて、甘藷苗や茄子苗が盛り上つてゐる。胡瓜苗はもう麥畑の畝間に移植されて、黄いろい花をつけてゐる。道は杉の植林のなかを通つてゐて、いよいよ幽かになる。孟宗藪のそばを通つて少し行くと、急に明るくなつて視野が濶くなる。其處には可なりに廣い草原が横たはつてゐる。草原には、もう野薔薇が咲きかけて、風にゆられてゐる。すいすいと茅花が青く抽きでてゐる。なかには、白く穗を出してゐるのもある。空には雲雀が鳴いてゐる。あたりは一面の麥畑である。麥畑の向うには、孟宗竹が青黄いろくなびいてゐたり、家の屋根だけ見えたり、墓が四つ五つあつたり、行く人の頰被りが白く見え隱れしたり、若葉が燃えあがつてゐたり、林が青く風に吹かれてゐたりしてゐる。

私は冷たい草の上に腰をおろして、たつた一本生えてゐる原つぱの若木の楢の蔭で、風呂敷を披いて握飯を食べる。鹽が少し利きすぎてゐるので、却つてうまいが、一椀の飯を握つただけなので、掌にのせてみると、一口に食べられさうである。それを私は少しづつ惜しんで食べる。そして水筒から番茶の冷えたのを飲む。雲雀が一つすぐ私の頭の上に鳴いてゐる。初夏の雲雀の鳴聲は何となく寂しい音色だ。今頃は、大抵の雲雀は野良から曠野の草山へ移つてゐるのであるが、穂麥の畝間に三番卵をでも孵して、つい山に歸りそこねてゐるのであらう。

私は握飯を食ひ終ると、また歩き出す。草原を横切つて少し行くと、道が麥畑の畦の所でなくなつてゐる。かまはずに畦を歩いて行くと、畑と畑との間に、道とも何ともつかず、人の歩いた跡が

一筋幽かに通つてゐる。

その道を歩いて行くと、麥の穂がさやさやと風に鳴つて、私の肩や背に觸れる。畑中道にはたんぽゝの花が咲きつゞいてゐる。一株掘つて新聞紙につゝんで抱へて行くと、白く乾いた往還に出る。往還には一臺の荷馬車の轅の長いのが置かれてある。車の上には黒い野良着に、それでも赤い模樣のある帶をして、手拭で顏を隱すやうにした若い百姓の女が二人、足を長く投げだして、何かひそひそと話してゐる。

少し行くと、馬が道のはたで青い麥を食べてゐる。その先には黒い牛が路に立ちはだかつてゐる。麥畑のなかに新しく家を建ててゐる人達が見える。柱が白々と光つてゐる。又少し行くと十字路に出る。露座の石佛が道の端に合掌してゐる。佛の足のあた

りには、たんぽゝが黄いろく叢り咲いてゐる。木の葉に載せて何か上げてある。四辻の一軒家の障子には、「酒さかな」と書いてある。その家の細い道をはひつて行くと、櫟や犬しでの混生林が私を待つてゐる。林には涼しい風が枝を動かしてゐる。私はその林のなかにはひつて、少し疲れたので、草を藉いて横になる。私の顔の直ぐそばに銀蘭が白く動いてゐる。手のところには羊齒がうす紅く若葉を出してゐる。日の光がちらちらとこぼれて來る。仰いで見ると、犬しでの軟かい若葉を透して日のありどころが解る。風に梢が搖れる度にちらちらと光がこぼれるのだが、少しもまぶしくはない。此處で寢ながら、私はまた風呂敷を披いてゆで卵を食べる。

林のはづれは野路になつてゐるので、時折人が通るが、私の寢

てゐるのに氣がつかない。小娘が大きな青い藥罐を提げて通る。野良へお茶を運んで行くのである。

私はいつしかよい心持になつて、ついうとうと眠る、頭の上で木の葉が涼しさうにさゝやいてゐるなと思ひながら。

二三十分も眠つたらしい、私は自然に眼覺める。手に何か軟かい草の葉が觸れるので、折取つて見ると蕨である。私は歸りにはこの蕨と羊齒とを掘つておみやにしよう。

私は寢ながら色々な空想をする。去年の地震の時に庭に野宿した涼しさを思ひ出すと、今年の夏は、武藏野の林間を家族連れでテント旅行をしようと考へる。先づ八疊敷位のテントを一張り買入れる。疊椅子を二脚と、やはり折疊みの出來る卓子を一脚、それに白い毛布が三四枚あれば、それでもうよささうだ。ささう

仙石原 神奈川縣足柄下郡仙石原村。冠嶽の北、早川の間にあり。

う石油ランプ一箇に懐中電燈も要る。食料品は畫間附近の村から買ひあつめれば心配はない。

さて私達は、いよいよ林間のテント旅行に、一週間位の豫定で出かける。そして畫間は野を歩き廻る。疲れる頃に日が暮れる。林間にテントを張つて一夜の寢床をつくる。石油ランプと思つたが、提燈の方がよい。提燈に灯を入れて木の枝に吊す。其の下で簡素な晩餐を濟ます。子供達は疲れてゐるので、すぐにテントの中にはひつて寢て仕舞ふ。長男の方は、二三年つゞけて學校から箱根の仙石原にテント旅行に行つてゐるので、馴れてゐる。長女の方も、今年からは學校から行けるのであつたが、まだ地震の憂があるのでこの夏は一年休むことになつた、といふやうな話をしながら、やがて眠つて仕舞ふ。私もそのそばに寢る。テントの上の

木の葉が涼しく風に鳴つてゐる。なに、蚊がゐるだらうつて。さうか、なるほど、蚊が居るかな。少し位なら蚊遣りを焚いて我慢しよう。どうせ疲れてゐるから、すぐ寢ついて仕舞ふ。

朝は早く、空がしらじら明けになつた頃起きる。無論子供が先づはね起きて、大きな聲で戲れるので、私もすぐ眼を覺ます。顏は林の出はづれの田圃へ行つて灌漑用水で洗ふか、村に行つてどうせ飲料水を貰つて來なければならないから、其の時冷たい井戸水で洗ふことにする。さうさう、アルコールランプも一つ必要だ、湯だけは沸かさなければならないから。

村の牛乳屋から買つて來た搾りたての牛乳とパンとで、簡單な朝飯を濟ませる。子供達はクレオンで林間の寫生をはじめる。私は組立椅子と卓子とを持出して、其處で讀書をしたり、手紙を

書いたりする。

少し歩かうといふので、また林間から林間へ移つて行く。途中でパンやら卵やらを買つたり、手紙を村のポストへ入れたりして、何處といふあてもなく、青い草、綠の林を追うて旅をつゞける。さうさう、此のテント旅行には、是非とも犬を同伴する必要がある、彼も家族の一員だから。

こんな風に私の空想は果てしなくつゞく。

日暮近く、私は兩手に抱へきれないほど、林間で掘取つた色々の雜草を抱へて、停車場への通りを急ぐ。私の服の上着も、ズボンも、草の匂がぷんぷんしてゐる。（綠草心理）

吉村冬彥 本名寺田寅彥。理學博士。東京帝國大學教授。明治十一年生。

一〇 蜂の巢

吉村冬彥

宅の四つ目垣には野生の白薔薇を絡ませてあるが、夏が來るとこれに一面に朝顏や花豆を這はせる。其の上に自然に生える烏瓜も絡んで、殆ど隙間のない位に色々の葉が密生する。朝、戸をあけると、赤・紺・水色・柿色さまざまの朝顏が咲揃つて居るのは、かなり美しい。夕方が來ると、烏瓜の煙のやうな淡い花が繁みの中から覗いて居るのを、蛾がせゝりに來る。薔薇の葉などは隱れて見えない位であるが、垣根の項上からは幾本となく勢の好い新芽を伸ばして、これが眼に見えるやうに日々生長する。これに又朝顏や豆の蔓がからみ着いて、何處までも空へ空へと競つて居るやうに見える。

此の盛な勢で生長して居る植物の葉の茂りの中に、枯れかゝつたやうな薔薇の小枝から、煤けた色をした妙なものが一つぶら下つて居る。それは蜂の巣である。

私が初めて此の蜂の巣を見付けたのは、五月の末頃、垣の白薔薇が散つてしまつて、朝顔や豆がやつと二葉の外の葉を出し初めた頃であつたやうに記憶して居る。花の落ちた小枝を剪つて居る内に、氣が付いてよく見ると、大きさはやつと拇指の頭位で、まだほんの造り始めのものであつた。これにしつかりしがみついて、黄色い強さうな蜂が一つ働いて居た。

蜂を見付けると、私は中庭で遊んで居る子供達を呼んで見せてやつた。都會で育つた子供には、こんなものでも珍らしかつた。蜂の毒の恐ろしい事を學んだ長子等は、何も知らない幼い子に

いろんな事を云つて、警しめたりおどしたりした。自分は子供の時に蜂を怒らせて耳たぶを刺され、三七草の葉をもんですりつけた事を想ひ出したりした。あの時分はアムモニア水を塗るといふやうな事は誰も知らなかつたのである。

とにかく、こんな處に蜂の巣があつてはあぶないから落してしまはうと思つたが、蜂の居ない時の方が安全だと思つて、其の日は其の儘にして置いた。

それから四五日はまるで忘れて居たが、或朝、子供等の學校へ行つた留守に、庭へ下りた序に、思ひ出して覗いて見ると、蜂は前日と同じやうに、軀を逆樣に、巣の下側に取付いて仕事をして居た。二十位もあらうかと思ふ六角の蜂窩の一つの管に繼ぎたしをして居る最中であつた。六稜柱形の壁の端を顎でくはへてぐ

るぐると廻つて行くと、壁は二ミリメートル位長く延びて行つた。其の新たに延びた部分だけが際立つて生々しく見え、上の方の煤けた色とは著しくちがつて居るのであつた。

一廻り壁が繼ぎ足されたと思ふと、蜂は更にしつかりとからだの構をなほして、そろそろと自分の頭を今造つた穴の中へ挿入れて行つた。如何にも用心深く、徐々と體を曲げて、頭の見えなくなる迄挿入れたと思ふと、間もなく引出した。穴の大きさを確めて、始めて安心したと云つたやうに見えた。そしてすぐに隣の管に取りかゝつた。

私は此の歳になる迄、蜂の此のやうな擧動を詳しく見た事がなかつたので、強い好奇心に驅られて見て居る内に、此の小さな昆蟲の巧妙な仕事を無慚に破壞しようといふ氣には、どうして

もなれなくなつてしまつた。

それからは、時々庭へ下りる度にわざわざ覗いて見たが、蜂の居ない時は寧ろ稀であつた。見る度に六稜柱の壁は段々に延びて行くやうであつた。

ある時は顎の間に灰色の泡立つた物質を一杯溜めて居る事が眼についた。そして壁を延ばす代りに、穴の中へ頭を挿しこんで内部の仕事をやつて居る事もあつた。しかし、それがどういふ目的で何をして居るのだか、自分には分らなかつた。

其の内に私は何かの仕事にまぎれて、しばらく蜂の事は忘れて居た。多分半月程たつてからと思ふが、或日ふと想ひ出して覗いて見ると、蜂は見えなかつたのみならず、巣の工事は前に見た時と比べて、ちつとも進んで居ないやうであつた。なんだか豫想

が外れたといふだけでなしに、一種の極輕い淋しさといつたやうな心持を感じた。

それから後は何時迄たつても、もう蜂の姿が再び見えなかつた。私はどうしたのだらうと、色々な事を想像して見た。往來で近所の子供にでも捕へられたか、それとも私の知らないやうな自然界の敵に殺されたかとも考へて見た。しかし又此の蜂が今現に何處か遠い處で、知らぬ家の庭の木立に迷つて、あてもなく飛んで居るやうな氣もした。

私は親しい友達などが死んだ後に、獨りで街の中を歩いて居ると、ふと其の友が現に同じ東京の何處かの町を歩いて居る姿をありありと想像して、云ひ知れぬ淋しさを感ずる事があるが、此の蜂の場合にもこれとよく似た幻を頭に描いた。そして強い

カンナ（だんどく）（曼華）
Canna

眩しい日光の中にきらきらして飛んで居る蜂の幻影が、妙に淋しいものに思はれて仕方がなかつた。

今日覗いて見ると、蜂の巣のすぐ上には棚蜘蛛が網を張つて、其の上には枯葉や塵埃が一杯にきたなくたまつて居る。蜂の巣と云ひながら、やつぱり住む人がなくて荒果てた廢屋のやうな氣がする。此の巣のすぐ向う側に眞紅のカンナの花が咲亂れて居るのが、一層蜂の巣をみじめなものに見せる。

私はともかくも此の巣を來年の夏まで此の儘そつとして置かうと思つて居る。來年になつたら、此の古い巣に何事か起りはしないかといふやうな豫感がある。（冬彦集）

新井白石 名は君美。將軍德川家宣の侍講。享保十年（一七二五）歿、年六十九。

わが父 正濟。久留里侯土屋利直に仕ふ。その先新田氏に出づ。

戸部 コブ。民部省の唐名。久留里侯土屋利直をその官名により て呼びしもの。

一　蚊

新井白石

わが父致仕の後、事にふれて宣ひたりしには、「蘆澤といひしものは、幼き時に父におくれしを、其の父の遺領賜うて近く召使はれしに、それが二十歳ばかりに及びし比に、我を召す事ありて參りしに、戸部は物に腰かけて、打刀を横たへておはします。其の氣色常にかはりぬと思ひしに、『近くまゐれ。』とありしかば、腰刀をとりて參らんとせしに、『そのまゝにて參れ。』とありしによりて、近く參りしに、『たゞ今蘆澤を召出して手づから誅すべし。それにさぶらふべし。』と宣ひ出したり。答へ申すこともなくてありしに、やゝありて、『いらへ申す事もなきは、思ふ所やある。』と仰せられしほどに、『さん候、かれが常々申し候ひしは、いとけなき時に父におくれ

し身の、莫大の主恩によりてかくまで生長しぬ。此の恩に報いまゐらせぬこと、世の常の人々の如くしては協ふべからずと申す。天性不敵なるものの、しかも年なほ若くして、をこの振舞も多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらん。但し若く候時に彼が如くなるものにあらずしては、年たけ候ひし後に、物の用には立たぬもの多く候はんか。これらの事を存じめぐらし候につきて、御答の遲く候ひしは、恐れ思ふ所に候。』と申す。又のたまひ出す事もなく、我も亦申す事もなくしてさぶらふほどに、やゝありて面に蚊の集りぬるに、『逐ふべし。』とのたまひしほどに、顏を動かしければ、血に飽きて胡頽子の如くになりし蚊の、六つ七つはらはらと地に墜ちしを、懷の紙をとり出して、つゝみて袖にしてさぶらふ。又やゝありて、『罷り歸りて休み候へ。』とのたまひしかば、退

出す。かの男は常に酒を好みて醉ひ亂れゐる事どもありしかば、關といひし人のそれに親しかりしを語らひて、二人して、まづ酒を斷たしめて、常に諫めし事ども怠らず。かくて年月經し後に、つひに父の職をも仰せ蒙りたりき。今は戸部もうせ給ひぬれど、はじめ我が申せしことばの空しからざるやうに仕へまゐらせよと思ふなり。」と宣ひたりき。これは、かの人久しくして、また酗酒の事ありしが故なり。（折たく柴の記）

折たく柴の記 三卷。新井白石の隨筆。父祖の事及び自己の經歷を平易なる和漢混淆文にて記せるもの。

蒼顏鐵ノ如ク鬢銀ノ如シ　紫石稜稜電人ヲ射ル
五尺ノ小身渾テ是レ膽　明時何ゾ用ヒン麒麟ニ畫カルルヲ

新井白石

三　蜃氣樓

橘南谿

橘南谿 名は春暉。德川時代の醫者・文學者。文化三年（一八〇六）歿、年五十三。

蘇東坡 宋の大文豪。名は軾、字は子瞻、東坡はその號。

魚津 富山縣

唐土の詩文にも多く作りてもてはやせる蜃樓といふことあり。又海市といふ。海上に雲の如くに氣立ちのぼりて、樓臺城郭の形をあらはし、其の中に人馬往來せるまでも、まのあたり見ゆるなり。唐土の書物にいへるは、これ大海の底にある大いなる蛤の氣を吐きて、空中に樓閣の形を現すなりと。又蜃といふは其の形龍の如きものにして、海中に住んで、氣を吐きて樓臺を結ぶなりと。蘇東坡なぞも南海に遊びし時、龍神に祈りて蜃氣樓を見、詩を作りし事あり。唐土にては甚だ珍らしがりて賞玩することとぞ。

我が國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此の蜃氣樓は甚だ稀なり。只越中の魚津といふ處に、毎年三

下新川郡。

天の橋立 京都府與謝郡。日本三景の一。

富山 今の富山市。

月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして、風收り、海上霞み渡りて、一面の鏡の打曇れるが如き日に、此の蜃氣樓をむすぶ。毎年一兩度、或は多き年は三四度も結ぶことあり。誠に唐土の人のいへる如く、海上に煙のごとく雲のごとく次第にむすび來りて、遂には樓臺のごとく、或は城郭の如く、人馬往來せる如きも、歴歴然として見ゆ。北地に我が親しく交りし宮島式部太夫といふ社人は、折よく魚津にてこれを見たり。初は幕を引けるが如くなりしが、しばらく見る間に城郭の如く、矢倉・高屏やうのものも見え、矢間などの如きものも見えしが、又暫くする間に、松原の如く、繪にかける天の橋立などのやうにも見えぬ。夕暮に及び風少し出でたれば、漸々に消え失せて痕形もなくなりしとなり。富山よりは纔かに六里隔てたる處なれば、城下の人々皆見物したく思

絲魚川 新潟縣西頸城郡。

絵山茂肅 名は造。絲魚川の素封家。儒者。寛政六年(一四五四)歿。

へども、何時に結ぶかもしれ難く、又結びたる時、急に人して告げしらすとも、其の間には消え失せて見るべからず。此の故に魚津近處の海邊の人は例年見る事なれど、二三里を隔てたる地方の人は一生涯つひに見ざる人多し。

余が越中にありし時も、三・四月の間を魚津に逗留して蜃樓を見るべしと人々に勸められ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし比は正月・二月なれば、それより三・四月まで越中に逗留せんことあまり永々しければ、殘念なりしかども見ずして越後にこえたり。越後の絲魚川にて松山茂肅に此のことを語りしに、此の人も絲魚川の海中遙かに山の出で來るを見たり。漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて折々見ることなりといひしと語られき。余初め唐人の作れる詩などを見て思ひしは、蜃樓は大

洋にある事にて、陸地近き入海にはなきことのやうに心得しが、魚津の地理を見るにさにはあらず。魚津は北海に臨める地なるに、向うの方七八里と思ふ程に、能登國の山を屏風の如くに見る。魚津の海は東よりの入海なり。海中より蒸し騰る陽氣が、向うの山に映じて色々の形を見するなり。向うに當なく、數百千里見はらしたる大海にては陽氣のぼると雖も、向うの當無ければ映ずることなくして、人の目に見えがたしと覺ゆ。伊勢の桑名の海にも三十年五十年の内には、たまたま蜃樓を結ぶ事ありといふ。これも向うに尾張・三河の山を受けてある故なるべし。また安藝國にてもたまたまはありといふ。これも向うに山あり。その外の國にては蜃氣樓をむすぶ事いまだ聞かず。奇を好む人は三・四月の頃越中に遊びて、此の樓臺を見るべきことなり。（東遊記）

桑名　三重縣桑名郡。

東遊記　五卷著者が東海・東山・北陸を遍歷せる間に見聞せる奇事異聞を錄せる書。

芥川龍之介　東京帝國大學英文科出身。文學者。昭和二年歿、年三十六。

島々　長野縣南安曇郡。

一三　槍ヶ嶽紀行

芥川龍之介

島々といふ町の宿屋へ着いたのは、午過ぎ――もう夕方に近い頃であつた。宿屋の上り框には、三十恰好の浴衣の男が青竹の笛を鳴らしてゐた。

私はその癇高い音を聞きながら、埃にまみれた草鞋の紐を解いた。其處へ婢が淺い盥に洗足の水を汲んで來た。水は冷たく澄んだ底に、粗い砂を沈めてゐた。

二階の縁側の日除けには、日の光が強く殘つてゐた。そのせゐか、疊も襖もいかにもむさくるしく見えた。夏服を浴衣に着換へた私は、昨日東京をたつ時に買つた本を少し讀んだ。

日がかげると、さつきの婢が、塗の剝げた高盆に湯札を一枚の

せて來た。さうして、湯屋は向側にあるから一風呂浴びて來てくれといつた。

それから繩の緒の下駄をはいて、石高な路の向うにある小さな錢湯へはひりに行つた。湯屋は着物を脱ぐ所が、やつと二疊ばかりしかなかつた。

客は私一人ぎりであつた。もう薄暗い湯壺に浸つてゐると、ぽたりと何かが湯の上へ落ちた。手に掬つて、流しの明りに見たら、馬陸といふ蟲であつた。手の平の水の中に、その褐色の蟲がはつきりと伸びたり縮んだりするのを見る事は、妙に私を寂しくさせた。

槍ケ嶽 日本北アルプスの最高峯。海拔三一八〇米。

ランプ Lamp

湯屋から歸つて晩飯の膳に向つた時、私は婢に槍ケ嶽の案内者を一人頼んでくれといつた。婢は早速承知して、竹の臺のランプに火をともしてから、一人の男を二階に呼び上げた。それは先刻上り口で青竹の笛を吹いてゐた男であつた。

「槍ケ嶽の事なら、この人は緣の下の塵まで知つて居ります。」

婢はこんな冗談をいひながら、膳を下げて行つた。

私はその男にいろいろ山の事を尋ねた。

男が階下へ去つた時、私はすぐに床を敷いて貰つて、古蚊帳の中に横になつた。戸を開け放つた緣側の外には、暗い山に唯一點、赤い炭燒きの火が動いてゐた。それがかすかながら私の心に、旅愁ともいふべき寂しさを運んで來た。

やがて婢が戸をしめに來た。戸の走る度に、山の上の星月夜が

私の眼界から消えて行つた。間もなく私の寢てゐるまはりは、古蚊帳に四方を遮られた、行燈ばかりの薄暗がりになつた。私は大きな眼をあきながら、古蚊帳の天井を眺めてゐた。するとあの青竹の笛がかすかに又階下から聞えて來た。

山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから、何匹かの獸が走り去つた。

「畜生、鐵砲さへあれば逃しはしないのだが。」

案内者は足を止めて、忌々しさうに舌打をしながら、路ばたの橡の大木を見上げた。橡の若葉が重なり合つて、路の上の空を遮つた枝には、二匹の小猿をつれた親猿が、靜かに私達を見下してゐた。私は物珍らしい眼を擧げて、その三匹の猿が徐ろに梢を傳つ

て行く姿を眺めた。が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。彼は立去り難いやうに、橡の梢を仰ぎながら、礫を拾つて投げたりした。

「おい、行かう。」

私はかう彼を促した。彼はまだ猿を見返りながら、澁々又歩き出した。私は多少不快であつた。

路は次第に險しくなつた。が、馬が通ると見えて、馬糞が所々に落ちてゐた。

さうしてその上には、蛇の目蝶が、澁色の翅を合はせた儘、何羽もぎつしりと止つてゐた。

「これが德本の峠です。」

德本峠より上高地への途中の峠。海拔二一三二米。

德本峠より穂高山・梓川を望む

案内者は私を顧みて言つた。私は小さな雜囊の外に、何も荷物のない體であつた。が、彼は食器や食糧の外にも、私の毛布や外套などを堆く背負つてゐた。それにも關らず峠へかゝると、彼と私との距離は、だんだん遠く隔たり始めた。三十分の後、とうとう私はたつた一人山路を喘いで行く旅人になつた。うす日に蒸された峠の空氣は、無氣味な靜寂を孕んでゐた。馬糞にたかつてゐる蛇の目蝶と蓙を煽つて行く私と、――それがこの急な路の上に、生きて動いてゐるすべてであつた。

と思ふと、鈍い翅音がして、青黑い一匹の馬蠅がべたりと私の手の甲にとまつた。さうしてそこを鋭く刺した。私は一打ちにその馬蠅を打ち殺した。「自然は私に敵意を持つてゐる。」――そんな迷信じみた心持が一層私をわくわくさせた。私は痛む手を抱へ

梓川 源を槍ケ嶽・常念岳に發し、上高地の盆地を經て、東北流して犀川に合す。

嘉門治 上條氏。もと獵師にて日本アルプス開拓者を案内して以來、案内者と

ながら、無理やりに足を早めだした。

その日の午後、私たちは水の冷たい梓川の流を徒渉した。川を埋め殘した森林の上には、飛騨・信濃境の山々が、――殊にうす曇つた穗高山が、巍然として私たちを見下してゐた。私は無愛想な案内者の尻について、漸く對岸を蔽つてゐる熊笹の中へ辿り着いた。稀に熊笹が疎になると、雁皮らしい花の黃色く咲いた濕氣の多い草の間に、放牧の牛馬の足跡が見えた。

程なく一軒の板葺の小屋が熊笹の中から現れて來た。これが名高い嘉門治の小屋であつた。案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた荷物を其處へ下した。小屋の中には大きな圍爐裡が、寂しい灰の色を擴げてゐた。案内者はその天井に懸けてあつた

して知られ上高地の主と稱せられし人。

長い釣竿を取り下してから、私一人を後に殘して、夕飯の肴に供すべく、梓川の山魚を釣りに行つた。私は蓙や雜囊を捨てて暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると熊笹の中から、大きな黑斑の牛が一匹、のそのそ側へやつて來た。私は稍不安になつて小屋の戸口へ退却した。牛は潤んだ眼を擧げてじつと私の顏を眺めた。それから首を横に振つて、もう一度熊笹の中へ引返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感じながら、ぼんやり卷煙草に火をつけた。

曇天の夕燒が消えかゝつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串に刺して炙つた山魚を肴に、鍋で炊いた飯を貪り食つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を卷いて造つた原始的な燈火をともしながら、夜が戸の外に下つた後も、いろいろ山の事

を話し合つた。白樺の火と榾の火と、——この明暗二種の火の光は、既に燈火の文明の消長を語るものであつた。私は小屋の板壁に濃淡二つの私の影が動いてゐるのを眺めながら、山の話の途切れた時には、今更のやうに原始時代の日本民族の生活なぞを想像せずにはゐられなかつた。

雜木の重なり合つたのを押し開いて、もう一度天日の光を浴びると、案内者は私を顧みながら、

「此處が赤澤です。」

と云つた。私は鳥打帽を阿彌陀にして、眼の前にひらけた光景を眺めた。

私の前に横たはるものは、立體の數を盡くした大石であつた。

赤澤　梓川左岸にあり、上高地方面より槍ヶ嶽へ上る途中の一峯。

それが狹い峽谷の急な斜面を滿たしながら、空を劃つた峯々の向うへ、目のとゞく限り連なつてゐた。もし形容の言葉をつければ、正に小さな私たち二人、遠い山巔から漲り落ちる大石の洪水の上にゐるのであつた。

私たちはこの大石の溢れた谷を、蟲の這ふやうに登り出した。暫く苦しい歩みを續けた後、案内者は突然杖を擧げて、私たちの左手に續いてゐる絶壁の上を指さしながら、

「御覽なさい。あすこに青猪がゐます。」

と言つた。私は彼の杖に沿うて視線を絶壁の上に投げた。すると荒削りの山の肌が、頂に近く偃松の暗い線をなすつた處に、一匹の獸が見えた。それが青猪と云ふ異名を負つた日本アルプスに棲む羚羊であつた。

日本アルプス 飛騨山脈の別稱。長野・岐阜・富山三縣の境にある大山脈。

やがてその日も暮れかゝる頃、私たちの周圍には、次第に殘雪の色が多くなつて來た。それから石の上に枝を擴げた寂しい偃松の群も見え始めた。私は時々大石の上に足を止めて、何時か姿を露はし出した槍ケ嶽の絶巔を眺めやつた。絶巔は大きな石鏃のやうに、夕燒の餘炎が消えかゝつた空を、何時も黑々と切拔いてゐた。「山は自然の始にして又終なり。」——私はその頃を眺める度に、かう云ふ文語體の感想を必ず心に繰返した。それは確か以前讀んだラスキンの中にある言葉であつた。

槍ケ嶽

ラスキン Ruskin (1819—1900) イギリスの美術家・社會評論家。改革家。

その内に寒い霧の一團が、もう暗くなつた谷の下から、大石と偃松との上を這つて私たちの方へ上つて來た。さうしてそれが四邊を包むと、俄かに小雨交りの風が私たちの顏を吹き始めた。

私は漸く山上の高寒を肌に感じながら、一分も早く今夜宿る無人の岩室に辿り着くべく、懸命に急角度の斜面を登つて行つた。が、ふと異樣な聲に驚かされて思はず左右を見廻すと、あまり遠くない偃松の茂みの上を、流れるやうに飛んで行く褐色の鳥が一羽あつた。

「何だい、あの鳥は。」

「雷鳥です。」

小雨に濡れた案內者は、剛情な歩みを續けながら、不相變無愛想にかう答へた。（梅・馬・鶯）

窪田空穗 名は通治。早稻田大學教授。明治十年生。

露營地 日本アルプス中の赤岳山上。

一四 露營

窪田空穗

露營地へ着いた時には、まだ日がかなり高くて、岩も草も光つてゐた。暮れるに遲い夏の日は、暮れるまでには相應な間があるやうに思はれた。それがいつのまにか暮れかゝつて、眼をとめて見ると、光は空だけのものとなつてゐる。そしてその空も靑ざめて、晝の盛りの光で見る時の活き活きした力を失つてしまつてゐた。露營地へ着いて寢るまでの間は、卽ちじつとして山に向つて居られる間は、一日の中で一番山嶽氣分の濃くなる時である。危險な道を歩いてゐる時は、山は足の下に縮まつて來て、山と足の下とは一つのものになつてゐる。仰ぎ見廻す山は偉力を示してはゐるが、こちらの張切つた心には、その偉力は恐ろしいもの

とはならずに、寧ろ美しく耀かしい誘惑的なものに見えて來た。

それがじつと動かずに見てゐると、山は限りなく大きく靜かに、その反對に自分は極めて無力なものとなつて來る。そこには寂しさに似た感がある。その寂しさが單なる寂しさでなく、清けさを持つた寂しさなので、一種の快さとなつて受入れられるのである。

露營

夜は今薄靄のやうにあたりに漂つて來た。テントの側で人夫の焚いてゐる火は、次第に赤い色を加へて來た。見ると、人夫は夕飯を食べる支度をしてゐる。

テント Tent 天幕。

その時である、何所かへ遊びに行つてゐた學生の一行は、揃つ

て騷ぎながら南の方の偃松帶の邊から近づいて來た。

一番大きな青年が手に何かを握つてゐる。外のものはそれを珍らしがつて覗いて見ようとする。大きな青年は手を差上げて惜しさうにして見せてゐる。それが影繪のやうに見えながら、私たちの側まで來たのである。

「何です。」

と、私は大きな青年に訊いた。

「雷鳥の雛です。」

「いけませんよ。」

と、私は強く首を振つて、その事の惡い意を示した。

「叱られますよ。」

本當は、私は叱られるか何うかを知らなかつた。すぐに感じた

のは、何れはおもちやにして殺してしまふにきまつてゐる、それが可哀さうだと思つただけであつた。

「いけませんか。」

と、その青年は慌てて訊いた。その眼には呆れた色が無邪氣な色と一緒になつて現れた。

「どうしたらいゝでせう。」

「どうつて爲方がないな。放しておきなさいよ。」

青年は「何處へ放したらいゝだらう。」といつたやうに、まごまごして、手に握つてゐる雛を眺めた。私は

「そこいらに置けばいゝでせう。あの石の上がいゝ。可哀さうに。」

と云つた。青年は云はれた通りに、少し先の低い草の中に高く見える一つの石の上に置いて來た。

焚火を圍んだ時には、案内者は一團の者の氣を兼ねながらも、併し、しつかりとした口調で、雷鳥を捕つてはならないこと、分らないつもりでも、何うかして分つて、そのために案内者が迷惑することを云渡した。

學生連中は默つて、困つた顏をしてゐた。

「あの雛はどうなるだらう。死にやしないか知ら。」

と、私は氣にして云つた。

人夫の一人は、

「親鳥が捜しに來ますよ。鳴聲で分るんです。」

と云つた。

食事が濟んで、そろそろ寢ようといふ時であつた。山はすつかり暗くなつてしまつて、空は青黑く高くなつた。赤く燃える生木

の焚火をかこんで、私たちは沈默がちになつてゐた。あたりには何の音もなかつた。

ぴよ、ぴよといふ聲が遠く微かにした。その聲はみんなの耳に入つた。

「雷鳥の親が搜しに來た。」

と、一人が云つた。

みんな其の方に耳を欹てた。

ぴよ、ぴよと云ふ聲は續いて起つた。

そして闇の中をさまよつてゐるのが聞えた。近くなるかと聞くと遠くなつて行つた。

「雛が返事をするといゝんだ。敎へてやりやうもない。」

雷鳥

私たちはさう云つて、親鳥に雛の居場所の分らないのをもどかしがり出した。

「今に分るだらう。」とも云つたが、それは自分を慰めるに過ぎないといふ氣がした。

翌朝、眼が覺めてテントから這ひだすと、私たちは雛鳥を置いた石のところへ行つて見た。雛は居なかつた。その邊を見廻したが、何處にもその姿は見えなかつた。

「寒い、寒い。」と、みんな肩を窄めた。

「水が凍つてゐた。昨日溶けたのが凍つてしまつた。」

雪溪へ顏を洗ひに行つたものが、さう云つて歸つて來た。

サックの中から寒暖計を出して見て居た一人は、

「東京の酷寒ですね。」と云つた。

「今夜はもつと寒くなりますよ。」

と、案内者は得意なやうな顔をして云つた。

昨夜大事にして焚餘してあつた偃松の生木は、白い煙を立てて、黎明のさわやかな大氣の中に燃出して來た。

（日本アルプス縱走記）

山の上の梅の木肌は粗々しまなこにしみて
明けそめにけり　島木赤彦

山のうへの岩にむらがりてさく花の紫深し
露寒みかも

伊藤左千夫 歌人。大正二年歿、年五十。
沼津 静岡縣駿東郡の市。舊東海道五十三次の一驛。
昔の東海道 德川時代の江戸より京都に至る街道。
子持川 千本松原と沼津市街地との間を流る。
千本松原 沼津市に屬し、駿河灣に臨む海濱の總稱。今公園。

一五　六代松

伊藤左千夫

沼津の町の細い横丁を二曲り三曲りして、昔の東海道へ出た。右へ少し行つて町を出てしまふと、小さな川がある。子持川とかいふさうだ。此の川の縁を行くと、千本松原はすぐ眼の前に横たはつてゐる。幾萬本あるか分らぬ程の松が背くらべをして、雲を突いてゐる。天氣が曇つてきて雨模樣であるから、松の梢が雲に屆いて居るやうだ。

松原の中へ這入つてみると、外から見たよりも一層立派な松原である。三かゝへもある古木が相競うて十丈以上に高く立つて居る。其の壯快な趣は何とも形容が出來ない。根上りの松も、庭の植木や盆栽の不自然なのは極めて厭味なものであるが、此處

では風が砂を吹きさらつて、自然に根上りとなつて居るので、頗る趣がある。巨大な幹や、繁り繁つた枝や葉をしつかりと支へて居る根張りの力が、十分其の形に顯はれて居る。實に見る眼も氣持がよい。

眞城山・大瀨崎 靜岡縣田方郡。

久能山・三保 靜岡縣安倍郡。

松原を出ると、芝原に空屋らしい家が一軒ある。其の前を通つて波打際へ降りて見る。海は極めて穩かで、伊豆の眞城山・大瀨崎など手に取るやうに見える。西の方、久能山・三保など薄黑い雲のやうである。のたりのたりと波がよせる。潮水は透明で、底の砂利が美しく見える。予は白い小石を拾ひ、赤い小石を拾ひ、青い小石を拾ふ。白いのが最も美しい。水中に在るのが殊に美しく見えるので、波の引いた處へつけ入つて取らうとする。復、波がすぐ寄せて來る。波が引く、取らうとする。復、波がすぐ寄せ返す。到頭片足の

鈴川 靜岡縣富士郡元吉原村にある舊宿場。

六代松 平維盛の長子六代、平氏滅亡の後此の地にて將に刑せられんとせし時、鎌倉より赦免の使者到着して刑を免れし遺跡。

足袋を濡したが、其の小石は取れなかつた。波が石を惜しんでゐるやうだ。三十間許りの沖を、鵜が三羽かづいては泳ぎ、かづいては泳ぎ、東の方へ泳ぎ行く。鈴川の邊から小舟が二艘、ゆたゆたと櫓を押して來る。のたりのたりの波と能く調和して居る。煙のやうな風が吹いて、天氣が一層ぼんやりとして來た。

千本松原

予は六代松を見る心組であるから、此の邊から上つたらよからうと氣づいて、松原に向つて上つた。松原を通り抜けて里へ出る道がついて居る。其の路端の松の中に荷車を置いて、づんぐりとした親爺が、砂利を磯から荷車へ運んで居る。予が其の親爺に六代松の所在を

助つた人 六代。**從者ども** 齋藤五、齋藤六。**助けた人** 文覺上人。**北條主從** 北條時政主從。

尋ねると、親爺は先づ鉢卷の手拭を外し、姿勢を正して答へた。

「はい、六代松で御座いますか。私は此の村の者ではありませんが、人樣に尋ねられてもと思ひまして聞いて置きました。六代松と申しても松はありません。あそこに墓場があります。向うの垣根と其の墓場との間を右へ曲ると、小さい森が見えます。其の森の中に標の石が立つて居ります。はい。」

予は其の篤實なるに深く心を動かしたのである。

なる程、六代松といふ松は無い。常磐木の小さなこんもりとした森の中に、さゝやかな石が立つて居た。非常に大きな松があつたとの事だが、今は其の根株の跡も判らぬ。幾百の生首を一まとめにして埋めた事跡とは反對で、危き命が助つた人の喜、其の從者どもの喜、助けた人は勿論、守護の任に當つた北條主從に至る

まで嬉し涙にくれた樣、眼の前に見える心持がするのである。

予は松原の中を縱に通つて居る道を歸つて來る。女子供の松葉を掻いて居るのが幾組もある。道理で松原は塵もとめぬほど掃除されてゐる。

此の松原について大いなる愉快を禁じ得ぬ事があつた。それは十餘町も往復する間に、松葉掻に幾組も出逢つて、此の地方の者が松原で焚きつけを求めることが知れたに拘らず、篠一本、小松一本、刃物を以て切つた痕を見なかつた事である。予は斯く心づいてから、餘程注意して見たが、遂に切取つた痕も、折取つた跡も認め得なかつた。如何にも人氣が篤實な地であるといふことが明かに察せられる。此の立派な松原が少しも損はれずに今日に傳はつたのも、決して偶然では無い。官林の事であるから、妄り

靜浦　千本松原より東南、伊豆に近き海濱。

に竹木を切つてはならぬとなつて居るには相違ないが、人氣が篤實でなくて、どうしてそれが行はれよう。何の辨へもない兒童に至るまで、少しも其の禁を犯さぬといふのは、理窟の力でなくて、民衆の美質に由ることは疑ふ餘地もない。始めて沼津に來て、何とはなしに平和の趣を感じた予は、今それを知識的に觀察し得たのである。富士の眺も美しい。靜浦の眺も美しい。千本松原も美しい。併しながら沼津の人氣の篤實な、眼に見えない美しさには迚も及ばないであらう。

此のやうな事を考へながら急いで歸つて來ると、雨がぽつぽつ落ちて來た。予が松原を出ようとすると、松林の小高いところに十二三の男の兒が三人遊んでゐる。其處に居た犬が予を見て俄かに吠えだして、予に向つて走つて來る。男の兒は頻りと犬を

叱る樣子であつたが、予は犬の吠えるのには眼もくれないで出て來る。犬は益々吠える。やがて男の兒は走つて來て、犬を捕へて吠えさせない。予は茲にも一點の美を認めて、もと來た子持川の脇へと出た。見渡した沼津の宿はほんのり霞をこめて、春雨が靜かに降つて居るらしい。（左千夫全集）

八十國の松は見しかど神代なす此松原にしくは
見ざりき　伊藤左千夫

天雲の綠かざしてきほひ立つ奇しき老松かずを
知らずも

高濱虛子 名は清。俳人。明治七年生。
比叡 比叡山京都府と滋賀縣の堺にあり。延暦寺の寺界。
湖水 琵琶湖

一六 比叡の鳥

高濱虛子

寢床を出て、楊枝をつかひながら、湖水の見える部屋に往つて見る。朝日が部屋一面にさしこんで居る。湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼より、やゝ高く、やゝ低く、無數の杉の梢が鉾のやうに突つ立つてゐる。左手には、北谷の向うに當る峯が鋸の齒のやうな杉を背にならべて、湖の方に流れて居る。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄い霞が流れて居る。非常に靜かだ。自分の呼吸の外、浮世の物音は何も聞えぬ。

たゞ此の大地をわが物顏に啼囀つてゐるのは小鳥の聲だ。何といふかはいゝ聲であらう。名がわからぬのが殘念だ。そこの杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又はるか向うの谷深く、他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。また其の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又凛々しい所があつて、其の音の空山に響く趣が何とも云へぬ。これも名のわからぬのが殘念だ。それも一羽ではない、三羽、四羽と、聞くうちにだんだん殖えてくる。前の小鳥が縱絲なら、此の小鳥は横絲のやうに、互に錯綜して能く調和を保つところが面白い。突然けたゝましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の

聲よりもやゝ急調だ。多分山鳥ででもあらうか。前の二つの小鳥で織成した美しい絹を、たゞ一聲に引裂いたかと疑はれる。

暫くして、その聲は谷の底の底、峯の奥の奥に浸みこんでしまつて、そのあとは元のとほり靜かになる。眞先にその靜けさを破るものは鶯の聲だ。絹におかれた絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、又縱絲を織つて、前の小鳥が啼く。また横絲を織つて、次の小鳥が啼く。絣が啼く、縱絲が啼く、横絲が啼く。此の美しい絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひながら待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聽く蛙の聲に能く似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけて呟くのかとも疑はれる。他の鳥の聲々が皆高調で晴々とした中に、ひとり低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は「啄木鳥だらう。」といひ、他の者は「山鳩だら

う。」といつた。

琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うてゐる。杉の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで來て、だんだんと谷が深く見えてくる。（叡山詣）

比叡山にて

をちこちに啼きうつりゆく筒鳥のさびしき聲は
谷にまよへり　若山牧水

おぼらかに何の鳥かも谷あひの大き杉のあひを
まひうつりたる

貝原益軒　名は篤信。儒者。正德四年（一三七四）歿、年八十五。

日新　湯之盤ノ銘ニ曰ク、苟ニ日ニ新ニシテ日々ニ新ニセバ又日ニ新ナリ。（大學）

一七　大和俗訓鈔

貝原益軒

心學に志す人は、日新の工夫を用ふべし。日に新たにすとは、昨日の舊き惡を改めて今日は新しく善に移り、今日は昨日にまさりて新しくなるを、日に新たにすといふ。かくの如くなれば、今日は是にして昨日は非なることを覺ゆべし。かやうにつとめて止まざれば、日々に工夫進み、月には異にして、年には同じからず。一日には一日の功あり、一月には三十日の功あり、一年には三百六十日の功あり、三年には千日の功ありて、德に進み善に移りゆかば、その樂しみ極まりなくして、手の舞ひ足の踏むことを知らざるべし。かくのごとく進み行かば、君子となること必ず期すべし。若し今日は昨日に變らず、今月は前月に異ならず、今年は去年に

同じくば、日に新たにする力なくして、いつまでも愚者にて世を終へんこと口惜し。

疑を人に問ふは、智を求むる道なり。自ら心に道理を思ふは、智を開く本なり。問ふは智を人に求むるなり。思ふは智を我に求むるなり。人に問はざれば、知ること狹くして心に迷解けず。自ら思はざれば、見聞くこと廣しといへども、道を我が心に深く自得せず。

この故に、問ふと思ふとの二つは、理を窮め智を明かにする道にして、學の要なり。

凡そ勤に退屈し、久しく勤め難きは、大方は精力の弱きにはあ

らず、氣隨にして事を勤むるを嫌ひ、心忙はしくて短き故、むつかしく思ひて早く退屈するものなり。心靜かにして事を嫌はず、次第に隨ひて一つづつ漸くに勤むれば、久しく勤めても疲れず、怠なく撓みなければ、靜かにしてもはか行くものなり。

昔二人同じ船に乘りて行くに、一人は性急なり、日和惡しく船の遲きを苦しみて、晝夜心を惱まし形かじけたり。一人は性穩かなり、船の遲きを苦しまず、よく食し安く寢ねて、顏色うるはし。その處に着きしかば、二人一時に陸に上る。この間船遲しとて心を苦しめし者、何の益あるや。唯自ら苦しめるのみ。これ心短き人の戒とすべし。天下の事、我が力に爲し難きことは、唯天に任せ置くべし。心を苦しむるは愚なり。

戰 大正十年、米國に於て、デヴィスカップ獲得庭球決勝戰。

グランド Ground 運動場

チルデン君 William Tilden 2d. (1892—)

清水君 名は善造。

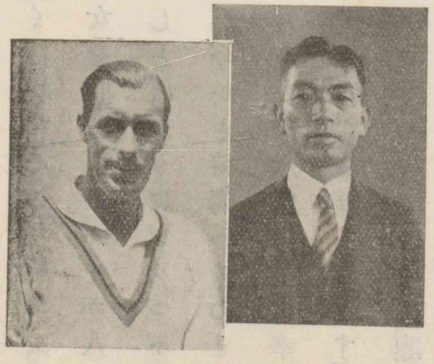
一八 武士道の精神

戰の幕はまさに切つて落されようとしてゐます。掃き清められたグランドの上には白線が美はしく浮いて、心も引緊るやうな清爽な氣分が漂うてゐます。老幼男女を問はず、アメリカ人はいふまでもなく、世界各國の人々がひしとばかりにグランドの周りにつめかけて、兩選手の出場を今か今かと待構へてゐます。チルデン君の上に幸あれかしと祈る人々と、清水君の上に幸あれかしと祈る人々とが、一樣に平和な光に照らされてゐます。

この光の中に、この水を打つたやうな無聲の應援の中に、凛乎とした決意の中にも慘ましい程の苦衷を想はせつゝ、微笑を浮かべて二人はコートの上に現れました。チルデン君は體重二十

一貫、身長六尺二寸、これに對ふ清水君は五尺四寸五分、まるで小供が大人に向つたやうであります。觀覽席では、「氣の毒だが清水君の敗けだらう。」とさゝやくものさへありました。

戰の火蓋は切られました。隙を覗ひ虛を突く龍虎の爭ひが始まりました。秒一秒、チルデン君の球も清水君の球も冴えて來ました。觀覽者は球の動くがまゝに、その瞳を忙しく動かしてゐました。一心不亂に見入つた彼等の瞳に、傷ましくもチルデン君の片足を辷らして取亂した姿が映りました。アメリカ人は驚倒しました、躍起となりました。この時です、清水君がチ



清水とチルデン

ルデン君の取亂した脚元に柔かい程のよい球を送つてやりましたのは。この瞬間の君の心には、優勝した時の名譽感情も、自我感情も全く捨てられてゐたのでせう。

「ミスター、シミズ！」の歡呼の聲が湧き起ると共に、米人三萬の手は一齊に振上げられました。清水君も清水君ですが、米人もさすがに米人でありました。初めコートに出場した時、チルデン君の眉宇には、清水君に對する輕侮の色さへ見えました。そして心ある米人は、その態度に少なからずひやひやさせられた程であります。しかるに清水君は、このチルデン君の輕侮に酬いるにこの溫情を以てしたのです。そしてこの溫情が米人の胸に深い感激を湧上らせたのでありました。英人は日英同盟の舊誼もあり、且は日本の應援者の少い關係も手傳つてか、すつかり清水君贔

ミスター、シミズ　Mr. Shimizu　シミズ君

コート　Court　庭球場

負になつて、盛に同君に拍手を送つてゐました。當時ニューヨークには清水君の郷里である群馬縣出身者が五十五人居りましたが、彼等は總動員で應援に出かけてゐました。かくて敵味方總掛りの喚呼の聲が上げられました。これは單なる清水君の妙技に對して發せられたものではなく、その精神、その靈の閃きに對する嘆美であることはいふまでもありません。清水君同郷の劍聖、上泉伊勢守も定めし地下で莞爾として微笑したことでありませう。

時は一點一分を爭ふ時であります。清水君が五・六・七・八の四箇月にわたつて、十二箇國の選手を薙ぎ倒して、最後の決勝に入つた時であります。若し今明二日間の米選手との競技に於て勝を制し得たならば、日本開闢以來始めてのデヴィス・カップを獲得

ニューヨーク 米國の北東部にあるニューヨーク州の首府 New york

上泉伊勢守 名は秀綱、後武藏守。足利末期の劍道の達人。新影流の祖。

デヴィス・カップ 庭球奬勵のため富豪デヴィスの寄贈せるもの。庭球に於ける世界最高の賞杯。 Davis cup

することが出來る時であります。この時に於て、チルデン君の思はざる窮地を見、同情の球をその手元に送つたことは、實に偉いと思ひます。しかも、清水君は所謂「汝は汝にして汝にあらざる」の時であります。日本國を背負うて立つてをる時であります。この時に於て眞に生きた武士道的精神を示したことは、感歎の外はありません。時代は如何に推移しようとも、フォーレスト・ヒルに於て發揮された清水君の貴い精神は、蓋し世界の庭球史上に特筆せられて、永久にその光輝を放つことでありませう。

初の二回は、七對五、五對四で清水君が勝ちました。流石のチルデン君も顏色がありませんでした。しかし炎暑の際、しかも長時間にわたる持久戰は、同君をして疲勞の極に達せしめ、第三回（スリーセット）から第五回（ファイヴセット）まで續けて敗れました。チルデン君も第二回の休憩の

フォーレスト・ヒル ニューヨーク郊外にあり。年々デヴィスーカップ試合の行はるゝ所。 Forest Hill

際には疲れて倒れ、周圍の人から水を掛けられてゐた位でしたが、休憩中に元氣を恢復し、特に清水君のその後の疲勞に乘じて大いに腕を奮ひました。かくして清水君は遺憾ながら長蛇を逸してしまひました。けれども、勝敗以上の貴い感銘を世界各國の觀衆の胸に刻みつけました。

日は早や西に傾き、わづかに淡い光をグランドの上に殘してゐるのみとなりました。チルデン君は感慨に堪へぬ面持で清水君の前に進み、輝かしい瞳に感謝の想を籠めて、その手を固く握りました。

下位春吉　東京高等師範學校出身。ローマ大學教授。

アドリヤ海　Adriatic Sea　イタリヤの東北、大陸と間の海

アンコーナ港　Ancona　イタリヤ中央東部海岸の港

リッツォ少佐　Luigi Rizzo　イタリヤ海軍中佐。

プレムーダ　Premuda　クロアチヤの群島。

一九　電報

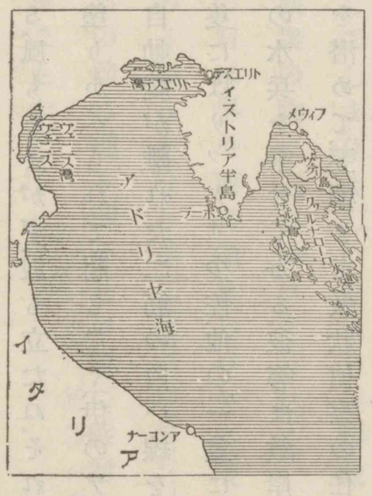
下位春吉

アドリヤ海は今しも夕陽を浴びて眞紅の色に染められてゐる。風もそよがず、波も立たぬ。それが何時ともなしに夕闇の色に塗りかへられて間もなく、伊のアンコーナ港の埠頭から二隻の自動艇が離れた。二筋の白い線を引いて北へ北へと走る。その一隻にはリッツォ少佐、他の一隻にはアオンツォ少尉。何れも六人の水兵を乘せてゐる。彼等は敵岸近きプレムーダの群島中に身を潜めて、翌朝まで敵狀偵察の任に當つた。

二つの籾殼のやうな自動艇は、舳を眞直に小ルッシン島に向けてゐる。着いたのは午前一時頃、その島陰に船を留めて、よき敵もやと待伏せしながら、四方の偵察に忙しい。しかし何等の異狀

もない。時は刻々に移つて午前三時になつた。もはや東明に近い。根據地に引上ぐべき時間だ。リッツォ少佐は歸航準備を命じた。かくて二隻の小艇は相前後してアンコーナに向つた。數十の島島の間を縫うてクワルナローロの水路を南下する中に、東の空はほのぼのと曙が近づいた。地平線上が明るくなるにつれて、水面が暗くなる。二筋の白い線が曉の闇の底に長い。

サンセーゴ島 Sansego I. アドリヤ海の東の島



午前三時二十分、艇がプレムーダの近海サンセーゴ島の南方にさしかゝつた時、鋭いリッツォ艇長の目は、遙かなる地平線上に一點の黒煙を見とめた。すは！と見つめてゐるうちに、見る見

ビリブス・ウニチス Viribus Units 協力の意。

る黒煙は二つとなり、三つ、五つ、八つ、十……幾すぢも幾すぢも林の如く地平線上に現れた。船だ、夥しい船だ。リッツォ艇長は雙眼鏡を取つて、徐ろにその商船なりや、軍艦なりや、その大きさ、隊形等を凝視した。

軍艦である。正しく軍艦である。しかも超弩級の巨艦二隻を中に擁して、その周圍を十隻の驅逐艦が取捲いて進んで來る。中の戰艦は、その著しく後方に傾斜したる煙突と、どつしりした砲塔の恰好から推して、疑もなく墺洪帝國の海軍の重鎮たるビリブス・ウニチス號型だ。二萬噸の巨艦が前と後とに山の動くが如く進んで來る。之を擁護する驅逐艦十隻は、前に一隻、後に一隻、左側に四隻、右側に四隻、その間各約三百メートル。都合十二隻の巨怪が堂々たる隊形を整へて南下して來る。

ペレグリーニ少佐 Mario Pellegrini
ポーラ港 Pola イストリア半島の港
ドレッドノート Dread naught 弩級戰艦。
セベニコ Sebenico ユーゴスラヴィアのアドリア海に面する港。
カッタロ Cattaro アドリア海に面するユーゴスラヴィア南端の要塞。

去んぬる五月十四日、大膽にも伊のペレグリーニ少佐は二名の水兵を率ゐて、敵の根據地ポーラ港に突入しビリブスウニテス號型のドレッドノート、二萬噸の巨艦に肉薄した。一同は敵圍を突破して歸ることが出來ずに、遂に皆捕虜となつた。

敵の海軍はこれに懲りて、ポーラ港の不安を憂へて、南方セベニコ又はカッタロの地に安全の根據地を求めんがために、夜に乘じて密かに南下するのであらうか。それとも更に南下して、土耳古の海軍と合して共同の作業につくためであらうか。但しは又、イタリヤの沿岸を攻撃するためであらうか。何れにしても油斷のならぬ大敵だ。

しかし、とても數に於て敵ではない。こちらは一隻にやうやう七人を乘せ得る小さな小さな自動艇が二隻。總勢十四人で、何千

倍の噸數・人數を有する大艦隊に對抗して戰ふ事は、到底不可能の事だ。一打にして打ちつぶされるのは火を睹るより明かだ。そんな危險を冒さずとも、敵艦を見て之を直ちにアンコーナに報告しても務はすむ。敵に見つからぬやうに密かに根據地に歸るのが當然であらう。

しかし、それはリッツォ艇長のなし得ざる處だ。彼の平常の箴言は、

「進擊せよ。進擊せよ。危險を意とせずして、最も強く最も大なるものを進擊せよ。」

といふのである。彼は電の如く決心した。わづか十四人を乘せた二つの籾殼をもつて、堂々たる敵の大艦隊に向つて突擊しようと。

リッツォ少佐は雙眼鏡をおろして後方につゞくアオンツォ少尉の小艇に信號した。

「見たか。」

すると、アオンツォ少尉が信號を返した。

「分つた。」

それだけである。何と痛快ではないか。こんな痛快極まる信號が又とあらうか。兩艇は更に一語をも交さず、互に大事を默解して、眞一文字に敵の大艦列に向つて突進した。

勇士の決意は鐵のやうである。

リッツォ少佐の指揮する自動艇は、右側第二と第三の驅逐艦の間を突破して、第一の巨艦を、アオンツォ少尉は同じく第三と第四の驅逐艦の間を突破して、第二の巨艦を襲擊することに決

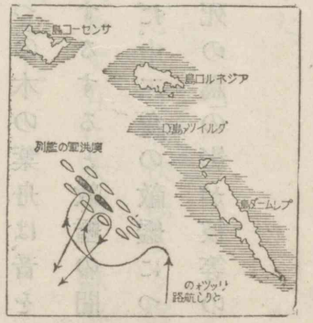
した。

アドリヤ海がほのぼのと明けかゝる。海は穩かに、十四條の黑い煙が林のやうに立つてゐる。淡い靄が海の面を練絹のやうに包んでゐる。各驅逐艦の間は、その距離三町に過ぎぬ。見つかつたらそれつきりだ。極度に速力を緩めた二つの木の葉舟は、音をも立てで、夢の奥にひらめく鳥影のやうに、するすると敵艦の間をすり拔けて、大艦列の眞中にもぐり込んだ。十二隻の敵艦につけられたる數十の哨兵が、誰一人この黑い「死の鳥」の影が彼等の懷にもぐり込んだのに氣づかなかつた。

自動艇からの魚雷發射は極めて困難である。艇は非常に小さい。僅か五六人の人を乘せるのもやうやうな位。無論水雷發射管はない。二個の魚雷を舷側に鎖で括りつけて、鈎でぶら下げて持

つてゐる。それを發射するには、その鈎を外して海中に落すと、魚雷は一杯に詰められた壓搾空氣の力で走り出す。だから發射する時に、自由にその狙を定める事は出來ぬ。艇そのものを目標の方に向けて、魚雷の方向が丁度目標物に向つた刹那に鈎を外さねばならぬ。だから、非常に冷靜沈着な人にして始めてその效果を收め得るのである。

リッツォ艇長は舵手長ゴーリに命じて艇をずんずんと巨艦の右舷間近に進めさせた。その距離今や僅かに百五十メートル。二萬噸のドレッドノートは山の如く鼻先に聳えてゐる。「よし、今！」



先づ右舷の魚雷を飛ばした。その瞬間、輕い自動艇が武者顫ひ

するやうに一搖れ搖れる。リッツォはさらに左舷に飛んで行つて、左方の魚雷を水中に放つた。「よし、やつた！全速力！後退！」

艇は忽ち眞白に波を切つて去る。彼は今一度死を睹して敵の艦列を突破せねばならぬ。

彼の自動艇が第一のドレッドノートの右舷から離れると、すぐに轟然たる二つの爆音が、靜かなるアドリヤ海の曙の靄を劈いた。第一の魚雷は第一・第二の煙突の中間の下方に、第二の魚雷は艦尾の砲塔の下方に命中したのだ。物凄い爆發と共に、忽ち眞黑い煙が空に聳え立つて、その中から赤い焰の舌がめらめらと躍り上る。阿鼻叫喚、一時に艦内から數千の叫聲があがる。死の苦惱の如くに汽笛が長く長く悲鳴する。この刹那、忽ち又第二の巨艦の中腹に第三の爆音があがつた。アオンツォ少尉もまんまと

艦列を突破して、第二の巨艦の右舷に迫り、一個の魚雷を放つたのが命中したのだ。

この瞬時の敵の混亂を想像せよ。

そもや何處から來た。どうして來た。全體何が來た。十隻の驅逐艦に犇々と護られてゐる巨艦が、二隻ともかくの如く襲撃をうけようとは。

敵は大擾亂。各艦からひゞく非常の汽笛。乘組員の騷擾。二艦の急を救ふもの。大膽不敵な伊の小艇をおつとり圍んで砲火を浴びせるもの。

リッツォの艇は忽ち敵の三驅逐艦に見つけられた。彼等は狂ひ立つてリッツォの艇を追ふ。速力に於て、自動艇はとても驅逐艦に及ばない。その大きさに於ては雲壤の差がある。彼はあらゆ

る武器を備へてゐるのに、此方はステッキ位の速射砲一つを載せてゐるだけで、乘組は總員僅かに七人だ。距離は見る間にずんずんと近くなる。一番近い敵の驅逐艦が眞白に波を蹴立てて突進して來る勢の物凄さ。どんどんと浴びせかける砲彈が、艇の四方に數丈の水柱を立てる。

萬事休す。逃れるにはその速力がない。戰ふにはその武器がない。進んで衝突しても、籾殼同樣の自動艇は忽ち微塵に挫かれるばかりだ。何としよう。リッツォの果斷はこゝにある。リッツォの沈着はこゝにある。リッツォの豪勇はこゝにある。

「速力を緩めよ」

命令を聞いて、ゴーリ舵手長が驚いた。

「大丈夫ですか。」

彼は自分の耳の間違ひか、少佐の口の言誤りだと思つたのだ。

「上官の命令だ。」

艇長は獅子の如く吼えた。一同は少佐が發狂したものと思つたさうだ。無理もない事だ。敵艦三隻は「得たりや。」とばかり、狂ひに狂つて邁進して來る。その間僅かに百メートル。

リッツォは莞爾として薄紅の曙の中に微笑んだ。

自動艇は潜水艇と戰ふために二三個の爆彈を積んで居る。これは潜水艇の前路に廻つて水中に投下するものだ。リッツォは逸早く爆彈の一つを擁して、冷やかに敵の近寄るのを待つてゐた。そして敵艦が手の屆くばかり近づいた時、彼は爆彈を船尾の白波の中に放つた。敵艦はそれとも知らず眞一文字に突進して來た。忽ち起る爆發の轟き！驅逐艦の船首は大破損を起して、見

る見るうちに傾いてしまふ。追擊して來た他の二隻も友の危急に心を奪はれて、周章狼狽、今や沈沒せんとする僚艦の兩側に走つた。リッツォの艇を見棄てて。

「萬歲！もう大丈夫！全速力！」

リッツォの小艇は波を切つて、曙のアンコーナの港へ。それにしても心がかりはアオンツォ少尉の艇だ。無事に敵圍を逃れたかどうか。一同が心を碎いて彼方の海を見つめてゐると、遙かに白波を擧げて突進して來る一葉舟、正しくアオンツォの艇。彼方から……此方から……狂喜してイタリヤ萬歲を叫んだ。喜極まつて十有四人は皆泣いた。地平線上に黑煙を見てから、二艇再び此處に相會するまで丁度二十分間。

霧紫に夜は明けて、三色旗が朝風に飜る。海はまだ眠るか、小波

聖ステファノ號 "S. Stefano"

テゲトフ號 "Tegetthoff"

もない。

リッツォが二つの魚雷を驀(はなひけ)して、瞬時にして沈めてしまつたのは、墺洪海軍の覇者ビリブス・ウニチス號型の聖ステファノ號であつた。

リッツォ艇長肖像

聖ステファノ號は無數の犧牲と共に卽時に沈んでしまつた。他のドレッドノート、テゲトフ號も大損傷をうけたまゝ曳船せられて、出發地點のポーラ軍港に入つた。

爆彈を喰つた敵の驅逐艦は、大破損のまゝ二驅逐艦の間に挾まれつゝ、曳船せられて去つた。

かくて蠅の如き二小艇は、象の如き二ドレッドノートを斃し

ミラッツォ Milazzo シシリヤ島の港。

た。

六月十日の早朝、アンコーナの港内に二自動艇は揚々として引きあげて來た。總員十四人、たゞの一人として微傷を負うたものすらない。一同の意氣は天を衝くの概がある。

一行は忽ち、知人や市民に十重二十重と取圍まれた。その時のリッツォ艇長の語がゆかしい。たつた一言、

「夢のやうです。」

それだけ。そしてすぐ郵便局に行つて、まづ第一に故郷の老母に電報を打つた。

その日正午少し前、ミラッツォにある母の手に一通の至急電報が着いた。胸を轟かして開いて見た母は、その電文の內容によつて、更に更に驚かされた。中にはたつた一語、

「嬉しくてたまらぬ。市民の祝賀會をうけ、上下兩院・各大臣、その他各地の無數公私團體から祝電や祝文をうけても、謙讓寡言な少佐は、

「祖國のために盡くすべき、私の神聖なる義務の萬分の一を盡くしたに過ぎません。」とくり返すばかりであつた。（大戰中のイタリヤ）

ローマ史上一對の戰士が語り傳へられる。獨眼ホラチウスの像はローマの都を飾つて居る。左ムキウスのあだなは、武士の手本を意味するやうになつた。大ローマ帝國の礎は、實に左の目一つと右の腕一本で置かれたのである。（高等小學讀本卷二の文による）

阿部次郎　文學博士。東北帝國大學教授。

輕井澤　長野縣北佐久郡。

二〇　月見草

阿部次郎

月見草は私の好きな花の一つである。取離していふと、黃色は自分の特に好きな色の部類に屬してはゐないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、またその花を見る夕暮や曉のすがすがしさとは、月見草の仄かな黃色をいひがたく懷かしいものに思はせる。

自分は或夏輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗い中に、狹苦しく滿員になつてゐる旅亭を出て、同宿のI君やM君と新舊兩街の間の野原を歩いた。月見草が、曉近いのでいくらか萎れかゝつて、限りもなく咲續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉すくなに並んで歩きなが

高　原

ら、なんともいへず親しい氣持になつて、やがて旅亭に歸つた。

今自分の家の庭にも一株の月見草がある。或日の夕暮、私はこの花の咲くところを眼のあたり見た。食後二階の欄干に凭つてゐると、その蕾の急に膨らんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開くのを見て悟を開いたといふ話を仄かに想ひ起しながら、急いで庭に出て、その花の傍にしやがんで見て居ると、いかにも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣を包んでゐる萼が後退を始める。萼が開くと、卷いてゐた花瓣が次第に膨らんで來て、不意にその一片が急にはじける。さうすると四つの花瓣が一緒にふうはりと開いて來て、遂に蘂を見せて咲いてしまふ。その咲きはじめに、仄かな香氣が鮮かに鼻を撲つ時の氣持は、なんともいはれない。明日の朝になれば凋んでし

まふはかない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても、もとより悟は開けない。悟は開けないが、しかし新しく咲く花を見守る靜かな愛の心は、實に嬉しく有り難いものである。（北郊雜記）

靜寂は何の物音もしないといふことではない。むしろ積極的に人に迫る力を持つ或物である。それだから沁みつくやうに靜かな周圍の中に、一ひらの木の葉の落ちる音が一層その靜寂を深くし、眞夜中の犬の遠吠が寂しい片田舎の眞夜中を更に寂しくする。（阿部次郎）

吉江喬松　かつて孤雁と號す。文學博士。早稻田大學教授。同文學部長。明治十三年生。

二　翼

吉江喬松

私は小高い丘の上に立つてゐた。

澄切つた秋の空は紫紺の色をたゝへて、無數の星がぴかぴか光つてゐた。

私は丘の上の草の中へ腰をおろして、じつとして居た。すうつ、すうつと草の葉が擦合つて、下の野の方からは蟲の聲が聞えて來た。

月の昇る前の東の空には淡青い光が漂つて、椋の樹の葉の落ちた枝が細い幾本もの指を伸ばして、その光を掴むやうにしてゐた。

何處か頭の上で、さあつ、さあつと空氣を切つて飛ぶ物音がす

る。はつと思つて私は頸をすくめて見上げた。はつきり見極められないが、薄黑い鳥の影が列をなして行くのが目にはひつた。さあつ、さあつと翼の音が斷續する。

空氣が搖れて、顏へ、頸へ、冷たく當る。と思つてゐると、心が妙に跳るやうで、胸の動悸が高く打ちだした。體軀ぢう波立つて血がめぐる。どつき、どつき鼓動する心臟の響と、さあつ、さあつと空氣を切る翼の音とは調子を合はせて鳴つてゐた。

翼の音が少し遠くなり、微かになつて、その物音の中心が空を滑つて先へ先へと移つて行くと、冷たい空氣は幾重にも幾重にも輪を描いて波動を起し、その波動は次第に大きくなつて、丘の上に、野の草の葉先の末にも及んで行くと、蟲の聲はその波動につれて調子をとり、草の葉は同じく波立つて搖れた。黑い空氣の

波の震動、私の心臓もその中につゝまれて、ゆるく波動を立てゝゐた。

ぼうつと野は明るくなつた。森の影が長く黑く黃枯れた草の上へ敷かれて、蟲はいま目を醒ましたやうに爭つて聲を立てた。

月と雁

私は月の方へ向つて、胸へ深く光を吸込んだ。月の光の下に、瓦の屋根の並んでゐる都會が見えだして來た。いつもは騷がしい響の聞えてゐる都會が、その夜に限つて何の物音も立てなかつた。たゞ黑く見えてゐるばかりで、燒け跡か何かのやうだ。

淡青い光を空にひろげて、次第に月は昇つて來た。丘の下の野も一層廣く明るくなつて、藪蔭がぽつりぽつり立つてゐるのが見えた。顫へるやうな水溜も見えた。光の波が今度は空にも地上にも漲り溢れてゐた。私の體軀の細い血管の中迄もその波がくぐり入つて、體軀全體がすつきり透りでもするやうな氣がする。

私は暫くじつとして立つてゐた。

さあつ、さあつとまだ物音が空に聞えてゐた。私はまたはつと思ふと、動悸が打ちだした。何物かの襲來を受けたやうに。頭を仰向けたが、その物音の姿は見えない。が、前よりも一層近く、その音は聞えて來た。一層低く、私の體軀よりも一層低く、丘の中腹を掠めて行くやうだ。

私はその響の來る方へ鋭く視線を向けた。雁の群だ。十羽ばか

りの雁が横に並んで、ゆるく羽を搏ちながら翔つて行く。右の端にゐる一羽の鳥が他のものよりも少し先へ出て、時々頸を左右に動かし、頭を高く昂げて勢好く舞つて行く。

群鳥の背を滑つて視線が少し先の草原へ落ちると、そこには舞ひ行く鳥の影が草原の上を斜に流れて行くのが見える。野の果の低い空には、大きな星が澄んだ光できらきらしてゐるのも見える。

大きな鳥の一隊の群、荒い羽搏き、動く長い頸、その一團の生命の波動を身近に感ずると、私は怖ろしさと不思議さに思はず聲を立てようとした。我が生が、形の異つた、羽を持つた我が生が、いま目の前を翔つて行く。周圍が暗くなつて、たゞ暗い音の波動だけが空にも地にも充ちてゐるやうな氣がした。

リズム Rythm 韻律。

暫くたつた。見ると、雁の群はもう稍遠く隔つて、羽搏いてゐるとも思はれない。たゞ薄黑いものがずんずん空を流れて行くやうだ。光の波を搔亂し、音と光とが空に亂れて不思議な波動を起し、睡つてゐる地上の草木や人家の屋根に奇妙なリズムを響かせて行くのだ。

鳥の過ぎた後の野原はまたひつそりとして、月の光が枯草の根元までも、根元の土の小さな塊團にまでも射しこんで、大地の胸は冷たいその光を飽くまでも吸つてゐた。（若き自然）

鶏頭や雁の來るときなほ赤し　芭蕉

島木赤彦 本名久保田俊彦。歌人。大正十五年歿、年五十一。

三　野菊

島木赤彦

野菊の花を見てゐると、
水の流れる音がする。
野菊の原のくぼたみに、
泉が湧いて居りました。

野菊の花を見てゐると、
こほろぎの鳴く聲がする。
野菊の原の草の根に、
蟲がかくれて住みました。

野菊の花を見てゐたら、
雲が通つて行きました。
空に浮かんで行く雲の、
影が花野に動きます。

蟲と泉の音のする、
野菊の原はしんとして、
雲の通つた大空は、
いよいよ青くなりました。

（赤彦童謠集）

若山牧水　名は繁。歌人。昭和三年歿、年四十三。

池袋　東京市豐島區。

武藏野線　池袋・飯能間の鐵道。

飯能　埼玉縣入間郡。

二三　溪をおもふ

若山牧水

溪のことを書かうとして心を澄ましてゐると、さまざまの記憶がさまざまの背景を負うて浮かんで來る。

秋のよく晴れた日であつた。ほつかりした氣になつて、池袋停車場から出る武藏野線の汽車に乘つた。廣々した野原へ出て、思ふさまその日の日光を身に浴びたかつたからである。一度途中の驛へおりたのであつたが、そこらの野原を少し歩いてゐるうちに、野末に近く見えてゐる低い山の姿をみると、是非その麓まで行きたくなり、次の汽車を待つて、その線路の終點驛飯能まで行つた。

着いた時はもう日暮で、引返さうとすると、非常にあわたゞしい氣持でその日の終列車に乘らねばならなかつた。それに何といふ事なく疲れてもゐたので、あまり氣持のよくない乾き切つたやうな宿場町のそこにとうとう泊つてしまつた。運惡くその宿屋にはおほぜいの下等な商人どもが泊りあはせてゐて、折角いゝ氣持で出かけて來た靜かな心をさんざんに荒されてしまつた。不愉快な氣持で、翌朝早く起きて飯の前を散歩に出た。漸く人の起き出た町を、そのはづれまで歩いて行つて、私は思ひもかけぬ清らかな溪流を見出した。

飯能といへば、野原のはての低い丘の陰にある宿場だとのみ考へてゐたので、そこに見事な溪が流れてゐようなどとは夢にも思はなかつたのである。少なからず驚いた私は、あわてながらその溪に沿うて少しばかり歩いて行つた。眞白な砂、洗はれた巖、

原市場 埼玉縣入間郡。
名栗 同前。

その間を澄みとほつた水が淺く深く流れてゐる。昨夜來の不快をも悉く忘れ果て、急いで宿屋へかへつて朝飯をしまふなり、私はまたすぐに引返して、すつかり落ちついた心になり、その溪に沿ひながら山際の路を上つて行つた。

名栗川附近

溪をはさんだ紅葉も深く、諸所に植ゑこんだ大きな杉の林もあつた。

細長い筏を流す人たちに出會つた。

ゆるゆると歩いて、その日は原市場で泊り、翌日は名栗まで。その翌日長い峠にかゝるとともに、その溪はいよいよ細く、終には路とも別れてしまつた。そして落葉の深い峠を越すと、そこにはまた新たな溪が流れ

淺瀨石川 一名黑石川。青森縣南津輕郡。
津輕平野 青森縣の西部にあり。岩木川の流域。
岩木川 岩木山の西南麓に發し、十三潟に注ぐ。
十三潟 津輕半島の西岸に灣入せる潟。

出してゐた。

朝山の日を負ひたれば溪の音冴えこもりつつ霧たちわたる

鶺鴒來てもこそをれ秋の日の木洩日うつる岩かげの淵に

？おどろおどろとどろく音のなかにゐてまむかひにみる岩かげの瀧

淺瀨石川といふのは、津輕の平野を越えて日本海の十三潟に注ぐ岩木川の上流の一つである。そこきりで鱒の上るのが止るといふ荒い瀨のつゞく邊に、板留といふ小さな溫泉場がある。

溫泉は川の右岸に當る斷崖の中腹に二箇所と、その根がたの

川原に接した所に一箇所と、一二丁づつの間隔を置いて湧いて居る。

私の好んで入つたのはその斷崖の根の溫泉で、入口には蓆が垂してあるばかり、板の壁はあらかた破れて、湯の中からでさへ溪の瀨がよく見える。

或日の午後、ぼんやりとひとりで浸つてゐると、次第に湯がぬるんで來た。氣がつくと、板壁の根の方から溪の水がひそかに流れ込んで來てゐるのである。四月の廿日前後であつたが、その日あたりから急に雪が解け始めたらしく、溪の水の濁つて來るのは判つてゐたが、かう急に增さう

近附川石瀨淺

とは思はなかつた。呆氣にとられて、裸體のまゝ小屋の外に出てみると、赤黑く濁つた水が、ほんの僅かの間に全く川原を浸して流れて居る。丁度そこの對岸の木立のなかに、――そのあたりにも水が流れ及んでゐた――網を提げた男が一人、あちこちと歩いてゐる。雪解を待つて鱒は上つて來るといふ事を聞いてゐたが、彼は今それを狙つてゐるのらしい。やがて、また一人あらはれた。

溪流

雪が解けそめたとはいへ、四邊の山は勿論、ついその川岸から、まだ眞白に積み渡してをるのである。その雪と、濁つた激しい溪

流と、珍らしく靑めいたその日の日光との中に、默々として動いてゐるこの鱒とりの人たちが、いかにも寂しいものに私の眼には映つた。

雪解水岸に、あふれてすゑかすむ淺瀨石川の鱒とり
のむれ
むら山の峽より見ゆるしらゆきの岩木が峯に霞た
なびく

水上へ水上へと急ぐこゝろ、われとわが寂しさを嚙みしめるやうな心に引かれて、私はあの利根川のずつと上流、僅か一足で跳び渡ることの出來るやうに細まつた所までわけ上つたことがある。

岩木が峯　一名津輕富士。弘前の西北十二粁。熄火山。高さ一五九〇米。

利根川　源を群馬縣に發し、關東地方の中部を東に流れ、銚子に至つて太平洋に注ぐ。

狹い兩岸には、もうほの白く雪が來てゐた。斷崖のかげの落葉を敷いて、ちよろちよろ、ちよろちよろと流れてゆく、その氷のやうに滑かな水を見、まだらな新しい雪を眺めた時、何ともいへぬ心に、私は身じろぎすら出來なかつたことを覺えてゐる。今思ひ出しても、神の前にひざまづくやうな有りがたい尊い心になる。

水のまぼろし、溪のおもかげ、それは實に私の心が正しくある時、靜かに澄んだ時、必ずのやうに心の底にあらはれて、私に孤獨と寂寥のよろこびを與へてくれる。（靜かなる旅を行きつゝ）

孤獨、寂寥のおかげで、このこゝろが
いつもいつもひきしまり、正しい

野火止 埼玉縣北足立郡大和田町の字。

松平信綱 德川家光に仕へ伊豆守に任ぜらる。初め武藏國忍城を賜はり、寛永十六年川越の城主となる。寛文二年（一六六二）歿、年六十七。

平林寺 野火止にある臨濟宗の寺。金鳳山と號す。

二四　野火止の用水

東京の西北數里に野火止といふ處がある。今は埼玉縣北足立郡大和田町に屬してゐるが、見渡す限り打續く畠の間には、森あり丘あり流あり、春は菜の花・麥の綠、秋は薄の波・雜木の紅葉、武藏野の面影が今に殘つてゐて、見るからに野趣に滿ちた眺である。昔此の附近一帶の地は、彼の智慧伊豆といはれた松平信綱の領地で、其の菩提寺平林寺も此の野火止にある。

平林寺の門をくゞつて、薄暗いばかりに茂つた楓の下を進むこと約二町、本堂について右折すれば、杉や檜の生ひ茂つてゐる林の奥に、信綱の靈は靜かに眠つてゐる。敷石の苔を踏んで此處に詣でる者は、あたりの靜けさを破つて、玉の如き水が勢よく流

安松金右衞門 信綱の臣。川越の代官。

玉川 東京府南多摩郡雲取山に發し、東に流れて東京灣に注ぐ。

立川驛 東京府北多摩郡立川町。

志木町 埼玉縣北足立郡。

新河岸川 荒川の支流。川越市附近より、志木町を經て、內間木村にて荒川に合す。

れてゐるのを見るであらう。有名な野火止の用水とは卽ちこれで、此の水を引くに就いては面白い話が今に傳へられてゐる。

元來野火止一帶の地方は、土地高く水利に缺け、地味瘠せて、見るからに貧しい村であつた。信綱が川越城主として此處を領してゐた時、代官安松金右衞門は、新たに堀を掘つて玉川の水を引けば必ず田畑が出來ると申し出た。其の費用の見積を尋ねると、三千兩あればよいといふ。當時の三千兩は非常な大金であるが、信綱は、此の爲に後世まで利益を享けることが出來るならばと、直ちに堀を掘ることを安松に命じた。安松は命を奉じて數百人の人夫を督し、いよいよ工事に着手した。そして今の中央線立川驛の北方一里許りの處から、此の野火止を過ぎ、志木町の新河岸川まで六里の間に堀を通じて、玉川の水を引くことにした。

工事はやがて見事に落成したが、併し意外にも一滴の水も流れて來ない。信綱は之を見て安松を詰ると、安松はとにかく明年までの猶豫をと願ひ出た。が、翌年になつても水はやはり流れて來ない。こゝに至つて信綱は、安松が地勢の高低を考へずに工事を進めたものとして、其の手落を責めたが、安松は尙自分を信じて疑はない。元來此の附近は土地が乾き風が烈しいために、これまで非常に土埃が多く、客のある場合には必ず座敷を掃いて入れなければならなかつた。然るに今年はそんな事が全くない。のみならず野菜の出來のよいことも例年と異なつてゐた。これは水分が地を潤してゐるためで、確かに彼の堀のお陰に違ひないと。そこで安松は、何とぞ更に一年の猶豫をと願ひ出た。然るに翌年の夏、一夜大雨が降ると、奔流が水音高く進み來て、忽ち六里の

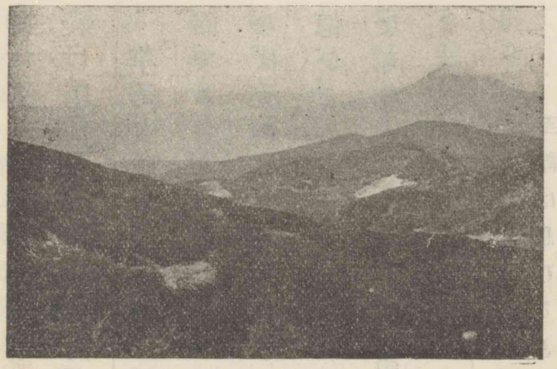
堀に漲つた。信綱は始めて安松が自ら信ずることの強いのに感歎し、且厚く其の功を賞したといふ。

草秀で木茂り、見渡す限り豐かな田畑の間を過ぎて平林寺に詣でる者は、たゞに春の花や秋の紅葉を賞するばかりでなく、今なほ流れて盡きぬ用水に對して、安松金右衞門が當年の苦心を偲び、この事業に功績のあつた人々に深い感謝を捧げなければならない。（國定高等小學讀本による）

至誠は息むこと無し。息まざれば久しく、
久しければ徵あり。（中庸）

二五　國立公園

明治六年、公園設定の太政官布告が出てから六十年、到る處に大小の公園が設けられ、昭和六年、更に國立公園法が發布せられるや、新たに候補として十二の國立公園が選定せられるに至つた。その規模の雄大と變化に富んでゐることとは、到底、在來の公園の比ではない。これ偏に日本民族の發展を示し、國運の隆昌を語るものでなくて何であらう。

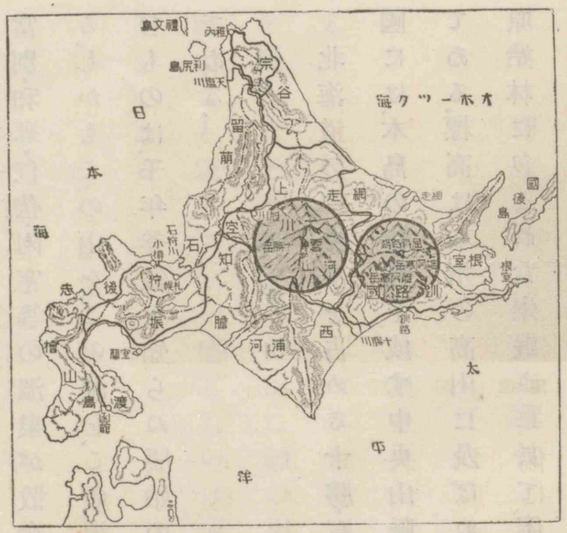


雄阿寒と阿寒湖の遠望

一　阿寒

自然の祕境たる北海道にも、原始のままの景觀を保つてゐるものはあまり多くはない。阿寒一帶こそ、その多くない景觀中第一に擧げられるべき原始境である。

阿寒公園は釧路國、川上・阿寒・足寄の三郡に跨る廣大な火山地區で、雄阿寒・雌阿寒の兩火山が聳え、その間には阿寒湖が湛へられ、釧路・北見兩國の境には周圍五〇粁の屈斜路湖が横たはり、神威



國立公園候補選定地（阿寒・大雪山）

雄阿寒　死火山。高さ一三七一米。
雌阿寒　死火山。高さ一五〇三米。
阿寒湖　周圍二十六粁。最深所三十六米。
神威岳　カムイダケ。高さ八五八米。

岳の西には摩周湖が澄み、附近には弟子屈、當別・和琴・仁伏・阿寒等の溫泉が散在してゐる。しかもこの山を、この湖を、この溫泉を包むものは、千年斧鉞を知らぬ原始の大森林である。

二　大雪山

北海道の中央部を占める十勝・石狩の兩國には、本島の背稜を成す中央山脈が走つてゐる。標高は本州の高山に及ばぬけれど原始林に包まれた崇嚴さに於て、容易に見ることの出來ぬ趣を具へてゐる。

この地域の代表的景觀は、二〇〇〇米を

大雪山の大觀（一）

抜く峯が十指に近く數へられる大雪山彙で、北海道の最高峯二二九〇米の旭岳がその中に聳えてゐる。大雪山彙はアイヌがヌタク・カム・ウシュペと呼んだ山で、ヌタク・カム・ウシュペは高臺原・神集合所を意味するといふ。自然の大さに打たれ、自然の美しさを愛したアイヌが、この山に神の相會する壯大さと森嚴さとを感じたのは所以あることである。

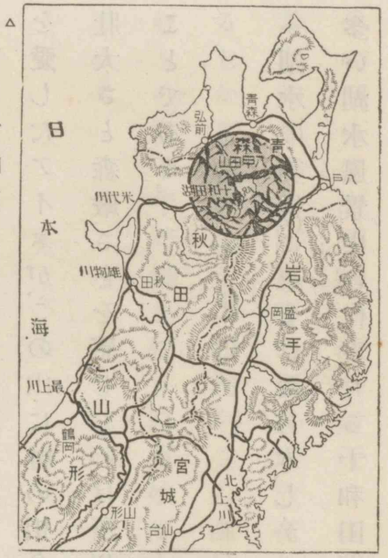
三　十和田

湖水の美景に惠まれた日本、しかもその多い湖水風景中の代表たる十和田湖と、何

大雪山の大觀（二）

奥入瀬川 オイラセガハ。十和田湖を發して東流して太平洋に注ぐ。

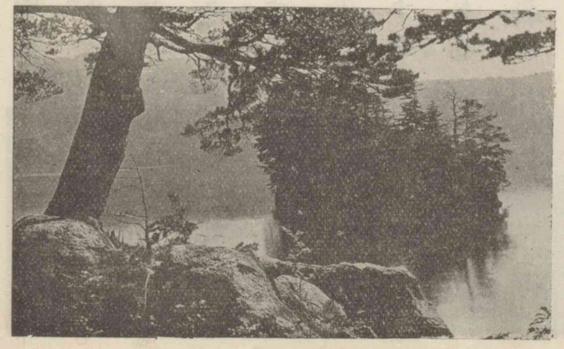
八甲田山 ハツカフダサン 奥羽地方北端の火山彙で、八甲田大嶽・小嶽其の他六峯聳えて、最高峯の高さ一五八四米。



國立公園候補選定地（十和田）

とする十和田は、たしかに東北地方が持つ我が國の誇りの一つである。

地域の北方には、八甲田山の嶺々が巍々として聳えつつ廣濶な裾野を引き、南方には十和田湖が天日に輝き、奥入瀬がこの湖に水源を仰ぎ人も嘆賞措く能はざる溪流美を以て知られた奥入瀬川の風光を中心



十和田湖

東照宮 栃木縣上都賀郡日光町に在り、德川家康を祀る。別格官幣社。

中禪寺湖 一名幸の湖。周圍二十三粁餘最深所一七〇米。

男體山 中禪寺湖の北端に聳ゆる山。高さ二四八四米

つゝ溪流美を刻し、全域を粧ふ森林は、上部にはアラモリトドマツ・ツガ・モミ・シラベ等の針葉樹林、低地にはナラ・ブナ・カヘデ・セン等の濶葉樹を生ひ茂らせ、山岳・湖沼・溪流・森林の織成す一大風景地帶を成してゐる。

四　日光

日光東照宮

日光を見ずして結構といふなといはれた日光は、結局東照宮を中心とする豪華な人工美を意味するものであつた。更にいへば、中禪寺湖・男體山・華嚴瀧一帶の自然美を背景とする絢爛な東照宮の建築美であつた。が、今の日光は、これに湯元一帶の

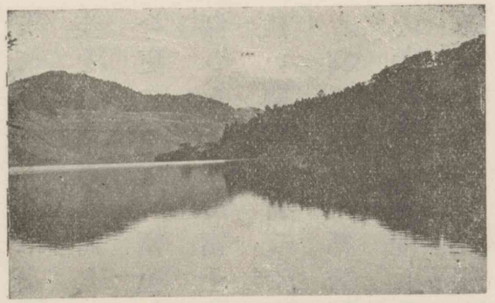
奥日光・鬼怒川上流・尾瀬沼及び尾瀬ヶ原一帶を加へたもので、卽ち一は中禪寺湖を、一は菅沼・丸沼を、一は尾瀬沼・鬼怒沼を中心とする三つの廣大な地域が、日光公園を形成してゐるといつてよい。

既に知られた中禪寺湖一帶の好風光はいふまでもなく、未だ多くの原始的風趣を遺してゐる丸沼・菅沼一帶の山湖、依然として深山の香を漂はせてゐる尾瀬沼・鬼怒沼一帶の風景、何れも幽邃な祕境として、又湖沼研究の目的地として興味の豐かなものがある。かくて豪華な人工美と雄麗な自然美とを併せ存するものは、實にこの日光公園である。

中禪寺湖

五　富　士

海を渡つて來る外客も、空を飛んで來る外客も、一樣に口を極めて富士の美を說かぬはない今日、われわれにとつて富士の名はあまりに平凡になつてしまつた。しかしさういふわれわれでも、東海道を走る汽車の窓から、思ひがけぬ時、天空高く聳え立つあの山容を見出す時は、全くこの世のものとも思はれない崇高さに心を奪はれ、裾野の一角に立つて、目近かにそそりたつあの山頂を仰ぐ時は、たぐへやうのない偉大さに感嘆を禁ずることが出來ぬ。平生は感じてゐないけれども、思はぬ時、思はぬ所でその



箱根蘆ノ湖より富士山を望む

姿を發見すれば――例へば上越の山山、信越の峯々から、幾つもの山波を越えて、遙か彼方に聳えるあの圓錐狀の姿を眺め得た時など――われわれは今更のやうに富士と自分との關聯の深さを、そして富士と日本人との離れ難い關係を自覺せずには居られない。

富士國立候補公園は一大圓錐火山を中心として、北に明媚なる五湖を包み、南に溫泉鄕箱根を控へ、廣大なる裾野を曳く地域を含んでゐる。その最高峯劒ヶ峯は海拔三七六八米である。その頂に立つて展望すれば、景觀の雄大なる、殊に雲海の壯觀はもとより、雲霧の

箱根宮ノ下

五湖 山中湖・河口湖・西湖・精進湖・本栖湖。
箱根 神奈川縣足柄下郡。

形態色彩の珍らしき現象は特異のものとせられてゐる。

五湖の中、山中湖の明朗なる、河口湖の秀麗なる、西湖・精進湖・本栖湖の靜寂なる、いづれもその特殊の風貌を具へ、清澄なる湖面に倒影する倒富士の姿の美しさは筆舌の及ぶところでない。富士山麓から順次に續く垂直的植物帶は學術的興味の極めて豐かな原始の森林及び廣漠たる大原野である。又四季折々につれて草木の鮮麗なる、風景觀の雄大なる、この間に立つて富士を仰ぐものは今更の如く、その神々しさに心を打たれるのである。

富士の風景は古より文に繪に寫され、又、神國の靈山として崇められ、その偉觀は深く國民の心に刻みつけられて居る。富士國立候補公園地域は、日本の代表的風景として世界に喧傳せられて居るが、われわれは更にその崇高・雄大・優美なる景觀に對する

白馬 白馬岳 長野縣の北端 同縣と富山縣とに跨る。高さ二九三三米

立山 富山縣の東部にあり 高さ二九九二米。

乗鞍 乗鞍岳 長野縣と岐阜縣に跨り、高さ三〇二六米。

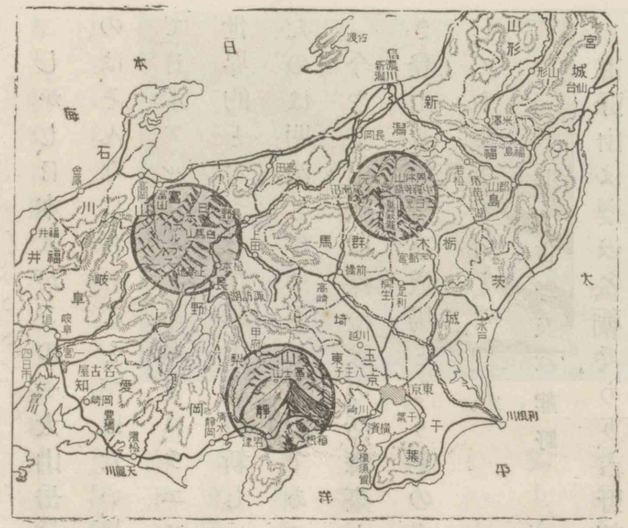
時、日本民族精神の象徴として景仰せざるを得ぬ。

白馬より立山連峯を望む

六　日本アルプス

北は白馬・立山から南は乗鞍に至る間長野・岐阜・富山・新潟の四縣にまたがり、いはゆる日本北アルプス山陵の殆ど總てを包含する一大山岳公園、これが日本アルプス公園である。

黒部峡谷



國立公園候補選定地（日光・富士・日本アルプス）

この大山岳公園中、指を屈すべきは周圍三〇〇〇メートルを超える高峯を以てめぐらし、一五〇〇メートルの高所に於て、S字形に展開された一大平坦溪谷たる上高地であらう。またこの幽邃に對して、壯絶豪宕を以て誇るべきは、南北八〇キロメートル、斷崖につぐに斷崖を以てし、立山・白馬の二大雪嶺に育まれた水が花崗岩の岩脈に激して、沸白一萬尺の飛沫をあげてゐる黒部峡

チャムバレイン Chamberlain（1850——）嘗て東京帝國大學文科教師たりしことあり。英文の日本旅行案内記なる著す。

ウエストン Walter Weston（1860——）スイギリスの登山家。明治三十二年より八年間我國に滞在し宣教師として大峯山脈、奈良縣連峯の南部に高さ一六九五米の最高峯佛經岳は九一五米。

大臺ケ原 大峯山脈の東方に隣れる山。高さ一六九五米。

大臺ケ原より東川峽谷を見る

瀞八丁

谷であらう。

しかし、日本人がこの一大山岳公園に注目するやうになつたのは、そんなに古いことではない。最初チャムバレイン氏によつて「日本アルプス」と命名され、ウエストン氏の著書によつて一躍世界的となつた飛驒山脈が、新しい風景として觀賞の的となつたのは明治も半ば過ぎた頃であつた。

今や全山脈は探檢隊の活舞臺となり、科學者の寶庫となり、若き登山者の登高道場となり、その山岳美は世界の登山家の禮讃してやまざる所となつた。

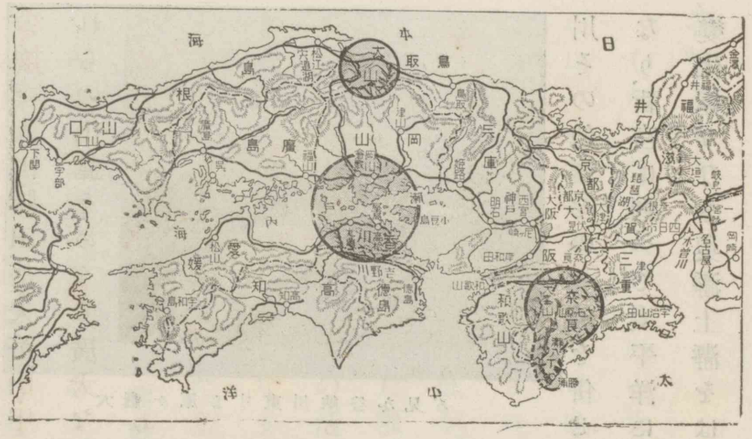
七　吉野及び熊野

吉野山は櫻の名所であり、吉野朝の歷史を物語る名山である。大峯山は修驗者の信仰的登山で古くから著名である。大臺ケ原はその名の示す如く、山上に廣い平坦面を展げて鋸齒狀の大峯連山に對し、南方に目を轉ずると、すさまじい一大斷崖が切つて落ち、東川の所謂九十九谷に面してゐる。

北山川は大峯山・大臺ケ原の間を南下し、十津川その他幾多の支流を併せて熊野川となり、新宮に到つて太平洋に注ぐ。その間變化極りなき奥瀞・上瀞をはじめとして

勝浦 和歌山縣の東南方。熊野灘に面する町。

大山 タイセン。鳥取縣西伯郡にあり。高さ一七一三米。



國立公園候補選定地（吉野及熊野・大山・瀬戸内海）

いはゆる瀞八丁、微動だになき紺碧の下瀞に至るまで、激流深淵あらゆる水態の神髄を示し、周圍の岩石美と相俟つて峽谷美の極致を成してゐる。

更に紀州海岸に於ける風景の中心たる勝浦を併せ、山岳から峽谷へ、峽谷から海岸へと巧な配置を以て形成されてゐるのがこの公園の特色である。

八　大　山

大山は日本海沿岸地方唯一の

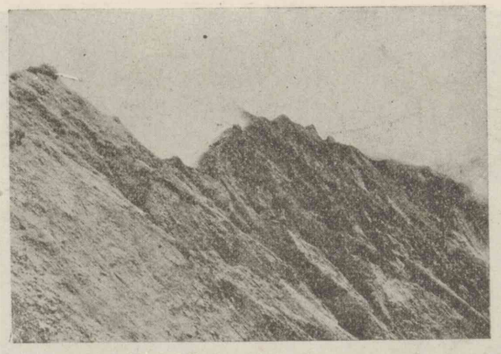
勝田岳 大山の北東方。

矢筈山 大山の東方。高さ一三五九米。

烏ケ山 大山の南東方に隣れる山。高さ一九八八米。

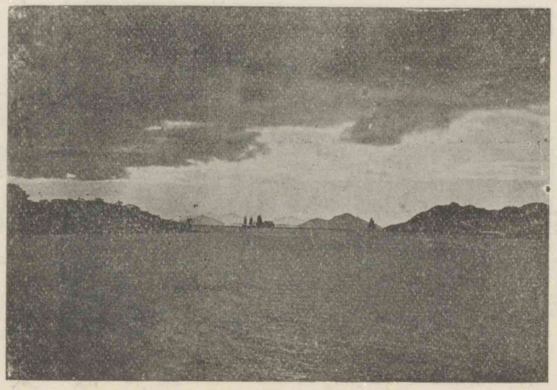
船上山 勝田岳の北。歴史上有名の山。

公園で、大山・勝田岳・矢筈山・甲ケ岳・烏ケ山・船上山一帯の山岳と、それらの山麓をめぐる廣大な裾野原野とを含めた山岳風景地である。その中心をなす大山は、山容の秀麗な點から伯耆富士と呼ばれ、およそこの山の見える地方地方では、どこでも懐しまれ、仰がれ、親しまれてゐる山である。山の西部は、圓頂丘が侵蝕せられず完全にその形を保つてゐるために優美の趣を有し、北部は、著しく侵蝕破壞せられて岩肌を裸出し、急傾斜を成しつつ幾多の空谷を放出してゐるためにすこぶる豪壯である。



大山の北部

緩かな傾斜で四方に發達してゐる廣大な裾野も亦大山の一大特色で、北方は草原として、南方は高原として發達し、積雪と相俟つて中國第一のスキー場と謳はれてゐる。



瀬戸内海

九　瀬戸内海

紺碧の海・白砂の濱・濃綠の松、それがさまざまな配合と調和を形造つて海の公園を成してゐるのが瀬戸内海公園である。

地域は東は岡山縣兒島半島の坊子島と小豆島蕪崎とを結ぶ直線と、小豆島大角崎と香川縣馬の齒岬とを結ぶ直線とで限り、西は廣

小豆島　香川縣小豆郡。周圍一四四粁。蕪崎・小豆島の西端。

島縣阿伏兎と香川縣三崎とを結ぶ直線に境された海面と、その中に散在する數十の大小島嶼を包含する、所謂備讃瀬戸をいふ。

備讃瀬戸は内海の特徴を集めた、複雜な風景美を現出し、洋畫風の赭褐色の肌地を露出した島や、日本畫風の白砂青松の海岸で眞に風光明媚である。その間に介在する島々は千種萬態で、屋根型の臺地もあれば、圓錐形の峯もあり、尖峯奇巖の亂立もあつて、雄大と優美とを兼ね備へた絶好の風景である。

一〇　阿蘇

久住の高原から眺めると、東西一二六粁、南北二四粁に及ぶ廣漠たる裾野の彼方に、火口丘たる阿蘇五岳が悠久の姿を現し、それを取卷く外輪山が蜿蜒城壁の如く續いてゐる。眞正面の五岳のみならず、全長一二〇粁に及ぶ外輪山に圍まれた一一五四平方

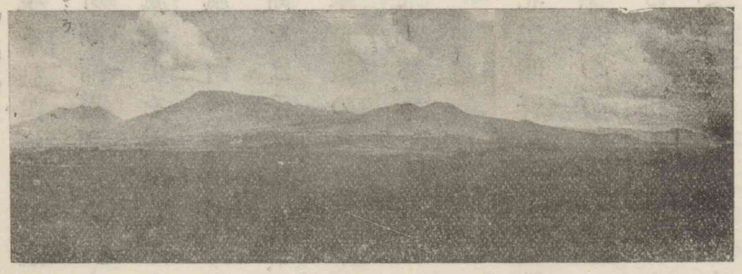
阿蘇五岳　高岳・中岳・根子岳・杵島岳・烏帽子岳。最高峯は高岳の一五九二米、その頂上には直徑四〇〇米の火口を有す。

籾の地域全部が大阿蘇を構成するに至つては、その壯觀に驚かぬものはないであらう。更にこの外輪山に圍まれた火口原には三町十一ケ村、約六萬の人口が住み、太古には一大噴火口で、この一大火口から火焔が天に沖してゐたことに思ひ到れば、世界的活火山の標本たる大阿蘇の面目が躍如たるものがある。

かくて大阿蘇は肥後・豐後の兩國に跨つて恰も九州に君臨してゐるやうである。

一一 雲仙

九州島原半島に聳える雲仙岳が抱く樂



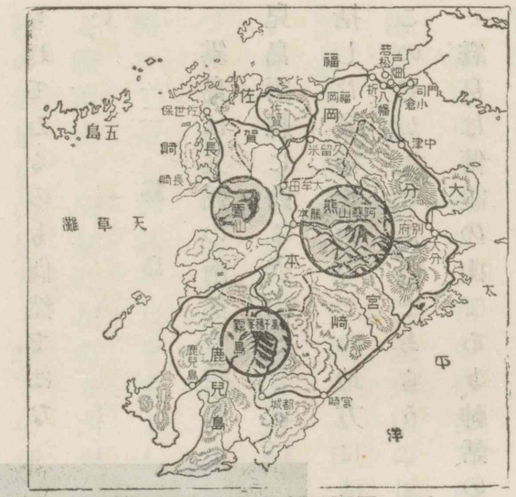
阿蘇五岳の遠望

上海 シャンハイ。支那本部の南方にある開港場。

香港 ホンコン。支那本部南方の島。英國の租借地。

千々岩灘 島原半島と長崎半島が抱く一帶の海の稱。

園については、内地はいふまでもなく、遠く上海・香港にまで、避暑地として、遊園地として、その名が響いてゐる。



國立公園候補選定地（阿蘇・雲仙・霧島）

山頂からは有明の海・千々岩灘が眺められ、遠く彼方には阿蘇・霧島・英彦・多良の諸山が空に聳え、近くは筑紫の野が展がつてゐる。山上はつゝじが彩を添へ、秋は紅葉が山を染め、冬は霧氷が水晶のやうに樹々を飾り、その美觀はいひやうがない。

氣候は酷暑でも二七度を越えることはないといふ。その他一

七〇平方粁のゴルフリンク、完備したホテル・溫泉、坦々たる自動車路、その名が海外にまで知られてゐるのも偶然ではない。

一二　霧島

霧島は九州の南部、宮崎・鹿兒島兩縣に跨る火山群を包括した名稱である。この地方には地理的關係上濃霧が多いのでこの名が生じたのであらう。

霧島は傳說の山であり、神話の峯である。それだけに、どこか神韻縹緲といつた趣が山容の上にも現れてゐる。あの天の逆鉾が山頂に立つといふ高千穗峯の美しい斜線と、中空に聳える圓錐

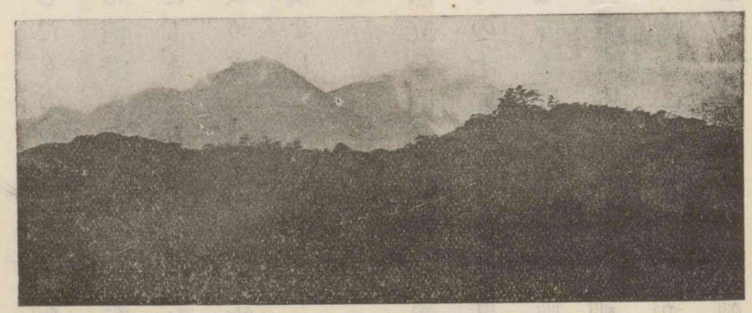
雲仙岳登山の自動車路

高千穗峯　宮崎・鹿兒島の兩縣に跨る。高さ一五七四米。

形の項を仰いだだけでも、靈山といふ雰圍氣を多分に味はせられる。

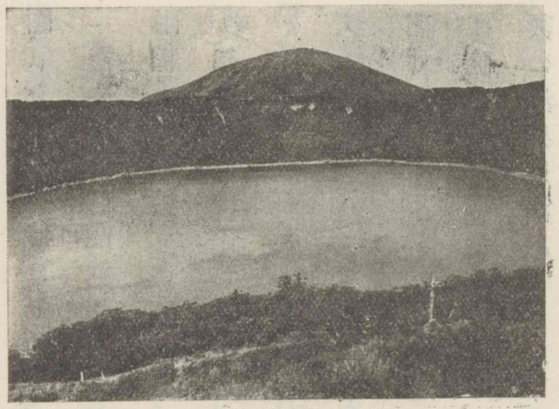
霧島火山群は九州の南部、宮崎・鹿兒島兩縣に跨る數多の圓錐火山の集合で、それぞれ山體に比して著しく巨大な火口を有つてゐる。火口のうち今尙噴火をつづけてゐるのは高千穗峯の西方中腹に開いてゐる御鉢火口を主とし、北西部には硫黃山の硫氣孔があり、西南部には無數の溫泉が湧出して、地下の活動を物語つてゐる。

そしてかくの如き大地の活動によつ



仰ぎ見る高千穗峯

て、この美しい霧島の火山的景觀が成立したものであることを思へば、あの舊火口に湛へられた湖の瞳の清澄さにも、霧島特有の高原美にも、また裾野の優雅な斜線にも、改めて大自然の創造的威力を感嘆せしめられる。



霧島の火口湖

かくて國立公園候補として選定されたもの十二、何れもその景觀の雄大なると、歴史的聯想の豊富なると、科學的興味の津々たるとによつて、此處に遊ぶ者をして自ら崇高偉大の心情を懷かせ、無限の興趣を覺えしめるであら

う。現にわれわれが住む地方的公園にしても、そこの一木一石はすべてわが鄕土愛の種ならざるはない。國立公園はまたわれわれ日本民族の愛鄕心を高め、祖國愛の精神を奮ひ起さしめずには措かないであらう。

坂本四方太
文學者。大正六年歿、年四十五。

二六　母

坂本四方太

自分も一つ子供の時の事を書いて見る。極幼少の時の事である。

自分は元來田舍者で、日本海の海岸なる一漁村に生れた。併し漁師の子でも無く、百姓の子でもない。昔なら矢張り侍の子である。吾が家族は御維新の後、城下に住ふ必要も無いといふので、この漁村に移住した。自分の產土神は村の八幡樣である。三四歲の頃までこの村に生長したのだが、取留めた事は何一つ覺えて居らぬ。只今日まで三十何年といふ長い月日の流を源まで溯つて行くと、そこに何やら夢のやうな、而もある點は極めて明瞭な記憶が殘つて居る。今この記憶を其の儘書いて見ようと思ふ。併し

夢よりも纏まらぬ、謂はば幻影の如きある感じだけが殘つて居るのだから、事件といふものは少しも無い。

家の裏が藪で、緣先は畠になつて居る。海は砂山を越えて後にある。絕えずどうどうと浪の音が聞える。道といはず畠といはず砂ばかりで、駒下駄で歩いても音がせぬ。何年たつても下駄の齒が減らぬ。家を建てる時は砂の上に水を五六荷もぶちまけると、砂がガツシリ締つて巖よりも硬くなる。其の上に土臺石を据ゑて置けば善いのだといふ。これは無論大きくなつてから聞いた話だが、わが家が砂畠の中の一軒家であつた事は今でも善く覺えて居る。家は藁葺であつた。畠には梅の木が二三本もあつた。藪には蟹が居る。澤蟹が小石を撒いた程居る。人が行くと驚いてがさがさと竹の枯葉に隱れる音が藪の嵐よりも烈しい位である。

藪許りでは無い、臺所の板間を這ひ廻る。天井の上を走る。夜分寢靜まつた後、唐紙の外に曲者の跫音かと驚かれた事も一度や二度では無かつたと、これは後に母から聞いた話である。

ある時ふと眼が覺めた。炬燵に只獨り寢かされて居つた。見ると母も居らぬ、父も居らぬ。何時もこの室に居らぬ事のない祖父さへも居らぬ。恰も空屋であるが如く森閑として居るので急に悲しくなつた。悲しくなつたから聲の有りたけを出して泣いた。誰も出て來ぬ。この室は今考へて見ると丁度四疊半位で、寢て居る右側の障子が薄暗くて、赤くなるまで煤けて居つた。頭のところに黑光りのするけんどんの簞笥があつて、簞笥の上に大きな佛壇が載せてあつた。吊した眞鍮の燈明皿の尻がきらきら光つて居る。聲が出なくなる程泣いて居ると、奥の室の緣の方に音が

して、誰か遣つて來る氣はひである。一寸泣聲を止めて耳を澄ましたあたふたと唐紙を開けて入つて來たのは母と思ひの外祖父であつた。大方畠に出て居つたのであらう、片手に小さな鉈を持つて居る。お母さんは今お手水だから少しお待ちよとか何とか賺されたが、母でなかつたのが不平で再び泣聲を張上げた。

祖父の顏は今でも善く覺えて居る。鼻の高い面長な顏で、左の頰に指で突いた程凹んだ處がある。いつか大層齒が痛んでこんな窪みが出來たとのこと。祖父は自分の頭の處に立つて佛壇の抽斗を開けて何やら搜して居る。泣き乍ら上眼で見ると、祖父の尻に狐の尾がぶら下つて居る。祖父は毎年冬から春へかけて狐の毛皮のちやんちやんを着て居るのである。炬燵にあたつて居る時などは、いつでもこの尻尾が疊の上に横たはつて居るので、

後からそつと行つて引張る。すると祖父は「あゝ痛い、痛い、祖父ちやんの尻尾が拔ける。」といふ。さう言はれるのが面白さに尻尾が見えさへすれば直ぐ引張りに行くのだが、今日は母が居らぬので大不平の際だから、無論引張りに立つ氣は無い。仰向けに寢たまゝ愈〻大聲を揚げて泣いた。

祖父が抽斗から取出してくれたのは煎餅であつた。馬の耳と稱へる大きな煎餅であつた。端をひねつて漏斗のやうな形にしたので、脊中に渦が三つ卷いて居る。この煎餅は法事のある時に饅頭と一緒に配る煎餅だが、なぜこの時この煎餅が佛壇の抽斗に入れてあつたかは今に解らぬ。兎に角自分は之を貰つて大いに嬉しかつた。併し煎餅の旨い事が母の顏を見る代りにはならなかつた。是によつて煎餅を食ひ且大いに泣いた。若し母がある

事情の下に、晩になつても朝になつても、一年たつても二年たつても、このまゝ内に還らぬのであつたらどうだらう。さうして祖父が馬の耳を佛壇から取出して、やけに泣く自分を慰めるのであつたらどうだらう。こんな例は世間に幾らもある。祖父たるものの身になつては、こんな遣瀨の無い難儀は又と有るまい。幸にして今はさうでは無かつたが、自分の悲しさはこの場合と少しも異ならぬ。異ならぬから馬の耳を食べながら泣いた。果は馬の耳を拋り出して泣いた。

祖父は今はせう事なしに、狐の毛皮の上から自分を負うて、「お母さんに連れて行くからちやんとお止め。」といつて外へ出た。母が手水場に居らぬは勿論、今日は家族の總べてが外出して、祖父と自分だけが留守番に殘されたものと見える。負はれて泣きや

みはしたが、炙を据ゑられた後のやうに泣きしやくりが止まぬ。外に出ると氣分がせいせいした。母に抱かれる望が出來たばかりでなく、磯邊のうらうらとした春色が吾が小さい胸の不平を和らげたのである。やがてしやくりも止んだ。畠の向うは小高くなつて居つて、こゝから砂山の松林になる。松の下の道を負はれて行くのが躍り上る程嬉しい。祖父は嬉しくも無いかして、無言の儘すたすたと松の間を縫うて行く。ある日裏隣のおさきに連れられて、この松林に松露を掘りに來た事がある。松露を掘るのは譯は無いもので、有りさうな場所を見て熊手で掻くと、手に應じて玉麩のやうな丸いのがころころ現れる。

松林を離れると直ぐ砂濱である。果も無い砂濱である。防風が紅い莖を僅かばかり現して砂に萠え出でて居る。碧い海が見え

る。後を振向くと松林は遙かに遠くなつて、ちやうど屏風の繪のやうに見える。祖父の足跡は松林から斜に一直線に續いて居る。誰のやら分らぬ足跡も三筋許りうねうね續いて居る。濱の砂は樺色である。海邊ならきつと砂濱があるもの、砂濱ならきつと樺色をしたものとばかり思つて居つたが、他國に來て見ると丸で砂濱が無かつたり、假令あつても砂の色は薄黑いのが多いと云ふ事は長じて後に始めて知つた。海はだんだん廣く見える。それにこの海岸のやうに、家のある處から汀まで二町も三町も、時としては七八町も砂濱になつて居る處は餘り無い。ところどころ小山になつて淺茅の生えて居る處もある。或は風のために擂鉢のやうな形に大きな窪になつて居る處もある。

祖父は依然として無言のまゝ、砂の小山を越え、砂の谷を渡つ

て、だんだん浪打際の方に降りて行く。海は眼が屆かぬ程廣くなる。生暖かい風が松林の方から吹いて來る。頰に雨があたるやうに冷たく感じたのは、溜つた涙に風があたるのである。

日本海は波が荒い。海は絶えず大波が打つものといふ事も、こんな子供の時から深く頭に染込んで居る。須磨の浦や品川の海を見て、こんな海がと大に輕侮の念を生じたのも、全く海の觀念が違つて居るからである。綠色の水のうねりがだんだん膨らんで來るかと思ふと、波の腹が薄暗くなつて前に崩れつゝどさどさどさと打つて來る。どさつと打揚げた波は、むら消えの雪の如く斑に泡立つて一時平かに漂ふ。暫く漂うた後、急に思ひ出したやうに寄せ來る波の底に引返す。引返した水は待構へて居る波と合して前よりも一倍激しく打揚げる。水煙が霧の如くに立つ。

時としては返す勢の烈しさに、居丈高に寄せる波の勢を挫いて、水面は却つて意外に平和を保つこともある。今日のやうな麗かな軟風の日といへどもこの活動は瞬時も止まぬ。

祖父はすたすたと浪打際を西に向つて行く。何處まで行くのか分らぬ。時としては波の泡が祖父の草履の際まで這ひ進む事もある。恰も虎か何かが腹這ひになつて祖父の足を嚙みに來るやうに見える。祖父は頓着なく西へ西へと行く。人には誰にも出遇はぬ。只軟風が祖父の鬢の毛を輕く動かし、自分の頰を撫でて行くのみである。涙はもう疾くに乾いた。背中は蒸すやうに暖かい。善い氣持になつて、毛皮に靠れてうとうととなつた時、何やら人聲が耳に入つた。眼を開けて見ると、嬉しや紛れも無き吾が母であつた。何が嬉しいつたつてこんな嬉しかつた事は滅多に無

い。祖父が卸してくれる間も待たずに、兩手を出して飛付いて抱かれた。祖父は泣いて泣いて困つたと零しながら、自分を母に渡して額の汗を拭つた。母は裳裾を揭げて水の中に立つて居る。寛やかに冠つた白手拭がつやつやとした頰に映えて、微笑を湛へつゝ何やら言ふたびに鐵漿をつけた齒が漆よりも黑く鮮かにきらめく。今から考へると母もこの時は若盛りであつた。今の樣な皺くちやのお婆さんでは無かつた。母の顏は今に至るまで眼に染む程見て居るのだけれど、この時程なつかしく美しかつた顏は餘り覺えが無い。母は隣のおさき等をつれて島に和布刈りに來て居るのである。かどかどしい親島は一段ばかり前に屹と峙立つて居るが、親島に至るまでには數十の子島が散在して淺瀨を成して居る。こゝは波も餘り立たず、女子供の遊び場にはこ

の上も無く善い處である。

自分は實はこの日の事に就いては、母の顏を見て飛上る程嬉しかつた外は何も覺えて居らぬ。母に抱かれて乳房を含んだか、賺されて母の膝に眠つたか、或はおさきに負はれて遊んだか少しも覺えぬ。祖父が狐の毛皮を着て浪打際を歸る後姿の小さくなるまで見送つたかも知れんが、無論それも覺えぬ。覺えぬ事は書きやうが無い。只かゝる覺束なき記憶の中で、春の磯に和布を刈りつゝ自分を迎へてくれた母の顏が、今に至るまで眼にありと見える事を不思議に思ふのである。（夢の如し）

櫻井忠溫 陸軍少將。明治十二年生。

將軍乃木 名は希典。日露の役、第三軍司令官に補し、攻圍半歳にして旅順を陷る。後從二位伯爵に叙す。大正元年九月十三日歿、年六十四。

白井中佐 名は二郎。第三軍參謀。

乃木少尉 名は保典、乃木將軍の第二子。行年二十四。

二七 將軍乃木

櫻井忠溫

灯を消して

明治三十七年十一月二十八日の夜、參謀部の電話のベルがけたたましく鳴つた。

「おーい、何か。」

と、受話器を耳にあてながらかういつたのが白井中佐。

「俺か、俺は白井ぢや。何か。」

「ふむ、又失敗。何！　乃木少尉戰死した！　戰死したのか。……どうして……傳令中にさあ、それを將軍に言はんといふわけには行くまいて。よしよし何とかするよ。うむ、うむ、もう一度夜襲する。よし、弔合戰をやつてくれ。さよなら。」

かういつて電話が切れた。

白井中佐は受話器を手から離しもしないで、呆然としてゐた。窓の外には、ひゅうひゅうと寒い風が闇の中を吹いてゐた。

時計を見ると、もう九時に近かつた。中佐はどうしようかと考へた。しかし第一、戰況を報告もしなければならないので、中佐は思ひ切つて大將の部屋へ入つて行つた。

部屋の中は眞暗であつた。大將はもう休まれたのかと思つて一寸躊躇した。しかし、大將が火もつけないで部屋にゐることはいつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。休んでででもゐられるのかなと思つた。

すると、暗の中から「だれかい。」といふ聲がした。

「はい、白井であります。」

「さうか、何か用か。」
「戰況を申し上げに……。」
かういふと、ぱちつとマッチが點つた。大將の顏が蒼白く光つた。
大將は蠟燭に火をつけた。蠟燭の心がじいじいと音を立てた。
「戰況といふと……。」
「二百三高地でございます。」
「うむ、どうだつたな。」
「遺憾ながら、又失敗に終つたと、第一師團から言つて來ました。」
「さうか……死傷はどのくらゐあつたな。」
「はゝまだはつきり分らぬと思ひますが、すぐ調べまして……。」
蠟燭の火に照らされた大將の蒼い顏を見ると、それ以上のこ

二百三高地後出。

とが中佐の口から漏らしかねた。
大將はじつと灯を見つめたまゝ、何ともいはないでゐた。
中佐は大將の顏を打戍りながら、涙がこみ上げて來た。そして手足がぶるぶると震へた。
「死傷者をよく調べて下さい。」
大將が思ひ出したやうに、かういつた。
「はい。」
「もうそれだけかい……。」
「それに閣下。閣下の御令息は、戰死されました。」
中佐の口から我ともなしに吐きだされた。何だか、大將から引きだされたやうに。
「何！　保典が……さうか。」

かういふと、大將はふいと蠟燭の火を消してしまつた。そして體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。

中佐はじつとそこを見つめた。しかし、もう何の音もしなかつた。中佐は足を忍ばせて外へ出た。

ごうごうといふ風の音が、窓の外を通りすぎた。

曠野に立ちて

乃木さんは涙もろい人であつた。いこぢなところがあつて、一寸見には近づきにくいやうだが、人一倍、情には、もろい人であつた。

旅順開城の際、貴衆兩院議員の一行が旅順へ行つて、乃木大將に令息戰死の悔みをいつたところが、乃木さんは、ほろりと涙を落された。

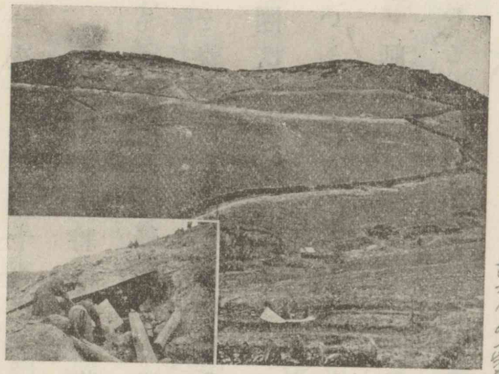
二百三高地
關東州旅順の西北。日露役戰蹟。

第一回總攻擊
八月十九日より二十四日まで六晝夜に亙りし血戰。

副官が側にゐて、「眼を惡くしてゐられるものですから。」といつて場を繕つたことがある。

二百三高地を爾靈山(汝の靈)と名づけたのも、こゝに死んだすべての人のためにといふ意味であつた。保典の死に對しても、爾靈山の名は萬斛の涙を含む文字となつた。

明治三十七年八月末の或日の午後、第一回總攻擊に失敗して、第一線に生き殘つてゐる者も、もう戰ふ力はなかつた。そして、何萬とも知れぬ負傷者が、あの谷この野に眞黑に横たはつた。死者は無



二百三高地の頂上
(下圖は我が軍に破壞されたる敵の掩蓋)

論多かつた。その死體を燒くことすら出來なかつた。三千の聯隊一夜にして五十人になつたのもあつた。

當時、乃木大將の下に集つて來る第一線からの報告は、いづれも大將の胸を痛めるもののみであつた。「師團の數回の突擊も效を奏せず、今はたゞ殘兵を集めて只一回の突擊を行はんのみ。」「師團は命令を遵奉するの一點に於て、突擊以て骨を曝さんのみ。」といふ報告さへあつた。

師團は只僅かに一回の突擊を行ふ餘力あるのみ。師團は命令なるが故に突擊骨を曝すにありて、成功固より望み難し、といふ報告であつた。「死ね。」と命令する乃木大將の胸中、かゝる報告を耳にする胸中は、熱鐵を呑むの思ひであつたらう。

全滅全滅。それは旅順戰の名物であつた。第一師團全滅、第九師

バルチック艦隊 バルト海に根據せし露國の主力艦隊にして、明治廿七年十月東航。翌年五月廿七八日、日本海にて殆ど全滅。

團全滅……と血涙を含む旅順戰の代表語であつた。バルチック艦隊は來さうだ、北方の戰場では乃木軍の北進を待つてゐるといふ時、前面の狀況は全滅につぐに全滅を以てし、徒らに死の部隊を拋つに等しい時に當つて、乃木大將は八つ裂にされるより苦しい思ひであつたらう。

その時、乃木さんは靜かに歩いて、野の中に立つた。見渡す限り負傷兵ならざるはない。

乃木さんの眼は涙に光つた。そして後に倒れんばかりになつたのを、副官がやつと支へた。

暫くして乃木さんは副官に、「氷を持つて來い。」といつた。

乃木さんは負傷兵の側に行つて、「よくやつてくれた。早くよくなつて又來てくれよ。」と、一々手をとるやうにしていつた。そして

大勢の負傷兵の間を、一々かういつて慰めて歩いた。

やがて副官が運んで來た氷を割つて、負傷兵の口へ入れてやつた。私もその氷の一片を貰つた一人であつた。負傷兵達は涙を流し流し乃木さんを仰ぎ見ながら、乃木さんのもとで死なんことを思はざるものはなかつた。

廣い野の中に立つた乃木さんの衰へた姿、それは今に忘れ得ない。

私の傷ついたのは第一回の總攻撃であつた。乘るか反るかの戰爭であつたが、殘念にも失敗した。從軍米國記者の著述中に、その時の光景をかう書いてゐる。

「第一回總攻撃のあつた八月の一週間、乃木大將は常に前線に出て居た。此方の丘に立つかと思へば、又彼方の山に移つた。そ

して、突撃隊が相率ゐて露軍の砲火を浴びつゝ、さながら日光の下に消ゆる靄のやうに、相次いで消え行くのを注視した。」

「將軍は其の所屬軍隊を驅つて、勇氣と忍耐力の有らん限りを盡くさしめたしかも自らも亦、全く同樣であつた。露軍の砲火に斃れたり、病院に悶死した士卒の病苦よりも、更に深刻を極むるものであつた。」

淋しき影

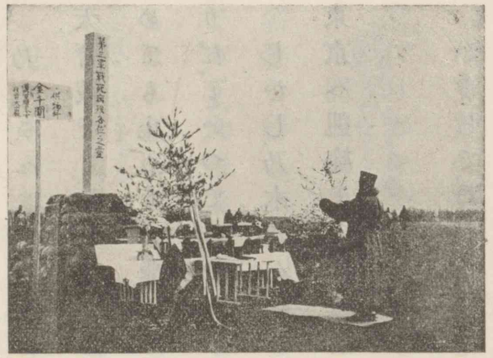
乃木さんが旅順で苦しんでゐる間に、切腹しろの、辭職しろのといふ手紙がいくつともなく來た。乃木さんの家へ石を投げたり、門前で罵るものもあつた。中には、「俺の息子を生かして歸せ、そんな無駄死をさす爲に戰爭にやつたのぢやない。」といつたやうな手紙を寄越したものさへあつた。

勝つたとなると、石を投げたことも忘れて、提灯行列や旗行列で、その門前で萬歳を歡呼した。戰況不利となると、石を投げた。石を投げたり、提灯行列をやつたりした。それも國を思ふ心に外ならなかつた。たゞ勝たしたい、勝つて貰ひたい一念からであつた。

戰場の乃木さんの手許へは、何千通といふ問責狀が來てゐた。乃木さんはこれを見られては、腸九廻の思ひであつたらう。

旅順戰が捗どらぬので、誰しも苛立たしくなつた。乃木さんとても、ゆつくり構へてゐるわけではない。しかし、さう思ふやうには行かなかつた。止むを得ず多くの人を殺さなければならなかつたのである。されば、こそ、保典少尉の死を聞いても、「これで申譯が立つ。」といつたくらゐ、乃木さんは日夜胸を引裂く思ひでゐたのである。

旅順が落ちた時　明治三十八年一月一日、敵將ステッセル降屈、翌二日調印、十三日入城式。



水師營附近に於けるの招魂祭
（祭文を朗讀してゐるのが乃木大將）

乃木さんは何事も自分の罪だと思つてゐた。こんな手紙が來ても、幕僚には「だれにも言ふな。」といつてゐた。これが漏れては士氣が沮喪するからである。

旅順戰直後のこと、幕僚の一部を轉職させるやうな相談があつた時、乃木さんは承知されなかつた。この場合轉職さしては、旅順戰の失敗からだと世間で思ふだらうといふ乃木さんの深い考へからであつたかういふことまで、乃木さんは苦心しなければならなかつた。

旅順が落ちた時、乃木さんは戰死者のために祭壇を設け、その

奉天會戰　明治卅八年二月下旬より、會戰十數日に亙る激戰の後、三月十日占領。

前に立つて、泣く泣く弔詞を讀んだ。列座みな泣かぬものはなかつた。乃木さんの胸を察すると、たゞ「死」の一字に盡きる。

乃木さんは、どうしても生きて歸れぬと思つてゐたやうだ。奉天會戰でも、乃木さんは第一線へ飛びだして仕方がなかつた。止めても止めても飛びだした。あたりの者は、「乃木さんは死ぬつもりだ。」といつてゐた。

しかし、乃木さんはこゝでも死ねなかつた。そして心を狹めて、東京へ凱旋——といふよりも、孤影(けい)(けい)として歸つて來た。

人生電車

かうして、乃木さんは淋しい一生を終つた。

乃木さんは、こんなことを言つたことがある。

「電車に乘つてゐると、座席を覗つてゐる者は坐れないで、ふらりと入つて來た者が席を得る。これが世の中の運不運といふものだ。」

乃木さんの一生も、それであつた。乃木さんは、人生電車の幸運者ではなかつた。

人間としての乃木さんは、淋しい暗いものであつた。地位を得、名譽を得るといふなら、もとより、乃木さんは伯爵であり、功一級であり、大將であつた。しかし乃木さんには、自分を狹いものにするほど寂しいものがあつた。人間乃木としては、一生涯、大きな石に壓されてゐるやうな心もちで暮して來た。

暗いものが煙のやうに乃木さんの一生を蔽うてゐた。

（將軍乃木）

二八 短歌鈔

尾上柴舟

尾上柴舟 名は八郎。文學博士。東京女子高等師範學校教授。明治九年生。

樫の實のひとつ落ちくるとどろきに小魚かげ散る山の井の水

小羊のしづけき夢やまもるらん牧場にひくき夕づつのかげ

神がきに月はのぼりてこまいぬの肩にかしらに梅のかげあり

蟬の聲ゆふべにせまるふる寺の庭ひややかに萩の花ちる

金子薫園

金子薫園 名は雄太郎。短歌研究會主幹。明治九年生。

鳥のかげ窓にうつろふ小春日に樹の實こぼるる音しづかなり

手むけにと植ゑし小萩の花さきて朝風さむし母のおくつき

大銀杏ひと葉動かず秋雲の晴れたる下に黄なるしづけさ

夜の雨にしめる線路の石だたみ遠く照らして電車は來る

忽ちに風の如くにつどひ來し小鳥に黑く染まる冬の樹

與謝野晶子 與謝野鐵幹夫人。明治十一年生。

與謝野晶子

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人皆うつくしき

繪日傘をかなたの岸の草に投げわたる小川の春の水かな

草踏みて草履のしめる心地さへ嬉しき夏となりにけるかな

金色のちひさき鳥の形して銀杏ちるなり夕日の岡に

いにしへのさびしき人もかくしけん蓬生にゐて大空を見る

北原白秋 名は隆吉。明治十八年生。

北原白秋

こんもりと楊柳かがやくまさびしき遠き入江に日の移るなり

霧雨のこまかにかかるひとつ柳つくづく見れば春たけにけり

飛びあがり宙にためらふ雀の子羽たたきて見居りその搖るる枝を

畫ながら幽かに光る螢一つ孟宗の藪を出でて消えたり

大空に何もなければ入道雲むくりむくりと湧きにけるかも

齋藤茂吉 醫學博士。和歌を伊藤左千夫に學ぶ。明治十五年生。

齋藤茂吉

ひんがしはあけぼのならむほそぼそと口笛ふきて
行く童子あり

ゆらゆらと朝日子あかくひむがしの海に生れてゐ
たりけるかも

あまがへる鳴きこそいづれ照りとほる五月の小野
の青きなかより

ふるさとの藏の白かべに鳴きそめし蟬も身に沁む
晩夏のひかり

ひさかたのしぐれふりくる空さびし土に下りたち
て鴉は啼くも

徳富蘇峯 名は猪一郎。思想家。貴族院議員。東京日日新聞社賓。

紫震殿 京都皇居の正殿。朝廷の儀式を行はせ給ふ所。

二九 五箇條の御誓文

徳富蘇峯

五箇條の御誓文は、實にこれ維新大改革の宣言書である。日本帝國の新時代に於ける第一聲である。過去に於ける三千年の歴史を一括し、將來に於ける幾千載の國是を指定したる帝國不磨の寶典である。其の起草者の何人であるかを吟味する必要は毫もない。何となれば、これは一人一箇の意見に成つたものではなく、實に時代の一大志望、擧國の一大渇仰を、明治天皇の御名もて神明に誓はせ給ひ、天下に示し給うたものであるからだ。

抑五箇條の御誓文は、維新の詔書と同時に成つたもので、實に明治元年三月十四日、天皇紫宸殿に御し、群臣を率ゐて祖宗の神靈に誓ひ、之を中外に宣し給うたものである。

一、廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。

これが明治二十二年、帝國憲法によつて、帝國議會を開設し給うた根元である。而して此の會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である。

一、上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。

これは擧國一致、以て國運を進捗せしめ、帝國の世界に對する天職を遂行することを意味したもの。

一、官武一途、庶民に至るまで、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。

此の一條中の主眼は、「其志を遂げ」の點にある。其の志を遂ぐることは、國民の志望を遺憾なく發揮せしむることを意味する。それたゞ其の志望を發揮し、日に就り、月に將む。故に自ら倦むところを知らず。

一、舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

これが維新大改革の中樞點である。長き歴史ある國民は、動もすれば其の歴史に拘り囚れて、其の歴史の最も不必要な部分、最も有害の部分、卽ち過去の糟粕とか、塵垢とか云ふ部分に執着するものである。故に建國の大精神に顧みて之を一洗する必要を生ずる。如何なる家に於ても、一年に一回乃至兩回の大掃除は必須である。況や國に於てをや。復況や其の國數百年鎖國の狀態に停滯したるに於てをや。

茲に天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例故慣を株守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て公道と爲す所を、正視濶歩すべきを示し給うたもの。

一、知識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

讀んで字の如し。殊更吾人の説明を要しない。

我國未曾有の變革を爲さんとし、朕躬を以て、衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯國是を定め、萬民保全の道を立てんとす。衆亦此旨趣に基き、協心努力せよ。

如何にもあり難き思召である。此の五箇條の御誓文は、實に帝國の向ふ所、國民の趨く所を指點したる羅針盤であり、燈明臺であり、案内標である。吾人が維新の大精神に立返れと云ふのは、とりも直さず此の五箇條の御誓文に立返れと云ふのである。

（國民小訓）

笠井信一　貴族院議員。前岩手縣知事。昭和四年歿、年六十五。先月、大正二年一月。

三〇　明治天皇の御遺物を拜す

笠井信一

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に參内致しました處が、十一時すぎ權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。卽ち私どもは此の度、帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで私どもは長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋し其の瞬間は何人といへども、一種の靈感に打たれないものは無かつたでございませう。其の權殿と申すは、平素、皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て之に充てさせられたのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には永くこゝに在らせられて、德教を御布きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられるなど、宏謨雄圖一に此の中で御定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが參内の節休息を許される御部屋の方が、却つて遙かに御立派である。而も餘り廣くない二間續きの御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も御椅子も實に御質素なもので、絨毯の如きは當初敷かれた儘のもの故、後には色も大分褪めて參りましたので、侍臣から御取換を屢願ひ

出でましたが、御許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に南向に御据ゑになつてあります。此の御構造を拜觀すると同時に、夏分は嘸御暑い事でいらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。これにつけても、

年々におもひやれども山水を汲みてあそばむ夏なかりけり

の御製を思ひおこして、誠に恐懼に堪へませんでした。それのみならず、此の御部屋にはストーブの御設備がございますけれども、三十七年の冬以來御用ひがないひそかに承るに、其の年の冬

ストーブ Stove 煖爐。

の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍從は何故か分りませんが、唯仰の儘に火を消しました。さて其の後と申すものは、如何なる嚴寒にも一切ストーブを御使用遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心を伺ひ奉る譯には參りませんが、侍從方の推測し奉る處によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戰ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共に遊ばさうとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今其の御火鉢を拜觀するにつけても思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかなすきま多かるしづが

ふせやを

でございます。

此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部、其の儘に据置かれてございます。是は今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日卽ち先帝最後の出御當時の儘に、御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には數振の御劍が置かれ、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を

テーブル Table

得ました。

御常用の御机

まづ御机は羅紗を鏡張りにしたテーブルで、中程に燒痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つて入らせられた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸掛けの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草が墜ちて此の燒痕がついたのだと申す事で御座います。さて此の燒痕のあるテーブルの羅紗を御取換申し上げる事を幾度か願ひ出でましたけれども、斷じて御許が無かつたとの御

インキ Ink

事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至と拜察し奉ります。

御硯箱は明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。其の中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えない程に御使ひふるしになり、墨も亦同樣で、一寸位に磨りへらされた品でございました。鋏も同じく普通市場にある品で、其の傍に、學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍從の方が何かの調べに用ひた儘、其處に置き忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら省みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

一時　明治六年五月皇居炎上の後。

ホワイトシャツ　White shirt　洋服の下に着るシャツ

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは一時青山御所に御出で遊ばされた頃から久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れる樣になりました。そこで御取換を願ひ出でましたが、「なに、宜しい。」とて御許が無い。せめて御修理をと願ひ出で、漸く御許を得た。併し適當の皮が無い事を言上致しました處、何の皮でも宜しいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申す事で、侍從が「此の邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうの物が澤山積み重ねてございましたから、何に遊ばす物かを侍從に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとて、御手許に留め置かせられたのであるとの事でございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は、用ひるに其の途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞し召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務め

て御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。

一天萬乘の大君におはしながら、禿びた御筆を御用ひになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召で入らせられませうか。皆是れ節すべきを節して、有用の事にのみ御用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

御次の間には、造花や彫刻や種々な御品が備へてございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御奬勵の爲に御持歸り又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは

御愛翫の置物（二宮金次郎）

考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪め果てて殆ど裝飾の用をしないものまで、其の儘になつてございます。其の他、美術工藝品の御買上げも、皆御奬勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。

御製に、

千萬の民とともにもたのしむにますたのしみはあらじとぞおもふ

とございますが、實に此のやうな御樂を求めさせられる爲に、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御陰を以て隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は

長い間聖天子御一人に、非常の御苦勞を御掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされるたのし
みはなし

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても、力のあらん限りを盡くし、以て我が日の本のかための爲、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。（宍手縣學事彙報）

小笠原長生　海軍中將。子爵。

東郷大將　元帥海軍大將伯爵東郷平八郎。

拙者　海軍大將島村速雄。

磐手・八雲　當時第二戰隊に屬せし巡洋艦。

二十九日　明治三十八年五月。

敵艦　アドミラル・ウシャーコフ。

三一　鸚鵡

小笠原長生

「戰鬪後、未だに東郷大將その他の方々に御目にあたらず候へども、皆々樣御無事なりし事と信じ居り申候。この度の大勝利最早とくに御承知の事と存候。全國の喜さこそと察し候。拙者儀はこの度は別して閑にて、何の御用もなく、たゞこの空前の大海戰の光景と大勝利を拜見致候のみにて、生來この位愉快を覺え候事は無之、御推察可被下候。戰況は新聞にて御承知可被成、拙者は語らざること例の如し。たゞ二十九日夕刻、磐手と八雲との兩艦にて打沈めたる敵艦の乘組員を、時間の餘裕有りたるため、三百三十餘名まで海中より救ひ上げやり候事は、母上樣の御喜び被成候事と存候間、これだけは御話し上げ

川島磐手艦長
海軍大將川島令次郎。

可被下候。今一つは川島磐手艦長の飼養せられ居候鸚鵡一羽、平生拙者公室におき閑暇の節の好伴侶に有之候處、戰鬪の始る前、艦底に運び保護いたしおき、戰鬪終るやまた運び上げ候處、何のことか分る筈も無之、うろうろいたしながら平日覺え候、馬鹿馬鹿」「お早う」「おくれ」の三語を發し、拙者も覺えず失笑いたし候。これは初太郎のお伽噺までに書認め申候。戰鬪後も、そちこち敗敵を搜し候ため、引續き巡航致居候へども、今夜か明朝は一寸郵便を差出し得る事と存候間、面倒ながら一書斯くの如く、母上樣に前書宜敷申上可被下候。」

この書面は島村司令官が五月三十一日、夫人に宛てて書かれたるもので、その母堂に對する孝心と令息に對する慈愛の如きは、讀者をして思はず眼頭を熱うせしむるではないか。

さてこの鸚鵡といふのは、川島磐手艦長が軍中の慰藉にもと知人より贈られたもので、艦長の親友となり、島村司令官からもまたとなきものと愛でられて居た。この鸚鵡は特に人語を操ることが巧みで、司令官や艦長が果物でも食べてゐるのを見ると、眼をくりくりさせながら「おくれ！」「おくれ！」と幾度でも繰返して、曲つた嘴をもごもごさせ、それでも希望を達し得ないと、羽毛を逆立て「馬鹿！」とやり、「お竹さん馬鹿！」と罵り、當代無二の謀將や名艦長を下女扱ひにして平然たるのみか、結局果物の半分をうまくとりあげるといふ愛嬌者であつたから、海戰開始に先だち、川島艦長は從僕に、

「彼奴に怪我させては可哀さうだから、水線下の場所に移して置け。」

晝戰 五月二十七日（第一合戰）

常宮 昌子内親王。明治天皇第六皇女。竹田宮大妃殿下。

周宮 房子内親王。明治天皇第七皇女。北白川宮大妃殿下。

と命じた。そのうちに砲戰が始ると間もなく、一發の巨彈が艦長公室の右舷に命中爆發し、更に他の一彈は以前に鸚鵡を置いてあつた部分を貫通して、その下にあつた萬年青の鉢なども微塵に碎けた程だつたから、鸚鵡が居たなら悲慘な最期を遂げたであらう。晝戰が了ると間もなく、艦長公室に降り來つた司令官と艦長とは、從僕に命じて早速鸚鵡を持ち來らせた。處が固より彼は何事も知らない。羽毛を逆立て、司令官や艦長を見るより早く、「馬鹿！」「馬鹿！」と疊みかけて罵聲を浴びせた。滅多に笑はない司令官も艦長を見返り、さも心よげに大笑した。

勇將よりかくまで寵愛を辱うしたこの鳥は、凱旋後、川島艦長より、當時高輪御殿にあらせられた常宮・周宮兩内親王殿下に獻上し、永らく御愛撫の光榮に浴したが、その天壽を完うした後も

竹田宮御殿 東京市芝區高輪南町。

この正月 昭和五年

剝製に遊ばされ、現に竹田宮御殿に御保存あらせられると承る。また敵彈のために鉢を碎かれ牛蒡拔きにせられて投げだされた萬年青も、その後名の通り青々と復活し、これも亦現に川島家に珍藏せられてある。恐らくこの正月も同家の床を飾り、無言の裡に所有主の戰功を物語つてゐるであらう。（擊滅）

仁者の心、動きなきこと大山の如し。無欲なるが故によく靜なり。（熊澤蕃山）

○

眞に大志ある者は克く小物を勤む。眞に遠慮ある者は細事を忽にせず。（佐藤一齋）

霊萍雑志　四卷。柳澤淇園の隨筆

柳澤淇園　大和郡山藩の重臣。名は里恭。寶暦八年（一七五八）歿、年五十三。

葛飾　東京市葛飾區・江戸川區あたりをいふ。

三　雲萍雑志鈔

柳澤淇園

農夫と茶の湯

江戸葛飾のほとりに、權兵衞と言へる村長あり。或年の春、伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて、村民十三人と共に御師何がしが家に宿れるに、山海の珍味を盡くして馳走ありて後、各〻に薄茶まゐらせんとて、案内して茶室に招き請じければ、かの村長を初めとして十三人席に着きけるに、御師は丁寧にあいさつして、心を配り茶を點てて、權兵衞が前に出し置きけれども、農夫の身にて、茶道の心得はいさゝかもなければ、大いに心を苦しめ、場うてして思ひけるは、「いかにして飲むべき。人の話にも、茶を飲みたる上にて順に廻すなどと聞きしが、十三人へ一杯ばかりの茶を飲

みかけ廻したりとも足るべからず。また一人して飲み、他の者に鼻あかさせん事如何なれども、われ村長の身として、今更聞きて飲まんも口惜しき事なり。」と、さまざま心の中に思ひ廻らすうちに、御師は先に出しし口取菓子を村長が前にさし出し、「いざ召させ給へ。」と強ひければ、はつと茶を取上げて殘らず飲み、前に置きければ、御師は取りて茶碗をすゝぎ、また點てて村長が前に出しつゝ、「いざ菓子を取り給へ。」と言ふに、このたびは菓子を取りて食ひ、また茶を殘らず飲みて前に置きければ、御師また取りてもとの如く點てて、また村長が前に出す。村長言ひけるは、「我等はもはや澤山下されたり。」と言ふに、「さあらば次の方へ御送りあるべし。」とて、この順にして各〻一碗づつ飲み、辭退して座敷に入りて、各〻窃にその心勞を物語りつゝ臥し、「またも茶の饗應あらばいかばか

り迷惑すべき。早く暇乞して歸國するには如かじ。」とて、あくるを待ちて發足せり。後に權兵衞余が許に來りて、「願ひたき事の候。」と言ふに、「いかなる事ぞ。」と問ひければ、「過ぎし春、伊勢にて恥を得し事はべれば、茶の手續を敎へ給はるべし。」とて、しかじかの事を物語り、「今に忘れ難く、恥づかしく、また口惜しく覺えき。」と言ふに、余大いに笑ひて、「その許は日頃に似氣なき不見識の人なり。農夫は農家に人となりて、農業の事にさへ詳しければ、恥づかしき事なかるべし。茶はもと隱遁の手すさびにして、その道日用に足れりと雖も、農夫・町人などの致すべき事にあらず。世を遁れし隱居の後などはともあれ、その許若し茶を學ばんに、一村皆これに倣ひて農事を怠りなば、田畑は悉く不作なるべし。村長茶道を知らざるが故に、耕耘收藏時にたがはず。國中百人耕して五十の遊民あ

信貴 奈良縣生駒郡にある大和・河内の國境の山。高さ四三七米。

らば、その國必ず飢ゑぬべし。百人耕して十人遊ばば、その國果して豐かなり。」と言へば、權兵衞感じて、茶の湯を習ふ事思ひとゞまりぬ。

五月雨の句

信貴の毘沙門堂に四季連歌の句會あり。その中に、「五月雨に年中の雨降りつくし。」といふ句あり。何某の大納言聞しめされて、「何者の申したるにか、この句の主を尋ぬべし。」とありける時、高橋某そのゆかりあるものに問ひければ、かのあたりなる村長の申したる句なりとて、わざわざ御使の消息を賜ひて、もし京へも出づることのあらんには、必ず參るべしとの事ゆゑ、いと有りがたくて、かの村長わざわざ京へ出でて尋ねまゐらするに、「さあらば會ひて物語せん。」とて一間へ通し給はれば、村長いふ、「風流の面目、雲

の上まで聞えけんこそいとありがたけれと存じまゐらするなり。」といふに、大納言も四方の話ありて、さて尋ね給ふは、「年中の雨といへる趣向の面白くおぼゆるからに、その句意を聞きたく侍れば、會ひ申したり。いかなる故事かありてかく申しし。」とありければ、村長こたへて言ふやう、「別に故事と申すも候はず。たゞ五月雨の昨日も降り、今日も降りつゞけて、明日も亦かく降りくらしなば、一年の雨も、この頃の五月雨に降りつくしぬべきと思はれ候心より申したる外は所存なく候なり。」と申しければ、「面白く覺ゆるなり。」とて入り給ひぬ。村長が歸りし後、高橋出でて、「いかなる御事ぞ。」と尋ねまゐらせければ、大納言の仰には、「さりとてはまろが思ひしとは違へり。五月雨には四時の如く、雨のさまいろいろに降るものゆゑ、春雨のさびしきにくらべ、夏の夕立にたぐへ、秋

の雨のものすごきにかこち、冬の雨の寒きにもたとへたり。この事古き物語にもあれば、それを知りたる句にやとゆかしく、尋ね侍れども、さはなくて、雨のたゞ降りつくすとのみ作りしことゆゑ、比興とは思ひ侍りぬ。」と仰せられけり。

さる人が利休に茶の湯の極意をたづねた時、

「夏はいかにも涼しきやうに、冬はいかにもあたゝかなるやうに、炭は湯のわくやうに、茶は服のよきやうに、これにて祕事はすみ候。」

と答へた。（茶　味）

中村正直　敬宇と號す。文學博士。明治二十四年歿、年六十。

三三　否の一語

中村正直譯

人の此の世に處するや、事の次第によりては、否の一語を言ふの勇なかるべからず。何となれば、誘惑の事及び罪惡の事、その始に當りては、甚だ些少なるが如くなれども、その中に陷るに及んでは、遂にその圈套を脫出する能はざるに至る。故に始より毅然として「否」と言ひて、之を拒むべし。「否、我は之を爲す能はず。」と言ふべし。世人を觀るに、能く此の否の一語を言ふの勇氣ある者少し。否の一語を言ふ能はざる一種の人あり。他の心に違ふを怖るるに由るや、他人の心に順ふを欲するに由るや確かに知り難しと雖も、この人は、他人に賴まるゝことを辭せず、或は金錢を貸し、手形に裏書し、或は證人に立ち、遂に之が爲に累を受け、その身、その家を傾くるに至るなり。人、當然の時に於て否の一語を言ふは安全の道なり。蓋し許多の人、否の一語を言ふ能はざるに由りて、その身、その家を傾くるに至るなり。否の一語を言ふの勇氣あらざれば、罪惡に地歩を占めらるゝなり。

歡樂の事、我を誘引せんとして我を試みる時は、直ちに否といふ決心を有せざる可からず。この決心は德行をして益〻堅固ならしむ。若し始に於て一歩を讓り、否といふことを怠らば、自己に信賴するの力、これよりして退き減ずべし。然るに、否の一語を言ふに、始はその難きを覺え、大いなる勢力を要すれども、久しき後は、自然に勢力增加して容易となる。怠惰・惑溺、その他諸〻の惡習の襲擊を防がんには、否の一語より外は有らず。故に曰く、「當然の時に於て否の一語を言ふは、大いなる德行なり。」と。（西國立志編）

西國立志編　スマイルス著「セルフヘルプ」の譯本。英米人の立志傳なり。

羽仁もと子
自由學園長。
鎌倉　神奈川縣鎌倉郡。

三四　自然の教訓

羽仁もと子

私どもの鎌倉の假の住居は、海と小山に近く、田と畑の中に、町を離れてたつて居ります。朝に夕に、清らかな天然の教訓に接することの出來ますのは、不便な生活に伴なふ大きな幸福の一つであります。

粟の穗は重く垂れ、稻もはや色づくばかりになりました。麥の切株が鋤きかへされて、小さい種子が播かれ、鏡のやうな水の中に早苗が植ゑられてから、まだ幾日も經たないやうな氣がします。きのふもけふも同じであるとばかり眺め暮らしてゐた間に、いつこのやうに樂しい秋が見舞ひ來つたのでせう。思へば夢の

やうであります。わが心の願が天の意に叶ひ、わが日々の業がまたよい事であつたなら、一樣な天然の恩惠は、また私たちの知らない中に、自分たちのする業の上に注がれてゐるでありませう。けふもあすも同じやうに見えるわが心、わが身のまはりの狀態も、收穫時を天に任せて一心に漑ぎ耘る間に、時には困難もあり、時には小さい失望があるにしても、遂に種々の喜ばしい實を結ぶやうになることは、私どもの半生に於ても度々經驗したことであります。

知らない間に米が實り粟が熟する樣を見て、正直にわが業にいそしむものの幸福を思ひ、今更のやうに希望と感謝に充たされるのであります。

胡瓜を植ゑて西瓜を穫るつもりだといふ人があつたら、何人もその愚を笑ひ、その邪な考を卑しむでありませう。耘らないで耘つたやうな體裁を裝ひ、耘つたものと同樣の結果を得ようとするものがあれば、何人もその蟲のよいのに呆れるでありませう。しかも世の中には善い心、僞りのない眞實な努力によらず、いろいろの他の方法、卽ち巧みに世を渡ることなどによつて眞の幸福を得ようとする人が澤山あります。それは胡瓜を植ゑて西瓜を穫らうとするのです。天然は欺かないけれども、人の世は胡魔化しのきくところだと思ふ人があれば、それは間違ひでありませう。人の目は或時の間くらますことが出來ます。さうして邪な心も、淺はかな智慧も、富の力も、時にまことの榮えのやうに輝くことがあります。しかし、人生も亦明かに神の田畑であつて、罪

惡によつて眞によい實を結び、善良な努力によつて惡い實を結んだ例はないばかりでなく、善良な努力も罪惡も、すべてそれぞれの力の大小によつて、いかに適切に報いられてゐるかは、獨り歷史が私どもに語るばかりでなく、思ひを潛めて、狹いわれらの見聞の中をたどつて見ても、明かに了解されることであります。

「夏作は一日遲れると半月の損。」とこのあたりの農家では申します。あたりよりも四五日早く植ゑつけた一つの甘藷畑は、果して他に先だつて收穫を始めました。新たに市に出る野菜は、一日でも早いだけ、よい價をもつてゐるのであります。さうして次に播くべき菜や大根も、ゆつくりと天氣都合を見はからひ、最も適當な日に植ゑつけることが出來ました。さうして收穫の遲れた

他の畑が、あはてて次の種子をまき、折悪しくも照りつゞきにあひ、風にあつて、辛うじて生ひ出た弱い芽とは、殆ど同じものとは思はれないばかり威勢のよい葉を茂らせて居ります。

賢く勤勉な農夫は、同じ一枚の畑でも人一倍に利用して、多くのよいものを作りだすことが出來ます。私ども各〻の才能も、これを養ひこれを用ひることが熱心で拔目がなければないだけ、他の同じほどの才能を與へられた人よりも、價値のある生涯を送ることが出來ます。私どもの心の畑は十分に開拓され、さうして無駄なしに利用されてゐるのでせうか。次から次とよい智慧をうみ出すべき心の畑が、とかくに打棄てられ勝ちになつてゐることは、實に大きな不幸不利益であります。甘藷の畑は、私どもに心の畑を出來るだけ利用せよと教へてくれました。

低い垣根に朝顔の花が咲き、小さい畑に茄子が瑠璃色の實を結びました。夕な夕なに萎んだ花を摘み、伸びすぎる蔓のさき、茂り過ぎた葉を去つて、つとめて無用のものに幹を勞らせないやうにしました。今もなほ朝顔は朝な朝な目さむるばかり數多く咲きほこり、茄子も水々しく實つてゐます。（羽仁もと子著作集）

神は、雲をもて天をおほひ、雨を地のためにそなへ、草を山々に生ひしめ、ひものを獸にも小鳥にも與へたまふ。（詩篇）

芥川龍之介 文學者 昭和二年歿、年三十五。

お釋迦樣 釋迦牟尼佛。

三五 蜘蛛の絲

芥川龍之介

一

或日のことでございます。お釋迦樣は、極樂の蓮池のふちをぶらぶらお歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、其の眞中にある金色の蘂からは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂は丁度朝でございました。

やがてお釋迦樣は其の池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の樣子を御覽になりました。

此の極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますから、

水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗眼鏡を見るやうに、はつきりと見えるのでございます。

すると、其の地獄の底に犍陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿がお眼に止りました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろいろの惡事を働いた大惡人でございますが、それでもたつた一つ善い事をした覺えがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹路ばたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を擧げて踏殺さうとしましたが、「いやいや、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ。」と、かう急に思ひ返して、とうとう其の蜘蛛を殺さずに助け

てやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、此の犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出來るなら此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹美しい銀色の絲をかけて居りました。

お釋迦様は其の蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ眞直にお下しなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈

んだりしてゐた犍陀多でございます。

何しろどちらを見ても眞暗で、たまに其のくら闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、其の心細さと言つたらございません。其の上、あたりは墓の中のやうにしんと靜まり返つて居て、たまに聞えるものと言つては、たゞ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。

これは、此處へ落ちて來る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れ果てて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございました。ですから流石大惡人の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、其のひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から、銀色の蜘蛛の絲がまるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて參るではございませんか。

犍陀多は之を見ると、思はず手を打つて喜びました。此の絲に縋りついて何處までも上つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと極樂へはひる事さへも出來ませう。さうすれば針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。

かう思ひましたから、犍陀多は早速其の蜘蛛の絲を兩手でしつかりと掴みながら、一所懸命に上へ上へとたぐりのぼり始め

ました。もとより大惡人のことですから、かういふ事には昔から慣切つて居るのでございます。

併し地獄と極樂との間は何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦燥つて見た所で容易に上へは出られません。やゝしばらくのぼる中に、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一手繰も上の方へは手繰れなくなつて仕舞ひました。そこで仕方がございませんから、まづ一休み休む積りで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。

すると一所懸命にのぼつて來た甲斐があつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底に隱れて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐ろしい針の山も、足の下になつてしまひました。此の分でのぼつて行けば、地獄か

らぬけ出すのも存外譯がないかも知れません。

犍陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、此處へ來てから何年にも出した事のない聲で、「しめた、しめた。」と笑ひました。

ところが、ふと氣がつきますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀ぢのぼつて來るではございませんか。

犍陀多は之を見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、暫くは唯馬鹿のやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへ斷れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一途中で斷れたといたしましたら、折角此處までのぼつて來た此の肝心

な自分までも、もとの地獄へ眞逆樣に落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。

が、さう云ふ中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うようよと這上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながらせつせつとのぼつて參ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに斷れて、落ちてしまふに違ひありません。

そこで犍陀多は大きな聲を出して、

「こら、罪人ども。此の蜘蛛の絲は俺の物だぞ。お前たちは一體誰の許を受けてのぼつて來た。下りろ、下りろ。」

と喚きました。

其の途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急

に犍陀多のぶらさがつてゐる處から、ぷつりと音を立てて斷れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云ふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくる廻りながら、見る見る中に闇の底へまつさかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に短く垂れて居るばかりでございます。

三

お釋迦樣は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顏をなさりながら、又ぶらぶらとお歩きになり始めました。

自分ばかり地獄から拔け出さうとする犍陀多の無慈悲な心

が、そして其の心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦樣のお目から見ると、あさましく思召されたのでございませう。

併し極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着いたしません。其の玉のやうな白い花は、お釋迦樣のおみ足のまはりに、ゆらゆらと蕚を動かしてをります。其のたんびに、眞中にある金色の藥からは、何とも言へない好い匂が絶間なくあたりに溢れ出ます。

極樂ももうお午に近くなりました。（傀儡師）

復活祭 毎年三月二十一日以後の滿月に次ぐ第一日曜日に行ふ。

三六 水溜り

其の年は復活祭が早く來ました。橇の通行が漸く止つたばかりで、戸外にはまだ雪が殘つてゐて、それが溶けて村の中をちよろちよろと流れてゐました。二つの屋敷の間の小路にも、大きな水溜りが出來てゐました。此の水溜りに兩方の屋敷から二人の女の子が寄つて來ました。一人は少し年下でした。二人とも母親から新しい上衣を着せられてゐました。年下の方は青い上衣で、年上の方は黄色い刺繍をしたのを着てゐました。そして頭には赤い頭巾を被つてゐます。丁度祈禱が濟んだ後なので、二人は水溜りの傍へ出て來て、先づお互にその晴衣を見せ合つて、それから一緒に遊び出しました。二人は水の中へ入つて見たいと思ひ

マラーシヤ マラーシュカの愛稱。

アクリシュカ アクーリカの愛稱。

ました。そこで年下の方は靴を穿いたまゝ入らうとしました。すると年上の娘は、

「マラーシヤ、お入りでないよ。お母さんに叱られてよ。私は今靴を脱ぐわ。お前もお脱ぎよ。」

と言ひました。

二人は靴を脱ぎ、衣服をたくし上げて、水溜りを渡り始めました。マラーシュカは踝まで入ると、かう言ひました。

「深いわ、アクリシュカ――私怖いわ。」

アクーリカは答へました。

「大丈夫よ、もう深くないわ。眞直にいらつしやい。」

二人はだんだん近寄りました。するとアクーリカが言ひました。

「氣を附けなさい、マラーシャ。私に水を潑ねかしちや厭よ。靜かにいらつしやいな。」

アクーリカがかう言ふか言はない中に、マラーシュカは片足を水の中へばしやつと踏込んだので、アクーリカの上衣まで水を潑ねとばしてしまひました。上衣ばかりでなく、眼や鼻にまで潑ねかけたのです。アクーリカは上衣に汚點が出來たので、ひどく腹を立てて、マラーシュカを罵りながら、駈寄つて打たうとしましたが、マラーシュカは惡いことをしたと氣が附くと、吃驚して水溜りから飛出して、家の方へ駈けて行きました。丁度其處へ通りかかつたアクーリカの母親は、娘の上衣が濡れ、下衣が汚れてゐるのを見て、

「何處でお前はそんなに汚したの。馬鹿が。」

と訊ねました。

「マラーシュカがわざと私に水を潑ねかしたの。」

と小娘は答へましたので、アクーリカの母親はマラーシュカを摑んで、その頭を打ちました。マラーシュカの泣聲は街道中に響き渡りました。これを聞いて、マラーシュカの母親が出て來ました。

「どうして家の娘を打つんです。」

と、マラーシュカの母親は隣のお内儀を罵りました。賣言葉に買言葉で、二人の母親は互に惡態の吐き合ひを始めました。百姓達も家から飛出して來て、街道に一ぱいになりました。みんなどなり合ふだけで、誰一人として理由を聽く者はありませんでした。かうしてゐる中に、一人が一人を衝いたのをきつかけに、すつか

り毆り合ひの喧嘩になつて了ひました。其處へアクーリカのお祖母さんが出て來ました。お祖母さんは百姓達の間に入つてみんなを宥め始めました。

「はてまあ、皆の衆、これが此の復活祭の間にする事ですかい。みんな喜ばなければならないのに、お前さん達は一緒になつて罪作りをして居るぢやありませんか。」

けれども百姓達はお祖母さんの言ふことには耳を貸さうともしませんでした。それどころか、お祖母さんはも少しで衝き倒されるところでした。で、若しアクーリカとマラーシュカがゐなかつたら、お祖母さんは百姓達を說き鎭めることが出來なかつたかも知れません。ところが、女達が罵り合つてゐる中に、アクーリカは自分の上衣を拭いて、それからまた水溜りの處へ出て來

ました。彼女は小石を拾つて水を街道の方へ流してやるやうに、水溜りの傍の土を掘始めました。彼女がこんなことをしてゐる中に、其處へまたマラーシュカもやつて來て、アクーリカに手傳ひ、木の片でやはり溝を掘始めました。百姓達が毆り合ひを始めた時には、子供達の掘つた溝から水が流れ出て、丁度お祖母さんが二人の百姓を引分けようとしてゐる街道のその場所に流れて來ました。二人の女の子もその小さい流の兩側に沿うて、駈けて來ました。

「そこをお止めよ、マラーシヤ、お止めよ。」

とアクーリカが叫びました。マラーシュカも何か言はうとしましたが、何とも言へないほど笑ひころげてゐました。

かうして二人の女の子は駈廻つたり、または木の片が小さい

流に浮き沈みしてゐるのを見て笑つたりしながら、丁度百姓達の集つてゐる眞中に駈込んで來ました。お祖母さんは二人の娘の姿を見るや否や百姓達に言ひました。

「お前さん達は此の娘達のことで喧嘩をしてゐなさるけれども、あの二人はもう何も彼も疾うに忘れて了つて、また一緒に仲よく遊んでゐるぢやないか。あの娘達の方がお前さん達より餘程悧巧だよ。」

百姓達は二人の娘を見ると恥づかしくなりましたが、やがて彼等は自分で自分が可笑しくなつて、各自に家へ歸つて行きました。（昇　曙夢「トルストイ童話」より）

昇曙夢　名は直隆。日本大學講師。明治十一年生。トルストイ Tolstoi (1828—1910) ロシアの小說家。會改・眞

幸田露伴　名は成行。文學博士。慶應三年生。

三七　散亂心

幸田露伴

心の一處に注ぐ能はずして、動搖定まりなきを散亂心といふ。たとへば、書を讀むに當つて、一心紙上にあること能はず、或は鳥の聲を耳にするの因に、心直ちに鳥のあたりを指して馳せ去り、或は車の窓前を過ぐるに因つて、心また車を追うて去るが如し。これを散亂心を以て事をなすとはいふなり。

古の人は、この散亂心を以て事をなすことを忌む事甚しく、學問にせよ、功業にせよ、爲して成らざるあるは、大抵この散亂心を以て事に當るが故なりとまで思考せりとおぼし。如何にも散亂心を以て事を爲して能く成さんことは、まことに覺束無かるべし。散亂心を以て事を爲して成す能はざるの實例は、算術を學ぶ

に當つて、何人も明かに認むることを得べし。推考の力を要する算術上の問題に對して、若し心を其の問題に專注する能はず、いたづらに昨日見しところの演劇の光景を追想し、若しくは今夜某處に於て觀んとするところの幻燈を想像し、若しくは自轉車に乘りて走る愉快を想像しなどせんには、推考の力はこれが爲に鈍りて、腦中の混亂を惹き起し結局茫然として自失するに至るべし。

されば算術上の問題に對してのみならず、如何なる場合にても、散亂心を以て事を爲して能くすべからざるは、定まりたることなり。世には聰明絶倫の人ありて、一時に多くの人の口々に訴ふるを聞き得、また手をもて畫を作しながら、心には詩を作り得るなどの人も無きにあらず。かゝる人々の歷史にも見え、眼のあ

ニュートン　Newton (1642—1727)　イギリスの數・學・理家、物學者、發引學の見力者。

龍樹菩薩　佛滅後七百年の頃南天竺に生る。佛典の奧義を究め大乘諸宗の祖師と仰がる。

たりにも見ることなれば、散亂心をもつて事を爲すも差支へ無かるべしといふ疑あらん。されど、實は八人藝といふものめきたることを爲し得たりとて、毫も尙むに足らず。俗人は驚きて異とこそ爲せ、識者はいかで偉なりとせん。たまたま左手に圓を畫き、右手に方を畫くが如きことを能くする人も無きにあらねど、たとひ實に之を能くすとも、多とするに足らざるのみならず、事もと例外に屬すれば、常人の學んで之を能くすべきにあらず。

ニュートンは偉人なり。されど人のいかにして君は引力につきての大發見をなし給ひたると問へるに答へて、我は不斷心によつてと答へたり。不斷心とは散亂心の反對なるべし。龍樹菩薩は大賢なり。されど「散亂の心は風中の燈火の如し。明かなりと雖も物を照らす能はず。」と說けり。まことに風の中の燈火とは、巧み

に散亂心の働を形容せるものかな。

聰明の人やゝもすれば、中年にして愚鈍の人の淺ぐところとなるあるは數々世人の眼にするところなるが、余の實驗にては、其の原因、大抵は聰明の人の、散亂心を以て事に當るによつて、結局敗者の地位に立つに至るが如し。蓋し聰明餘りあれば心に餘裕あり。心に餘裕あれば勢ひ散亂動搖せんとす。聰明の青年書を讀めば書甚だ讀み易く、算を做せば算甚だ做し易し。こゝに於て因緣の去來し、神情の馳せ逸するに任せて一心散亂動搖し、日を累ね月を積みて、終に頑癖をなすに至る。散亂心を以て事に處し、物に接するの習ひをなすに至れば、聰明また聰明ならず、風中の燈火甚だ力無く、愚鈍の人の專心無適にして事に處し、物に接するの習ひをなせるものに勝つ能はざるや必せり。

天資甚だ高きもの終に庸凡の人の下風に立つに至る。まことに惜しむべく、憾むべきにあらずや。聰明の負むべからざるは、古人もまた多く之を言へり。散亂心の戒めざるべからざるは驕慢心の戒めざるべからざるより甚し。人の聰明は四十歲、五十歲に至つて必ず衰耗すべきものなれば、聰明未だ衰へざるに及んで、一心散亂の惡習をなすこと無く、而して人々自己が爲さんと欲するの業をなすの地をつくるべきなり。（露伴全集）

心ここにあらざれば、視れども見えず、聽けども聞えず、食へども其の味を知らず。（大學）

南條文雄 佛教學者。文學博士。昭和二年歿、年七十九。

山國谷 大分縣下毛郡。

大含 畫僧。嘉永三年（二五一〇）歿、年七十八。

賴山陽 名は襄。儒者。天保三年（二四九二）歿、年五十三。

八代 熊本縣八代郡八代町。

法海 眞宗の僧。號は橘州。肥後の人。天保五年（二四九四）歿、年六十七。

三八 知行合一

南條文雄

豐前の山國谷に正行寺といふ眞宗の寺がある。住職大含は雲華と號し、文學を好み、書畫を能くし、廣く文人・墨客と交り別して賴山陽とは無二の親友であつた。山陽は三十九の年に九州を遊歷したが、山國谷の景勝を探つたのは雲華上人の手引であつた。山陽が「耶馬溪山天下無」と激賞してから、山國谷は耶馬溪として天下に著聞するに至つたのである。

當時、肥後國八代の光德寺に易行院法海といふ、學德共に高い眞宗の僧があつた。山陽は遊歷の途次、豫て雲華上人より得た紹介を以て、遙々と法海師を尋ね行き、「賴久太郎、老師の高名を慕うてお尋ね申した。お取次をお願ひ申す。」と申し入れた。折柄机の前

忠臣は必ず孝子之門に出ず。（千字文の註）

に端坐して讀經してゐた老師は、やをら起つて、山陽に面會した。山陽は初見の挨拶をすませてから、自分の書いた「楠公傳」の稿本をその懷から取出した。そして慇懃に「老師の御批評を。」と言つた。老師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。さうして、靜かに口を切つた。

「この頃、噂に聞けば、藝州の儒者で賴久太郎とやらいふもの、京へ出て酒ばかり飲んでゐて、三年が間たゞの一度も歸省して親の安否を尋ねようともせず、そして忠臣楠公の傳を作つたといふことだが、では御邊の事でござつたか。」この時、法海師の鋭い眼光は山陽の面上を電のやうに射た。山陽は我知らず面を伏せた。

法海師は更に語を繼いで『忠臣は必ず孝子の門に出づ。』とは古人の金言だが、三年も歸省せぬ不孝者の筆を以て忠臣の傳を書く

とは、大それた事ではないか。楠公の靈若し知るあらば、果して何と思はれるであらう。愚僧もそんな不孝者には會ひたうない。」老師はかく言ひ終つて、すつと起つて元の座に歸り、靜かに讀經すること初の如くであつた。

程經てやつと頭を擧げた山陽は、冷たい汗が首筋を傳うて流れるのに氣が附いた。が、今は取着く島もない。老師の前に默禮して寺門を出た。

「さすが一宗の學頭、偉い和尚だ。」これが當時文名一世に鳴る豪快無比の山陽の腹の底から搾り出された感歎の辭であつた。

あとで雲華上人に一部始終を話すと、上人は如何にも我が意を得たといふやうに、「さうであつたか。それはよく言つてくれた。貴公は豫て陽明學をやつてゐるではないか。知行合一、今こそそ

陽明學 明の大儒王陽明の唱へた知行合一の學說。

夏日の日・冬日の日 趙衰ハ冬日之日也。趙盾ハ夏日之日也。註に「冬日ハ愛ス可シ。夏日ハ畏ル可シ。」（左傳）

れを實行すべき時である。」といつた。

山陽は覺えず立上つて、「法海師は夏日の日、上人は冬日の日だ。」といふや否や、早々行李をとゝのへ、翌日早朝に發足して、老母の膝下に歸省すべく安藝の國へと急いだ。

山陽はその後年々歸省して老母を慰め、又これを京都に迎へ、吉野や伊勢にお伴して孝養を盡くした。「與行吾亦行、與止吾亦止。」といふ「侍」與歌」などに於て數々の美談を遺したのも、基づく所は兩師の言を虛心に受入れた爲である。「虛にして往き、實にして歸る。」は實にこの事で、山陽が善く學ぶ所に背かなかつたのも、全くこれによるのである。（修養錄）

國木田獨歩　名は哲夫。文學者。明治四十一年歿、年三十八。

立野　熊本縣阿蘇郡。

阿蘇山　阿蘇火山脈の主峯。極めて廣大なる陷落火口を有す。中央火口丘は俗に阿蘇五嶽と稱す。根子嶽・高嶽・中嶽・杵島嶽・烏帽子嶽これなり。

三九　阿蘇の麓

國木田獨歩

今から五年ばかり以前、正月元旦を父母の膝下で祝つて直ぐ九州旅行に出かけ、熊本から大分へ横斷した時のことであつた。

僕は朝早く弟と共に草鞋脚絆で元氣よく熊本を出發した。其の日は未だ日が高い中に立野といふ宿場まで歩いて、其處に一泊した。次の日、日の未だ登らないうちに立野を立つて、豫ての願で、阿蘇山の白煙を目がけて、霜を履み、棧橋を渡り、路を間違へたりして漸く日中時分に絶頂近くまで登り、噴火口に達したのは一時過ぎでもあつただらうか。熊本地方は溫暖であるがうへに、風のない好く晴れた日だから、冬ながら六千尺の高山もさまでは寒く感じない。高嶽の絶頂は噴火口から吐き出す水蒸氣が凝

つて白くなつて居たが、其の外は滿山殆ど雪を見ないで、たゞ枯草が白く風にそよぎ、燒土の或は赤き或は黑きが、舊噴火口の名殘を彼處此處に止めて斷崖をなし、その荒涼たる光景は筆も口も及ばない。

僕等は一度噴火口の緣まで登つて、暫くは凄まじい穴を覗き込んだり、四方の大觀を恣にしたりしてゐたが、さすがに頂は風が寒くつて堪らないので、穴から少し下りると阿蘇神社がある、其の傍に小さな小屋があつて番茶位は呑ませて呉れる、其處へ逃げ込んで團飯を齧つて元氣をつけて、又噴火口まで登つた。

其の時は日がもう餘程傾いて、肥後の平野を立罩めてゐる霧が焦げて赤くなつて、ちやうど其處に見える舊噴火口の斷崖と同じやうな色に染まつた。圓錐形に聳えて高く群峯を拔く九

重嶺の裾野の高原數里の枯草が一面に夕陽を帶び、空氣が水のやうに澄んでゐるので、人馬の行くのも見えさうである。天地寥廓、而も足もとでは凄まじい響をして白煙濛々と立騰り、眞直ぐに空を衝き、急に折れて高嶽を掠め、天の一方に消えて了ふ。壯といはんか、美といはんか、慘といはん歟。僕等は默つたまゝ一言も出さないで、暫く石像のやうに立ちつくした。此の時天地悠々の感、人間存在の不思議の念などの心の底から湧いて來るのは自然のことだらうと思ふ。

ところで最も僕等の感を惹いたものは、九重嶺と阿蘇山との間の一大窪地であつた。これは豫て世界最大の噴火口の舊跡と聞いて居たが、成程九重嶺の高原が急に頽ちこんで居て、數里に亙る絶壁が此の窪地の西を廻つてゐるのが眼下によく見える。

男體山 栃木縣にあり。那須火山脈に屬し日光連山の主峯。

中禪寺湖 日光の奥地にあり。面積一二、三九平方粁。

宮地 阿蘇の火口原（阿蘇谷）にある町。官幣大社阿蘇神社あり。

男體山麓の噴火口は明媚幽邃の中禪寺湖と變つてゐるが、此の大噴火口はいつしか五穀實る數千町歩の田園とかはつて、村落幾個の樹林や麥畑が今しも斜陽靜かに輝いてゐる。僕等がその夜疲れた足を蹈みのばして一夜の夢を結ばうとしてゐる宮地といふ宿驛も、此の窪地にあるのである。

いつそのこと山上の小屋に一泊して、噴火の夜の光景を見ようかといふ說も二人の間に出たが、先が急がれるので、愈山を下ることに決め、宮地を指して下りた。下りは登りよりかずつと勾配が緩やかで、山の尾や谷間の枯草の間を蛇のやうに蜿蜒つてゐる路を辿つて急ぐと、村に近づくに連れて枯草を着けた馬を幾つか逐ひこした。あたりを見ると、彼處此處の山尾の小路をのどかな鈴音をさせて、夕陽を帶びた人馬が幾個となく麓をさし

て歸つてゆく。馬はどれも皆枯草を着けてゐる。麓はぢきそこに見えてゐても容易には村へ出られないので、日は暮れかゝるし僕等は大急ぎに急いで、終ひには走つて下りた。村に出た時は、最早日が暮れて夕闇ほのぐらい頃であつた。村の夕暮のにぎはひは格別で、壯年男女は一日の仕事のしまひに忙がしく、子供は薄暗い垣根の陰や竈の火の見える軒先に集つて、笑つたり歌つたり泣いたりしてゐる。これは何處の田舍も同じことであるが、僕は荒涼たる阿蘇の草原から駈下りて突然この人寰に投じた時ほど、これらの光景に打たれたことはない。二人は疲れた足を曳きずつて、日暮れて路遠きを感じながらも、懷かしいやうな心持で宮地を今宵の當てに歩いた。

一村離れて林や畑の間を暫く行くと、日はとつぷり暮れて、二

人の影がはつきりと地上に印するやうになつた。振向いて西の空を仰ぐと、阿蘇の分派の一峯の右に、新月が此の窪地一帶の村落を我が物顔に、澄んで蒼味がかつた水のやうな光を放つてゐる。二人は氣がついて直ぐ頭の上を仰ぐと、晝間は眞白に立登る噴煙が、月の光を受けて灰色に染まつて碧瑠璃の大空を衝いて居るさまが、いかにも凄まじく又美しかつた。長さよりも幅の方が長い橋にさしかゝつたから、幸と其の欄に倚りかゝつて疲れきつた足を休めながら、二人は噴煙のさまの樣々に變化するのを眺めたり、聞くともなしに村落の人語の遠くに聞えるのを聞いたりしてゐた。すると二人が今來た道の方から、空車らしい荷車の音が、林などに反響して虛空に響き渡つて次第に近づいて來るのが、手に取るやうに聞えだした。

暫くすると朗かな澄んだ聲の馬子唄が、空車の音につれてだんだんと近づいて來た。僕は噴煙を眺めたまゝで耳を傾けて、此の聲の近づくのを待つともなしに待つてゐた。

人影が見えたと思ふと、「宮地やよいところぢや阿蘇山ふもと」といふ俗謠を長く引いて、ちやうど僕等が立つてゐる橋の少し手前まで流して來た。其の俗謠の意と悲壯な聲とがどんなに僕の心を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈强な壯漢が、手綱を牽いて、僕等の方を見向きもしないで通つてゆくのを、僕はぢつと睇視めてゐた。夕月の光を脊にしてゐたから其の横顏もはつきりとは知れなかつたが、其の逞しげな體軀の黑い輪廓が今も僕の目の底に殘つてゐる。僕は壯漢の後影をぢつと見送つて、そして阿蘇の噴煙を見あげた。（忘れえぬ人々）

相馬御風　名は昌治。文學者。明治十六年生。

ダリヤ　Dahlia

コスモス　Cosmos

四〇　雜草

相馬御風

小學校や、女學校や、中學校などの生徒たちの描いた花の繪を展覽會などで多く見るが、それ等の十中八九が、菊とか、ダリヤとか、朝顏とか、コスモスとか、薔薇とかいつた樣な、どちらかと言へば、觀賞用といふ型にはまつた花を寫したり描いたりしたものであるのには、何時ももの足りなく感じさせられる。私たちは何もさうした種類の花を描く事その事に不滿を感ずる者ではないが、しかし、少くとも田舍に生活してゐる子供たちには、さうした型にはまつてゐる花より以外に、もつともつと多く美しい花があるべきはずの樣に思はれ、その點が不滿に感じられてならないのである。

特に觀賞の爲に一般的になつてゐる花の美しさは言ふまでもない。しかし、さうした種類の花の外に、わけて田舍では、山にも、野にも背戸にも、路端にも、數限りなく美しい花が咲くのである。

そしてそれ等の多くの花は、特に注意しないまでも、田舍の子供たちの心を養ひもし、樂しませもしてゐるのである。それであるにも拘らず、彼等の大多數は、いざ美しい花の繪を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深かるべき花を除外するのである。私たちの不滿は其所にある。

「この節の若い者は、草や木の名すらろくに知らない。」私は嘗てかうした歎聲を、ある山の村の一人の老人の口から聞いて、成程と感じ入つた事があつた。田舍に住んでゐる私たちに取つて、最も親しみのある草や木の名——それをすらも知つてゐる人の

ソロー Thoreau (1817—1862)

エマスン Emerson (1803—1882) アメリカの文家の論人。詩

少いといふ事は、何といふ情ない事であらう。毎日自分たちの往來する路端に、春に、夏に、秋に、咲く花は隨分多くある。そしてそれ等の雜多な草の花は、知らず識らずの間に私たちの心に貴い養ひを惠んでくれてゐる。しかも私たちの多くは、それ等の名前すらろくに知つてゐない。

かの森林生活で名高いアメリカの哲人ソローは、彼の毎日往來する路端の叢で、その日その日にどこで何の花が咲くかを、大概知つてゐたといふ事である。そしてエマスンはその一事によつても、ソローがいかに自然を愛し、いかに自然の現象に注意深かつたかを十分知る事が出來るといつて、賞讃してゐたといふ事である。私たちは其所までは行き得ないにしても、少くとも毎日自分たちの往來する路傍に咲く花の美しさに心を引かれ、そ

れ等の名前ぐらゐは知つてゐてもよささうなものである。

嘗て私は芭蕉の

よく見ればなづな花咲く垣根かな

の句について、こんな事を考へた事があつた。

「よく見れば」――かう芭蕉が言つた時、彼は確かに一種の驚きを覺えてゐたに相違ない。垣根の下土に何時となしに生えた、あのぺんぺん草の樣な見る影もない雜草でさへ、人知れずつゝましやかに生きてゐる。あの小さな草にさへ、春がくればかうして花が咲く。こまかな何のしなもない白い花が咲く。――思ひがけなく芭蕉がさうした自然の風物に心を引かれたのも、そしてそのうちに無限の興趣を覺えたのも尤もである。恐らくその場合、芭蕉自らにあつても、その經驗によつて、平常の自分によく見な

い時間の多かつた事の反省が起らないではゐなかつたであらうと同時に、「よく見る」といふ事の貴さを、彼は恐らく今更の如く驚歎せずにはゐられなかつたであらうと。

これは自然に就いてだけではない。人間に就いても同じである。

「あなた方が偉いと思つてゐる人の名を書いて御覽なさい。」かういふ先生の問に對して、十中八九の生徒たちの書く名前は、大概きまつてゐる。無論さうした書物で教へられたり、先生から教へられたりした昔や今の偉い人たちの名を記憶し、それを書くのは結構な事である。しかし、さうした定評のある偉い人たちの多くの名の中へ、一つくらゐ自分自ら偉いと實感した、自分の手近な人の名がはひつてもよささうなものではなからうか。

春

私たちは、願はくは、見る影もない一莖の草に就いても、限りない自然の美と意味とを味はひたいものである。そしてそれと同じ様に、自分のつい手近にゐる唯の人に就いても、限りない人間の貴さを感じたいものである。

春雨や蓬をのばす草の道　芭蕉

山路來て何やらゆかし菫草　同

誰人か菰着てゐます花の春　同

四一　春

島崎藤村

二月に入つて暖い雨が來た。

灰色の雲も低く空は曇つた日、午後から雨となつて、遽かに蘇るやうな暖かさを感じた。斯ういふ雨が何度も何度も來た後でなければ、私達は譬へやうの無い烈しい春の饑渴を癒すことが出來ない。

空は煙か雨かと思ふほどで、傘さして通る人や、濡れて行く馬などの姿が眼につく。單調な軒の玉水の音も樂しい。

堅く縮こまつて居た私の身體もいくらか延び延びとして來た。私は言ひ難き快感を覺えた。庭に行つて見ると、汚れた雪の上に降りそゝぐ音がする。屋外へ出て見ると、殘つた雪が雨のため

に溶けて、暗い色の土があらはれて居る。田畠も漸く冬の眠から覺めかけたやうに、砂まじりの土の顔を見せる。黄ばんだ竹の林、まだ枯々とした柿・李、其の他眼にある木立の幹も枝も皆な雨に濡れて、黑々と穢い寢恍顔をして居ない物は無い。

流の音、雀の聲も何となく陽氣に聞えて來る。桑畠の桑の根元までも濡らすやうな雨だ。斯の泥濘と雪解と冬の瓦解の中で、うれしいものは少し延びた柳の枝だ。その枝を通して、夕方には黄ばんだ灰色の南の空を望んだ。

夜に入つて、淋しく暖い雨垂の音を聞いて居ると、何となく春の近づくことを思はせる。

一雨ごとに暖かさを増して行く二月の下旬から三月のはじ

めへかけて、櫻・梅の蕾も次第にふくらみ、北向の雪も漸く溶け、灰色な地には黄色を増して來た。樂しい春雨のふつた後では、濕つた梅の枝が新しい紅味を帶びて見える。長い間雪の下になつて居た草屋根の青苔も急に生き返る。心地の好い風が吹いて來る。青空の色も次第に濃くなる。あの羊の群でも見るやうな、さまざまの形した白い黄ばんだ雲が、あたかも春の先驅をするやうに、微かに送られる。

私は春らしい光を含んだ西南の空に、斯の雲を注意して望んだことがあつた。ぽつと雲の形があらはれたかと思ふと、それが次第に大きく、長く、明かに見えて、南へ動くに從つて消えて行く。すると復た、第二の雲の形が同一の位置にあらはれる。そして同じやうに展開する。柔かな乳青の空の色に、すこし灰色の影を帶

びた白い雲が遠く浮かんだのは美しい。

「熱い寒いも彼岸まで。」とは土地の人のよく言ふことだが、彼岸といふ聲を聞くと、ほつと溜息が出る。五ケ月の餘に渡る長い長い冬を漸く通り越したといふ氣がする。その頃まで枯葉の落ちずに居る槲、堅い大きな蕾を持つて雪の中で辛抱し通したやうな石楠木、一つとして過ぎ行く季節の記念でないものは無い。

私達が學校の教室の窓から見る櫻の木は、幹にも枝にも紅い艶を持つて來た。家へ歸つて庭を眺めると、土塀に移る林檎や柿の樹影は何時まで見て居ても飽きないほど面白味がある。暖かくなつた氣候のために化生した羽虫が早や軒端に群を成す。三月の石垣の間には、いたち草・小豆草・蓬・蛇ぐさ・人參草・嫁草・大なづ

山の上　當時作者は長野縣北佐久郡小諸町に居住。

な・小なづな、其の他數へ切れないほどの草の種類が頭を持上げてゐるのを見る。私は又三月の二十六日に、石垣の上にある土の中に、白い小さな「なづな」の花と、紫のまだらのある名も知らない草の小さな花とを見つけた。それが斯の山の上で見つけた第一の花だ。

貯へた野菜は盡き、葱・馬鈴薯の類まで乏しくなり、さうかといつて新しい野菜が取れるには間があるといふ頃には、毎朝毎朝若布の味噌汁でも吸ふより外に仕方の無い時がある。春雨あがりの朝などに、軒づたひに土壁を匍ふ青い煙を眺めると、好い陽氣に成つて來たとは思ふが、食物の乏しいには閉口する。復た油臭い凍豆腐かと思ふと、あの黄色いやつが壁に吊されたのを見

てもうんざりする。淡雪の後の道をびしよびしよ歩みながら、「草餅はいりませんか。」と呼んで來る女の聲を聞きつけるのは嬉しい。

三月の末か四月のはじめあたりに、東京の方へ出掛けて、それから斯の山の上へ引返して來る時ほど氣候の相違を感ずるものはない。東京では櫻の時分に、汽車で上州邊を通ると梅が咲いて居て、碓氷峠を一つ越せば、輕井澤はまだ冬景色だ。私は斯の春の遲い山の上を見た眼で、武藏野の名殘を汽車の窓から眺めて來ると、「あゝ柔かい雨が降る。」と左樣思はない譯には行かない。でも輕井澤ほど小諸は寒くないので、汽車でこゝへやつて來るに隨つて、枯々な感じの殘つた田畠の間には勢よく萌え出した麥が見られる。黃に枯れた麥の舊葉と、青々とした新しい葉との混

碓氷峠 群馬長野兩縣の境にあり。關東平野と信濃高原との間の通路。

輕井澤 長野縣北佐久郡の町。

小諸 長野縣北佐久郡の町。

つたのも、離れて見るとなかなか好いものだ。

四月の十五日頃から、私達は花ざかりの世界を擅に樂しむことが出來る。それまで堪へて居たやうな梅が一時に開く。梅に續いて直ぐ櫻、櫻から李・杏・茱萸などの花が白く私達の周圍に咲き亂れる。臺所の戸を開けても、庭へ出掛けて行つても、花の香氣の滿ち溢れて居ないところは無い。懷古園の城址へでも生徒を連れて行つて見ると、短いながらに深い春が私達の心を醉ふやうにさせる。（千曲川のスケッチ）

春雨の雲のあひだよりあらはるる山の頂
は雪眞白なり

島木赤彥

懷古園 小諸城址なる公園。

廣瀨中佐 名は武夫。日露戰爭の時朝日水雷長として閉塞隊を指揮し壯烈なる戰死を遂ぐ。年三十七。

白石葭江 日露戰役の時、第三回旅順口閉塞佐倉丸の指揮官として港口に赴き戰死す。年三十二。

太沽 支那天津に在り。

四三 日章旗

日露戰爭の時廣瀨中佐などと共に旅順閉塞隊に加つて戰死した、白石葭江といふ中佐がある。この人がまだ大尉時代、明治三十三年北清事變の時の事である。

列國の聯合軍は北京へ乘込む目的で太沽(タイク)砲臺を攻めにかゝつた。イギリスがやつても駄目、イタリーがやつても駄目、出るものも出るものも皆血みどろになつて退却する。最後に、一番後(うしろ)に控へてゐたわが海軍の陸戰隊が出る事になつた。

この陸戰隊の第一中隊長が、勇猛音に聞えた白石大尉。「それつ」といふなり、大粒の彈丸雨の如き中を猛然と進擊した。そして各國の陸戰隊が唯々あつけにとられて、「あれよ、あれよ。」といつてゐ

る間に砲臺を占領してしまつた。眞先に立つた大尉は、劍を打振り打振り「萬歲、萬歲。」と絕叫する。

第二陣にゐたイギリス軍は、わが軍に次いで砲臺に攀ぢ登つて來た。そしてその士官の一人は、豫て用意の英國々旗を取出して手早くこれを竿の先につけ、群がる占領軍の眼前に高々と掲げ出した。英國の國旗は血なまぐさい戰場の風に颯(サッ)と飜る。

目ざとくこれを發見した大尉は、怒心頭に發して、「旗！旗！」と叫びながら、烈しくあたりを見廻したが、誰も國旗を持つて居らぬ。ぐづぐつして居れば、あたら同胞を犬死させた事になる。見よ、足もとには同胞の屍が累々と横たはつてゐるではないか。白石大尉は隼(ハヤブサ)のやうに身を飜すや否や、有頂天で自國の旗をふつてゐる英國士官に對し、「無禮者！」と言ひざま猛烈な體當りを食は

ポケット Pocket　ハンカチ Handkerchief

せた。不意をつかれて英國士官はばつたりと倒れる。

大尉はその隙にポケットから汗ににじんだハンカチを取出すが早いか、ぷつりと我が右手の藥指を嚙み切つた。血汐は滾々と滴る。その血汐を以て見る見るハンカチの眞中に大きな圓を描く。ハンカチは忽ち眞紅の日の丸に彩られる。と、すぐさまこれを劍の先へ突き通して精一杯に捧げひらめかし、咽喉も張裂けんばかりの大音聲を揚げて、「萬歲！」と叫んだ。我が兵は涙を呑みながら萬歲を連呼した。聲も立てずに目を睜つてゐた列國の軍隊も、一齊に日本軍の萬歲に和した。

この事あつて後、各兵は必ずハンカチ大の日の丸をポケットに入れて進むことになつたといふことである。

乃木　第二十八課參照。

那須野　栃木縣那須郡西那須村。那須山麓。

乃木さんは日清戰爭後に那須野に退いて、こゝで暫く百姓生活をしてゐた。この頃東京へやつて來ると、きつと村の人たちに土產を買つて戻つたものである。

或年の暮には、三尺に二尺程の日章旗を小さな函に入れて村中の家々に贈つた。所がこの日の丸の旗に金廿錢宛がついてゐる。村の人達は、旗をくれた意味はわかるが、どうしてもこの廿錢がわからない。といつてまさか乃木さんの所へ聞きにいく譯にも行かない。とうとう有志が集つて會議を開き、智慧を絞つた末、「どうもこの廿錢は旗をたてる竿を買へといふことらしい。」といふことになつて、一同お揃ひでだんだらに塗つた旗竿を買つた。

乃木さんの庭には村のどこからも見えるやうな非常に高い旗竿が立つてゐて、旗をするすると上げたりおろしたりするや

うな仕掛になつてゐる。明くる年の元旦、日の出と共に、乃木さんの庭に日の丸が翩翻とひるがへつた。村人はそれと言ふので、これまで國旗など揭げた事のない家も一齊に旗を出した。

乃木さんは、それから三大節はもちろん、日本人として誰でも祝はなくてはならない記念日などには、必ずこの旗を揚げる。それは例の村中どこからでも見える所だ。うつかり畑へ出て働いてゐる人もこれを見ると、「そら、乃木さんところに旗が揚つた。」といつて馳せ歸つてこの旗を出した。

乃木さんの旗は那須颪の空つ風に吹かれつゞけ、雨にも雪にも村民に先んじて竿頭高く飜つたので、遂に端の方三寸ばかりも吹きちぎられてしまつた。このちぎれた旗は今尙弟の大館集作氏の許に祕藏されて、乃木さんの思ひ出の一つになつてゐる。

石黒軍醫總監 子爵樞密顧問官石黒忠悳。

山縣少佐 名は俊信、日露戰役に常陸丸に搭乘して航

乃木さんは祝祭日にどこかへ招かれた時に、もしその家に國旗が出てゐないやうなことがあると、無言のまゝ門前からてくてく歸つてしまつたもので、又片田舍へ行つて、小さな茶店などで忘れずに旗を出してゐると、「有り難うございます。」と禮をいはれたといふ。

も一つ、日の丸については記憶すべき話がある。

明治二十七年日清戰爭の當時、石黒軍醫總監が軍務上の用向で朝鮮まで出掛けた。膚をさすやうな空つ風のうちに夜はほのぼのと明けて、空は快晴、一點の雲もない。今日は十一月三日、天長の佳節である。

處は兵站司令部のある兀浦、司令官山縣少佐は日の出を待つ

行中、敵の襲撃を受け割腹して死す。年五十七。功により中佐に昇任せらる。

て酒樽の鏡を拔き、鯛を山のやうに積み上げて、心をこめた天長節の祝宴を開いた。各〻なみなみと冷酒をついだ杯を手にして肅然と起立し、遙かに故國に向つて萬歲を三唱することとなつて、その音頭を石黑軍醫總監に賴んだ。

石黑總監は起つて、「手旗にする國旗はありませんか。」といふ。一同顏を見合はせたが、萬事不自由な戰場のこと、生憎そこには玩具の日の丸さへもない。突然一兵卒が「一寸お待ち下さい。私が拵へて參ります。」といつて出て行つたが、間もなく手にして入つて來たのは、半紙に日の丸を染めて、細い竹につけたものであつた。

會するもの、總監以下兵卒に至るまで八十三名、總監はこれを受取ると、遙かに東に向つていとも高らかに「天皇陛下萬歲。」と唱へた。一唱、二唱、涙は頰に傳はる。三唱し終つて、その感激に一同聲

を放つて泣いた。

旗は卽座の機轉から、その兵卒が梅干の汁で粗末な半紙の眞中に日の丸を描いたもの、細い竹竿の尖には梅漬の紫蘇の葉をまるめた玉がつけてあつた。この旗はしばらく旭日にむけて兵站部の前に揭げてあつたが、やがて總監はこれを行李に納めて本國へ歸つた。

畏れ多くも明治大帝には當時廣島に大本營をお進めになつていらせられたので、石黑總監は御前に伺候した折に、お土產話としてこの梅干旗の事を御聞きに達した。天機ことの外うるはしく、「その旗を持參せよ。」との畏き御仰。やがてうやうやしくこれを天覽に供し奉ると、そのまゝ御卓の上に三日の間お置きになつて、再び總監にお下げになつたといふ。

（日の丸由來記）

松居松翁 名は眞玄。劇作家。明治三年生。

時 延元元年（一九九六）五月。

處 攝津國櫻井驛。

人 楠木判官正成。四十三歳。庄五郎正行。十二歳。備前守正忠（一族）。憲美太郎正遠（同）櫻井兵衞康光四十餘歳。お久の方。（正成の妻）。水無瀬（康光の妻）

天王山 京都府乙訓郡大山崎村にある小山。

寶積寺 天王山腹にある眞言宗の寺。

四三 櫻井驛

松居松翁

（攝津國櫻井驛の城主櫻井兵衞尉康光が庭前。中央、古松一株、下手は一面の庭樹を植込み、其の後に母屋の見ゆる心。上手も木振面白き庭樹、夏草の花壇などあり。處々に菊水の紋打ちし幕を張る。

正面は天王山を近く望み、寶積寺の三重の塔は、その山腹に塔頂を露はす。遠く淀川船の船歌聞ゆ。正成は正忠・正遠及び櫻井康光夫妻と共に出で來る。正成・正忠・正遠の三人は武裝す）

正成　（正忠に）侍やお久がまゐつたら、直ちに發足致しませう。一同に支度をさせていたゞきたい。

正忠　承知致しました。

（向うより武士一人かけ來る）

武士　奥方と和子樣とが御出でになりました。

正成　おゝ、これへ案内してくれ。

武士　はつ。（向うへ去る）

（向うよりお久の方と庄五郎とが武士に伴なはれて出づ。侍女二人つき添ふ。武士たちは鎧櫃を舁ぎて出づ）

庄五郎　（正成にすがりつきて）父上、たうとう參りました。

正成　（庄五郎の頭を撫でつゝ）うむ、よう來たな。（櫻井夫妻に）この樣な遠慮のない奴でございます。（庄五郎とお久の方に）櫻井どの御夫婦ぢや。今度は大勢が厚い御世話に預つた。

（お久の方と庄五郎とは夫妻に挨拶する）

お久の方　それは忝い事でございます。荒くれ者ばかりで、さぞ御迷惑でございましたらう。

康光　何の手前どもこそ。都にては判官殿に何かと御世話に預

判官 檢非違使の尉。元弘三年（一九九三）正成檢非違使尉となる。

つて居ります。

水無　何にしても、こゝは庭先、どうぞあれへお通り下さりませ。

正成　いや、兩人には申し聞けたいことがござります。暫くこゝを拜借しませう。（武士に）供のものは、御臺所でもお借り申して休息させるがよい。

水無　いえ、わたくしが御案内申し上げます。

お久　それでは却つて恐れ入ります。

水無　（供の者に）さあ、かうお出でなさりませ。（康光夫妻を先に、召仕たち下手に入る。武士は一禮して向うへ去る。行々子鳴く）

お久　此の度はわざわざお迎をいたゞきまして、有り難う存じました。

正成　うむ、わしも急に逢ひたくなつたのでな。齡のせゐかの、今

度は不思議に庄五郎の顔が見たくなつてな。

庄五　父上、私も初陣が出來るのでござりますか。

正成　（笑つて）それで鎧櫃をもつて來たのか。

庄五　はい。

正成　（なほ笑つて）お前はまだ早いよ。

庄五　併しその中に戰の無い時が參りは致しませんか。

正成　（苦笑して）さうなれば結構ぢやが、お前一代、いや何代も戰をせねばならぬ事になるであらう。（思はずお久の方と顔を見合はす。お久の方黯然となる）

庄五　それでも今度は父上と一緒に戰がしてみたいなあ。

正成　さういふ時節が來るかも知れぬ。併し今度はもう一度留守居せえ。

將監　こゝにては左近衛將監楠木正家。
孫子　支那古代の兵法家。名は武。「孫子」十三篇を著はす。
吳子　支那古代の兵法家。名は起。「吳子」一卷を著はす。
六韜　支那古代の兵書。
三略　支那古代の兵書。
二郎　正成の第二子。後に正時。
小二郎　正成の第三子。後に正儀。
五人　正成の第四子正秀、第五子正平を併せていふ。
赤阪　大阪府南河内郡赤阪村字水分。
千劍破　同郡東條村金剛山の半腹。
この春　延元元年（一九九六）二月正成京都に尊氏を破る。
死を必する　吳子に、「凡ソ兵戰ノ場ハ屍ヲ止ムルノ地ナリ。死チ必スルトキハ則チ生キ、生チ幸スルトキハ則チ死ス。」

庄五　でも、私はもう十三歳になつて居ります。

正成　併しまだ戰のしやうは知らないからな。

庄五　いゝえ存じて居ります。父上が戰場へ出られた御留守の間でも、私は將監や母上から兵法の講釋を伺つて居りました。孫子・吳子も、六韜・三略も、昔讀んでしまひました。

正成　それは偉いなあ。父は此の春以來一緒に暮して居りながら、それほどとは知らなかつた。お久、お前にさへまかせて置いたら、二郎も小二郎も、その他の伜たちも、庄五郎の弟たるに恥ぢないものに仕立ててくれるであらう。そしてわしの志を襲ぎ得るものが既に五人もあるとすれば、正成は心を安く、いつでもこの世を去れるわけだ。

庄五　（父の顏をじつと見て）では、父上はもう死を決しておいでになるのでございますか。

正成　（やゝ聲を勵まして）その尋ねかたは愚か過ぎるぞ。苟も武士の家に生れたものは、如何なる時、如何なる場合でも、討死の覺悟なくして戰場に臨むべきではない。わしは赤阪や千劍破に城を築いた時でも、この春の洛中の戰でも、きつと討死の覺悟は定めて居た。それで居て、今日まで無事に戰場をかけめぐつて居た。そこが吳子の所謂「死を必する時は則ち生きる。」ぢや。死生を超越してこそ初めて眞の武士といふ事が出來るのぢや。

お久　それに致しましても、なぜ今度に限り、わざわざ私どもをお呼寄せになつたのでございませう。心得のために伺つて置きたいと存じますが。

兵を用ふる 吳子に「故ニ曰ク、兵ヲ用フルノ害ハ猶豫最モ大ナリ。三軍ノ災ハ狐疑ニ生ズ。」

杞人 列子に「杞國ニ人ノ天崩墜シテ身ノ寄スル所無キヲ憂ヘ、寢食ヲ廢スル者有リ。」

正成（笑つて）今もいふ通り、これは齡のせゐらしいぞ。實は今度の戰は、正成の出つくはした何十度の合戰中で、一番難儀なものらしい。そこでわしはひどく迷つたものだ。ゆふべも眞夜中に目が冴えて眠もれぬまゝ、吳子を讀んだ。そして、あらゆる疑が解けた。「兵を用ふるの害は、猶豫最も大なり。三軍の災は狐疑に生ず。」ぢや。正成の兵法、今日までは、如何なる時も狐疑せず、敵をして疾風迅雷耳を掩ふの遑なからしめるにあつたが、今度ばかりは狐疑し猶豫した。その爲に庄五郎の身も餘計に案ぜられてお前たちを呼寄せる事になつたのぢや。今になつて見れば、杞人が天を憂ひたるやうな愚かさで、正成、心ひそかに恥ぢて居るのぢや。併しわしも今年は四十三ぢや。今までの戰場で無事であつただけ、これからは段々危險が大きくなつて行

く譯ぢや。親子三人が手を取合つて長閑に語り合ふ折も、この次にはもう無いかも知れぬ。さうして見れば、お前たちにわざわざ來て貰つた事も無益ではなかつたらしい。いや、庄五郎の學問識見のほどを知つただけでも、わしの心の曇は去つて、狐疑もなく、猶豫もなく、天空海濶の心をもつて兵戰の場に赴く事が出來る。これも云はばお前たちの賜物だ。正成禮をいふ。

お久　そのお喜びを伺つて、私どもも、どのやうに嬉しいか分りません。今度は今度はと、どの合戰の時でも、お身の上を危みながらお見立て申して居りましたが、今度ばかりは安心して御見送り申す事が出來ます。有り難うござりまする。若し神佛の思召に適ひます事ならば、出來ますだけは御身命をお厭ひ遊ばして……（思はず涙ぐむ）

お上 後醍醐天皇。

兄上 備前守正忠。

先年 元弘三年（一九九三）

正成　よくいうてくれたわしも益もなく生命を棄てようとは思はぬ。生きてさへ居れば、まだお上に御奉公の出來る身ぢや。併し今度の戰は、九死に一生を求めるのぢや。萬に一つの手違ひがあつても討死をせねばなるまい。お前の兄上、わしの弟たちも、枕を並べて討死をせねばなるまい。が、喜んでくれ。あの人たちは、喜んでわしと一緒に死ぬ覺悟をもつて居てくれるのぢや。この正成は生れ落ちて、一つ自得した事とてもないが、ただ士卒と共に樂しみもし、苦しみもする事を知つて居る。そしてそれはこの三略の卷から教へられたのぢや。庄五郎、お前も熟讀玩味して、出來る事なら、徒らに弓槍を取つて護國の楯となるばかりでなく、治國平天下の輔佐の臣ともなるやうに心掛けるがよい。（腰の小刀をぬいて）これは先年、お上が隱岐の島

尻懸則長 大和尻懸の刀鍛冶。略〻同時代の人。こゝにてはその人の鍛へし刀の意。

子故の闇 人の親の心は闇にあられども子を思ふみちに迷ひぬるかな（藤原兼輔）

より還御の砌、『此の度のことは、正成そち一人の力であつたぞ。』といふ忝い綸言と共に下し賜はつた尻懸則長ぢや。どうか楠木家の續く限り、子孫のものに語り續けて、世にも稀なる朝恩を永久に傳へてくれ。それからこの一卷は、今も云つた通り、この正成が一生の心の糧ともなり、數十箇度の合戰の指南車ともなつてくれた貴重な書ぢや。幸にお前の代になつて、この中の語が王佐の事業の資ともならば、正成あの世から禮を云ふぞ。お久にはこの上いふべきこともないが、たゞ心を用ふべきは足利殿ぢや。正成一代にあの人ほど獪い人を見た事はない。如何なる手だてをもつて近づいて來ようとも、決してその人の甘言に耳をかすな。お前ほど堅固な心のものに、いらぬ用心をさせるやうではあるが、子故の闇に迷ひ易いが親の情ぢや。

君子も道を以てすれば欺かれぬものでもない。戒めても戒むべきは足利殿ぢやぞ。

お久　御教訓一々に肝に鏤りつけて、きつと御言葉の通りに致します。御安心を願ひます。

正成　それを聞いてわれも心が落着いた。

（この時上手に陣鐘・太鼓の音聞ゆ）

（楠　正成）

國文鑒　卷一終

國語假名遣一覽

△國語には發音が相似てゐて、それを記す假名の同じでないものがある。之を書き別けるのを國語假名遣といふ。
△本表は記憶に便するために、少數のものをあげて他を類推せしめる。

ゐ

最モ少イ**ゐ**ヲ諸記スル。其ノ他ハ**い**カ**ひ**デアル。

ゐ(井・堰)
　ゐなか(田舍)　ゐもり(蠑螈)
ゐ(居)
　ゐざり(膝行)　ゐしき(臀)
　かもゐ(鴨居)　しきゐ(閾)
　くもゐ(雲居)　くらゐ(位)
　しばゐ(芝居)　とのゐ(宿直)
　とりゐ(鳥居)　まとゐ(圓欒)
　もとゐ(基)
ゐ(猪)(亥)
　ゐくび(猪頸)　ゐのこ(豕)
　ゐのしし(猪)　いぬゐ(乾)
ゐ(茵)
　ふとゐ(莞)
あゐ(藍)
　くれなゐ(紅)
あぢさゐ(紫陽花)　**うなゐ**　髫髮)
かたゐ(乞食)　**くわゐ**(慈姑)
せゐ(所爲)　**なゐ**(地震)
ゐる(率)
　ひきゐる(率)　もちゐる(用)トモ　もちひる。
まゐる(參)
語頭デハ**ひヲいト**發音スルコトハナイ。紛レ易イノハ**いトゐ**デアル。前ニ揭ゲタ**ゐ**ノ外ハ皆**い**デアル。
語中・語尾デハ**ゐトいトひ**ガ紛レ易イ。**ゐ**ヲ用フル場合ハ前ニ揭ゲタ。次ノ**い**ヲ用フル場合ノ外ハ**ひ**デアル。
おい(老)　**くい**(悔)　**むくい**(報)
音便　**き・し**(い)ガ(い)トナルモノ。
　しいじ(四時)　しいか(詩歌)
　むいか(六日)　さいたま(埼玉)
　さいはひ(幸)　たいまつ(松明)
　ついぢ(築地)　きさい(后)
　ひいき(贔屓)　ついたち(朔)
　ついたて(衝立)　やいば(刃)
　ついで(序)　かうがい(笄)
　かいて(書きて)　さいて(咲きて)
　ないて(泣きて)　あしい(惡しし)
　おもい(重し)　かなしい(悲しき)

ひ

少數ノ**ゑ**ヲ諸記スル。其ノ他ハ**え**カ**へ**デアル。

ゑ(繪)
　ゑがく(畫)　ゑどる(彩)
　ともゑ(巴)(鞆繪)
ゑ(餌)
　ゑづく(嘔吐)
ゑ(穢)
　ゑど(穢土)

ゑ

つもの え(戊)　かのえ(庚)
　みづのえ(壬)
え(枝・柄)
　しづえ(下枝)　ずはえ(條)
　ながえ(轅)
え(江)
ふえ(笛)
　のどぶえ(吭)
ぬえ(鵺)
ひえ(稗)
　ひえどり(鵯)
さざえ(蠑螺)　**あえる**(肴)
あまえる(甘)　**いえる**(癒)
いばえる(嘶)　**おびえる**(脅)
おぼえる(覺)　**きえる**(消)
きこえる(聞)　**こえる**(越)
こえる(肥)　**こごえる**(凍)
すえる(饐)
はえる(映)
　ゆふばえ(夕映)
はえる(生)
　ひこばえ(蘖)
ふえる(殖)　**ほえる**(吠・吼)
みえる(見)　**もえる**(燃)
もえる(萌)
　もえぎ(萌黃)
もだえる(悶)

へ

語頭デハ**おトを**ガ紛レ易イ。次ノ外ハ**お**デアル。

を(男・雄・夫・牝)
　をとこ(男)　たけを(猛男)
　みやびを(風流男)　ををし(雄々)
　をつと(夫)　ますらを(丈夫)
　めをと(夫婦)　やもを(鰥夫)
　をひ(甥・姪)　をす(牝)
を(小)
　をぢ(伯父・叔父・老翁)
　をば(伯母・叔母)　をとめ(少女)
を(峯・岑)……をの へ(峯上)
を(尾)……をばな(尾花)
を(緒)……をどし(絨)
を(麻・苧)
　をがら(麻幹)　をけ(桶)
　をさ(筬)　をだまき(苧環)
をか(岡・丘・陸)……をかぼ(陸稻)
をぎ(荻)　**をけら**(朮)
をこ(愚・痴)……をこがまし(痴)
をこぜ(鱈)　**をさ**(長)
をし(鴛鴦)　**をしかば**(韋)
をそ(獺)
をち(遠)……をちこち(遠近)
　をとどし(一昨年)　をととひ(一昨日)

を

ほ

ふ

わざをぎ(俳優)　**かをる**(香・薫)
しをる(萎)　**まをす**(申)
しをらし(可憐)　**やをら**(徐)
ふト書イテ**をト**發音スル場合。
あふひ(葵)　**あふぐ**(仰)
あふぐ(煽)……あふぎ(扇)
あふる(煽)　**あふち**(楝・樗)
あふみ(近江)……とほたふみ(遠江)
きのふ(昨日)……けふ(今日)
さふらふ(候)　**たふる**(仆・倒)
たふとし(貴)　**はふる**(投)
ふくろふ(梟)　**かげろふ**(陽炎)

わ

語頭デハ**わトは**ハ紛レナイ。**語中・語尾**デハ紛レ易イ。次ノ外ハ**は**ヲ用フル。

あわ(泡・沫)……みなわ(水沫)
いわし(鰯)　**うらわ**(浦回)
くつわ(轡)(口輪)　**くるわ**(郭)
くわゐ(慈姑)　**ことわざ**(諺)
ことわり(道理)
こわいろ(聲色)
　こわね(聲音)　こわだか(聲高)
さわやか(爽)
しわ(皺)……しわむ(皺)
たわやか(嬬妍)
　たわやめ(手弱女)
たわら(俵)　**のわき**(野分)
はらわた(腸)　**ひわ**(鶸)
あわつ(周章)　あわただし(倉皇)
うわる(植)　**かわく**(乾・渴)
ことわる(斷・理)　**さわぐ**(騷)
すわる(坐)　**たわむ**(撓)
しわし(吝)　**よわし**(弱)

は

じト書ク語ヨリ**ぢ**ト書ク語ノ方ガ少イ。次ニアゲル他ハ**じ**ヲ用フル。

ぢ(父)
　をぢ(伯父・叔父・小父)　ぢぢ(爺・祖父)
ぢ(路)……こうぢ(小路)
　みそぢ(三十)　よそぢ(四十)
あぢ(味)　**あぢ**(鯵)　**うぢ**(氏)
あぢさゐ(紫陽花)
かぢ(梶)　**かぢ**(鍛冶)
ひぢ(泥)
ふぢ(藤)……ふぢばかま(藤袴)
くぢら(鯨)　**かうぢ**(麹)
ことぢ(琴柱)　**すぢ**(筋)
ひぢ(臂)　**なんぢ**(汝)
ねぢ(螺旋)
　ねぢく(拗)
もみぢ(紅葉)　**わらぢ**(草鞋)
なめくぢ(蛞蝓)　**ちぢむ**(縮)

じ

國語假名遣一覽（一）

△國語には發音が相似てゐて、それを記す假名の同じでないものがある。之を書き別けるのを國語假名遣といふ。
△本表は記憶に便するために、少數のものをあげて他を類推せしめる。

ゐ

最モ少イゐを諳記スル。其ノ他ハいカひデアル。
ゐ（井・堰）
　ゐなか（田舍）　ゐもり（蠑螈）
ゐ（居）
　ゐざり（膝行）　ゐしき（臀）
　かもゐ（鴨居）　しきゐ（閾）
　くもゐ（雲居）　くらゐ（位）
　しばゐ（芝居）　とのゐ（宿直）
　とりゐ（鳥居）　まとゐ（團欒）
　もとゐ（基）
ゐ（猪）（亥）
　ゐくび（猪頸）　ゐのこ（豕）
　ゐのしし（猪）　いぬゐ（乾）
ゐ（藺）
　ふとゐ（莞）
あゐ（藍）
　くれなゐ（紅）
あぢさゐ（紫陽花）　うなゐ（髫髮）
かたゐ（乞食）　くわゐ（慈姑）
せゐ（所爲）　なゐ（地震）
ゐる（率）
　ひきゐる（率）　もちゐる（用）もちひ。もちひるトモ

い

まゐる（參）
語頭デハひヲいト發音スルコトハナイ。
紛レ易イノハいトゐデアル。前ニ揭ゲタゐノ外ハ皆いデアル。
語中・語尾デハゐトいトひガ紛レ易イ。次ノいヲ用フル場合ハ前ニ揭ゲタゐヲ用フル場合ノ外ハひデアル。

ひ

おい（老）　くい（悔）　むくい（報）
音便　き・し）ガ（い）トナルモノ。
　しいじ（四時）　しいか（詩歌）
　むいか（六日）　さいたま（埼玉）
　さいはひ（幸）　たいまつ（松明）
　ついぢ（築地）　きさい（后）
　ひいき（贔屓）　ついたち（朔）
　ついたて（衝立）　やいば（刄）
　ついで（序）　かうがい（笄）
　かいて（書きて）　さいて（咲きて）
　ないて（泣きて）　あしい（惡しし）
　おもい（重し）　かなしい（悲しき）

ゑ

少數ノゑヲ諳記スル。其ノ他ハえカへデアル。
ゑ（繪）
　ゑがく（畫）　ゑどる（彩）
　ともゑ（巴）（鞆繪）
ゑ（餌）
　ゑづく（嘔吐）
ゑ（穢）
　ゑど（穢土）
ゑじ（衞士）　ゑぼし（烏帽子）
ゑんじゆ（槐）　こゑ（聲）
すゑ（末）
　こずゑ（梢）（木末）
つくゑ（机）　つゑ（杖）
ゆゑ（故）
　ゆゑん（所以）
ゑむ（笑）
　ゑがほ（笑顏）　ゑくぼ（靨）
　ゑつぼ（笑壺）
ゑふ（醉）　ゑる（彫・鏤）
ゑぐる（刳）
うゑる（飢・餓）　うゑる（植）
すゑる（据）
　すゑもの（陶器）　いしずゑ（礎）
ゑぐし（醎）

え

語頭デハへヲえト發音スルコトハナイ。
紛レ易イノハゑトえデアル。前ニ揭ゲタゑノ外ハ皆えデアル。
語中・語尾デハゑトえトへトガ紛レ易イ。次ノえヲ用フル場合ハ前ニ揭ゲタゑヲ用フル場合ノ外ハへデアル。
え（兄）
　きのえ（甲）　ひのえ（丙）
　つちのえ（戊）　かのえ（庚）
　みづのえ（壬）
え（枝・柄）
　しづえ（下枝）　ずはえ（條）
　ながえ（轅）
え（江）
ふえ（笛）
　のどぶえ（吭）
ぬえ（鵺）
ひえ（稗）
　ひえどり（鵯）
さざえ（蠑螺）　あえる（肖）
あまえる（甘）　いえる（癒）
いばえる（嘶）　おびえる（脅）
おぼえる（覺）　きえる（消）
きこえる（聞）　こえる（越）
こえる（肥）　こごえる（凍）
すえる（饐）
はえる（映）
　ゆふばえ（夕映）
はえる（生）
　ひこばえ（蘖）
ふえる（殖）　ほえる（吠・吼）
みえる（見）　もえる（燃）
もえる（萠）
　もえぎ（萌黃）
もだえる（悶）

へ

を

語頭デハおトをガ紛レ易イ。次ノ外ハおデアル。
を（男・雄・夫・牝）
　をとこ（男）　たけを（猛男）
　みやびを（風流男）　ををし（雄々）
　をつと（夫）　ますらを（丈夫）
　めをと（夫婦）　やもを（鰥夫）
　をひ（甥・姪）　をす（牝）
を（小）
　をぢ（伯父・叔父・老翁）
　をば（伯母・叔母）　をとめ（少女）
を（峯・岑）……をのへ（峯上）
を（尾）……をばな（尾花）
を（緒）……をどし（縅）
を（麻・苧）
　をがら（麻幹）　をけ（桶）
　をさ（筬）　をだまき（苧環）
をか（岡・丘・陸）……をかぼ（陸稻）
をぎ（荻）　をけら（朮）
をこ（愚）（痴）……をこがまし（痴）
をこぜ（鰧）　をさ（長）
をし（鴛鴦）　をしかは（韋）
をそ（獺）

ほ

をち（遠）……をちこち（遠近）
　をとどし（一昨年）　をととひ（一昨日）
をとり（囮・媒鳥）　をの（斧）
をみな（女）……をみなへし（女郎花）
をり（檻）　をり（節）
をろち（大蛇）　をがむ（拜）
をかす（犯・冒）　をさむ（治・修・收・藏・納）
をしふ（教）　をどる（踊・跳・躍）
をののく（慄）　をはる（終・卒・了）
をめく（叫）　をる（居）
をる（折）
　をしき（折敷）　しをり（栞）
　つづらをり（九十九折）
をかし（可笑）　をさなし（幼）
をし（惜）　をさをさ（大抵）

附）　お

語中・語尾デハおハ用ヒナイ。紛レ易イノハをトほデアル。次ノ外ハ皆ほデアル
あを（青）……あをがひ（螺鈿）（靑貝）
いさを（功・績）
うを（魚）
　かつを（鰹）　ひを（氷魚）
さを（竿・棹）
たをやか（嫋妍）……たをやめ（手弱女）
とを（十）　ばせを（芭蕉）
みさを（操）
みを（澪・水脈）……みをつくし（澪標）

（ふ

わざをぎ（俳優）　かをる（香・薰）
しをる（萎）　まをす（申）
しをらし（可憐）　やをら（徐）
ふト書イテをト發音スル場合。
あふひ（葵）　あふぐ（仰）
あふぐ（煽）……あふぎ（扇）
あふる（煽）　あふち（楝・樗）
あふみ（近江）……とほたふみ（遠江）
きのふ（昨日）……けふ（今日）
さふらふ（候）　たふる（仆・倒）
たふとし（貴）　はふる（投）
ふくろふ（梟）　かげろふ（陽炎）

わ

は

語頭デハわトはハ紛レナイ。語中・語尾デハ紛レ易イ。次ノ外ハはヲ用フル。
あわ（泡・沫）……みなわ（水沫）
いわし（鰯）　うらわ（浦回）
くつわ（轡）（口輪）　くるわ（郭）
くわゐ（慈姑）　ことわざ（諺）
ことわり（道理）
こわいろ（聲色）
　こわね（聲音）　こわだか（聲高）
さわやか（爽）
しわ（皺）……しわむ（皺）
たわやか（嫋妍）
　たわやめ（手弱女）
たわら（俵）　のわき（野分）
はらわた（腸）　ひわ（鶸）
あわつ（周章）　あわただし（倉皇）
うわる（植）　かわく（乾・渴）
ことわる（斷・理）　さわぐ（騷）
すわる（坐）　たわむ（撓）
しわし（吝）　よわし（弱）

じ

じト書ク語ヨリぢト書ク語ノ方ガ少イ。次ニアゲル他ハじヲ用フル。
ぢ（父）
　をぢ（伯父・叔父・小父）　ぢぢ（爺・祖父）
ぢ（路）……こうぢ（小路）
　みそぢ（三十）　よそぢ（四十）
あぢ（味）　あぢ（鰺）
あぢさゐ（紫陽花）　うぢ（氏）
かぢ（梶）　かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）

ぢ

ふぢ（藤）……ふぢばかま（藤袴）
くぢら（鯨）　かうぢ（麴）
ことぢ（琴柱）　すぢ（筋）
ひぢ（臂）　なんぢ（汝）
ねぢ（螺旋）
　ねぢく（拗）
もみぢ（紅葉）　わらぢ（草鞋）
なめくぢ（蛞蝓）　ちぢむ（縮）

ず

づト書ク語ヨリずト書ク語ノ方ガ少イ。次ニアゲル他ハづヲ用フル。
ずず（數珠）　ずみ（桷）
ずはえ（條）
あんず（杏子）
　ゆず（柚子）　りんず（綸子）
いしずゑ（礎）　こずゑ（梢）
かず（數）　きず（傷・疵・瑕）
くず（葛）　すず（鈴）　すず（錫）
すずき（鱸）　すずし（生絹）
すずしろ（蘿蔔）　すずな（菘）
すずめ（雀）　すずり（硯）
ねずみ（鼠）
はず（筈）……やはず（矢筈）　ゆはず（弭）
はずみ（機）　みみず（蚯蚓）
もず（百舌鳥・鵙）　ずす（誦）

づ

たたずむ（佇）　なずらふ（準）
ひずむ（歪）　まず（雜・交・混）
ずるし（狡猾）　すずし（涼）
かならず（必）　すずろ（漫）
さ變格活用の濁れるもの
　禁ず・信ず……等。

字音假名遣一覽表

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・吳音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に掲出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を擧げ、一覽に便した。）

イ

ゐ　尉慰・韋偉煒緯違圍葦闈幃・唯維帷惟・委倭餧痿逶萎・胃渭蝟・爲位・威畏・彙遺

ゐき　域閾

ゐん　員韻隕殞・尹・允・院・筠

此ノ外ハ大抵**い**ノ假名。

エ

ゑ　會繪・回迴・畫・穢・惠・隷衞

ゑい　衞

ゑつ　越鉞・粤・曰

ゑん　寃鴛遠轅園・怨宛苑婉鴛蜿・爰媛援猨瑗・垣・圓寃

此ノ外ハ大抵**え**ノ假名。

え　徭搖謠遙瑤・繞要腰曜耀・夭妖殀・幼拗窈・杳

えふ　葉

よう　用俑涌踊蛹・容・蓉溶熔鎔・庸傭牖膺鷹・擁甕・癰孕・蠅

此ノ外ハ大抵**やう**ノ假名。

オ

を　烏・嗚・塢・惡・汚

をく　屋

をつ　喊・膃

をん　溫慍・蘊・寃・園・薗・怨苑寃穩

此ノ外ハ大抵**お**ノ假名。

あふ　押狎・鴨・凹

おう　應・鴈・嘔・毆・歐・嫗・謳・鷗・甌・翁・蓊・甕

わう　王・往・枉・汪・旺・瓦・皇・鳳・黃・橫

此ノ外ハ大抵**あう**ノ假名。

カ

くわ　化花・貨・訛・靴・禾・和・科・果・菓・課・夥・裹・顆・寡・華・嘩・譁・鍋・蝸・過・渦・卦・火・戈・瓜・寡・瓦・臥・畫

ぐわ　會繪・檜・膾・獪・鱠・回・徊・蛔・廻・傀・槐・魁・魂・嵬・塊・悔・晦・誨・灰・恢・詼・懷・壞・快・怪・潰・乖・外・畫・劃・郭・廓・獲・穫・蠖・鑊・擴・攫・霍・蘿・擴・馘・活・刮・括・闊・聒・滑・猾・豁

くわい

ぐわい

くわく

くわつ

コ

かふ　恰・洽・閤・甲・匣・狎・胛・岬・盍・溘・嗑・闔・合

がふ

こう　孔・吼・亙・恒・口・扣・叩・后・垢・逝・詬・苟・拘・鉤・溝・構・購・媾・篝・遘・工・紅・虹・訌・功・攻・貢・槓・鴻・倥・控・侯・候・喉・猴・洪・哄・閧・後・弘・寇・厚・公・興・蕗・肱・肯・恒・劫・業・光・恍・晃・晄・觥・皇・惶・徨・煌・篁・蝗・遑・黃・廣・曠・礦・鑛・壙・黌・荒・慌・宏・紘・轟

ごふ

くわう

ぐわう

此ノ外ハ大抵**かう**（**がう**）ノ假名。

（ゴ）

シ

しふ　揖・楫・緝・葺・習・摺・集・拾・襲・執・濕・濕・十・什・汁・終・衆・宗・從・縱・蹤・充・銃・戎・絨

じふ

しゆう

じゅう

ぢゆう　重・住・頭（**ぢゆう**ハ**ぢう**ト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵**しう**（**じう**）ノ假名。

せう　小・少・抄・鈔・肖・梢・宵・霄・消・稍・硝・逍・銷・誚・哨・蛸・召・昭・照・詔・韶・沼・招・紹・蕭・簫・嘯・瀟・焦・蕉・憔・樵・礁・笑・燒・椒・繞・饒・遶・擾・捷・睫・妾・接・渉・慴・慴・慴・慴・松・淞・頌・鬆・鍾・衝・踵・鷹・鵰・升・昇・陞・從・慫・縱・蹤・聳・悚・竦・誦・證・稱・勝・承・丞・蒸・拯・乘・剩・冗・繩・靠・丈・杖・嬢・釀・定・錠・場・孃・溺・嬺・條・尿・帖・疊

ぜう

せふ

しよう

じよう

ぢやう

でう

でふ

此ノ外ハ大抵**しやう**（**じやう**）ノ假名。

（ジ）

ぢ　持・痔・峙・治・地・尼・怩・除・直・軸・釉・竺・畝・恒・呢・女・除・陣・塵

ぢき

ぢく

ぢつ

ぢよ

ぢん

此ノ外ハ大抵**じ**ノ假名。

ト

たふ　答・塔・搭・沓・踏・納・衲・榻・東・棟・凍・豆・逗・頭・鬪・痘・登・燈・鐙・澄・到・冬・疼・鼕・藤・籐・謄・騰・等・投・透・偸・桶・統・童・僮・撞・瞳・艟・同・洞・桐・胴・銅・筒・動・慟

どう

此ノ外ハ大抵**たう**（**だう**）ノ假名。

（ド）

ニ

にふ　入

にゆう　乳（**にゆう**ハ**にう**ト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵**にう**ノ假名。

ねう　饒・撓・遶・尿・溺

によう　女

ねふ　捻

此ノ外ハ大抵**にやう**ノ假名。

ノ

なふ　納・衲

のう　農・濃・儂・膿・能

此ノ外ハ大抵**なう**ノ假名。

ヒ

へう　表・俵・票・標・漂・嫖・飄・飄・剽・猋・飈・豹・李・苗・描・猫・錨・秒・眇・渺・廟・馮・憑・氷

べう

ひよう

此ノ外ハ大抵**ひやう**（**びやう**）ノ假名。

（ビ）

ホ

はふ　法・乏（漢音）・法・乏（吳音）・乏（漢音）・乏（吳音）・奉・俸・捧・丰・蚌・峯・逢・烽・蜂・鋒・縫・蓬・朋・崩・鵬・繃・封・幇・豐・鳳・矛・委・某・謀・貿・眸・棒

ほふ

ばふ

ぼふ

ほう

此ノ外ハ大抵**はう**（**ばう**）ノ假名。

（ボ）

メ

めう　苗・猫・妙

此ノ外ハ大抵**みやう**ノ假名。

モ

もう　蒙・朦・濛・艨

此ノ外ハ大抵**まう**ノ假名。

ユ

いふ　邑・怛・揖

ゆう　雄・勇・熊・裕・融

此ノ外ハ大抵**いう**ノ假名。

字音假名遣一覽表

（本表は記憶の便宜上少數の漢字音假名遣を擧げ、他は之を類推せしむる。漢音・呉音は別に區別せず、但し兩音に關係せる必要語は各別に揭出した。類形の漢字は記憶の必要上同列に之を摺げ、一覽に便した。）

イ

ゐ
尉慰・韋偉・緯・違・圍・葦・闈・幃・唯・維・帷・惟・委・倭・餧・痿・逶・萎・胃・渭・謂・蝟・爲・位・威・畏・彙・遺・域・閾・員・韻・隕・殞・尹・允・院・筠

ゐき
ゐん

此ノ外ハ大抵いノ假名。

エ

ゑ
ゑい
ゑつ
ゑん
會・繪・回・廻・畫・穢・惠・慧・衛・衛・越・鉞・粤・曰・寰・猿・遠・轅・園・怨・宛・苑・婉・鴛・蜿・爰・媛・援・猨・瑗・垣・圓・寃

此ノ外ハ大抵えノ假名。

え
えう
えふ
よう
徭・搖・謠・遙・瑤・繇・要・腰・曜・耀・耀・夭・妖・殀・幼・拗・窈・杳・葉・用・俑・涌・踊・蛹・容・蓉・溶・熔・鎔・庸・傭・驅・膺・鷹・擁・甕・癰・孕・蠅

此ノ外ハ大抵やうノ假名。

オ

を
をく
をつ
をん
此ノ外ハ大抵おノ假名。

あふ
おう
押・狎・鴨・凹・應・鷹・嘔・毆・歐・嫗・謳・鷗・甌・翁・蓊・甕・蹇・王・往・枉・汪・旺・瓦・皇・凰・黃・横

わう

此ノ外ハ大抵あうノ假名。

カ（ガ）

くわ
ぐわ
くわい
ぐわい
くわく
ぐわく
くわつ
ぐわつ
くわん
ぐわん
化・花・貨・訛・靴・禾・和・科・果・菓・課・夥・裹・顆・寡・華・嘩・譁・嚇・蝸・過・渦・卦・火・戈・瓜・寡・瓦・臥・畫・會・繪・檜・膾・獪・鱠・回・徊・蛔・廻・傀・槐・魁・瑰・鬼・塊・悔・晦・誨・灰・恢・詼・懷・壞・快・怪・潰・乖・外・畫・劃・郭・廓・獲・穫・蠖・鑊・擴・擴・霍・蠖・擴・馘・活・刮・括・闊・聒・滑・猾・豁・月・串・患・緩・溪・完・莞・筦・貫・慣・官・宦・管・菅・棺・逭・館・喚・換・煥・渙・環・還・寰・圜・鐶・勸・灌・歡・觀・鶴・讙・權・驩・鑵・澣・寬・桓・冠・卷・盧・款・關・鰥・丸・紈・元・玩・頑・願

此ノ外ハ大抵か（が）ノ假名。

キ

きふ
きゆう
及・吸・汲・級・笈・岌・給・翕・泣・急・弓・窮・躬・窮・宮（きゆうハきうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵きうノ假名。

ケ（ゲ）

けう
げう
けふ
僥・僥・澆・曉・驍・翹・夾・俠・狹・峽・頰・鋏・饒・愜・莢・怯・劫・協・脇・脅・業・鄴・共・供・拱・恭・襲・恐・蛩・蹙・凶・兇・匈・恟・胸・輿・矜・兢・凝

此ノ外ハ大抵きやう（ぎやう）ノ假名。

コ（ゴ）

かふ
がふ
こう
恰・洽・閤・甲・匣・狎・胛・岬・盍・溘・嗑・闔・合・孔・吼・亙・恆・口・扣・叩・后・垢・逅・詬・苟・拘・鉤・溝・構・搆・購・媾・篝・遘・工・紅・虹・訌・功・攻・貢・槓・鴻・侊・控・侯・候・喉・猴・洪・哄・閧・後・弘・寇・厚・公・興・蕊・眩・肯・恒・劫・業・光・恍・晃・晄・鮫・皇・惶・徨・煌・篁・蝗・遑・黃・廣・曠・礦・鑛・壙・黌・充・慌・宏・紘・轟

此ノ外ハ六抵かう（がう）ノ假名。

ごふ
くわう
ぐわう

シ（ジ）

しふ
じふ
しゆう
じゆう
耕・輯・緝・葺・習・摺・集・拾・襲・執・澁・濕・十・什・汁・終・衆・宗・從・縱・蹤・充・銃・戎・絨・（しゆう（じゆう）ハ（しう・じう）ト書クモ妨ナシ）

ぢゆう
重・住・貢（ぢゆうハぢうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵しう（じう）ノ假名。

せう
小・少・抄・鈔・肖・梢・宵・霄・消・稍・硝・逍・銷・誚・哨・蛸・召・昭・照・詔・韶・沼・招・紹・蕭・簫・嘯・瀟・焦・蕉・憔・樵・礁・笑・燒・椒・繞・饒・遶・擾・捷・睫・妾・接・渉・懾・慴・松・淞・頌・鬆・鍾・衝・踵・鴈・腫・升・昇・陞・從・慫・縱・蹤・聳・悚・竦・誦・證・稱・勝・承・丞・蒸・拯・乘・剩・冗・繩・芋・丈・仗・杖・孃・釀・定・錠・場・嫐・溺・嫋・條・尿・帖・疊

此ノ外ハ大抵しやう（じやう）ノ假名。

ぢき
ぢく
ぢつ
ぢよ
ぢん
持・痔・峙・治・地・尼・怩・除・直・軸・柚・竺・竚・恒・昵・女・除・陣・塵

此ノ外ハ大抵じノ假名。

ぜう
せふ
しよう

ず
豆・逗・頭・圖・途・徒

此ノ外ハ大抵ずノ假名。

ソ（ゾ）

さふ
ざふ
そう
挿・匝・雑・窗・總・聰・忽・葱・偬・宗・綜・踪・淙・崇・曾・僧・增・層・憎・贈・奏・湊・輳・叟・搜・艘・痩・嗽・漱・嗾・簇・宋・走・叢・藪・遂

此ノ外ハ大抵さう（ざう）ノ假名。

チ

ちふ
ちゆう
蟄・中・仲・冲・忠・衷・注・柱・註・駐・誅・蛛・厨・躊・蟲（ちゆうハちうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵ちうノ假名。

てふ
てう
蝶・喋・諜・諜・渫・帖・貼・朝・潮・嘲・兆・銚・挑・眺・跳・窕・晁・凋・調・彫・鯛・超・迢・貂・髫・串・鳥・釣・肇・糶・趙・冢・塚・徴・懲・重・澄・龍

ちよう

此ノ外ハ大抵ちやう假名。

ツ

づ
豆・逗・頭・圖・途・徒

此ノ外ハ大抵ずノ假名。

ト（ド）

たふ
とう
答・塔・搭・沓・踏・納・衲・榻・東・棟・凍・豆・逗・頭・鬪・痘・登・燈・鐙・磴・剅・冬・疼・蓼・藤・籐・謄・騰・等・投・透・偸・葯・統・童・僮・撞・瞳・艟・同・洞・桐・胴・銅・筒・動・慟

どう

此ノ外ハ大抵たう（だう）ノ假名。

ニ

にふ
にゆう
入・乳（にゆうハにうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵にうノ假名。

ねう
によう
ねふ
饒・撓・遶・尿・溺・女・捻

此ノ外ハ大抵にやうノ假名。

ノ

なふ
のう
納・衲・農・濃・膿・膿・能

此ノ外ハ大抵なうノ假名。

ヒ（ビ）

へう
表・俵・票・標・漂・嫖・飄・飄・剽・猋・飈・豹・李・苗・描・猫・錨・秒・眇・渺・廟・馮・憑・氷

べう
ひよう

此ノ外ハ大抵ひやう（びやう）ノ假名。

ホ（ボ）

はふ
ほふ
ばふ
ぼふ
ほう
法・乏（漢音）法・乏（呉音）乏（漢音）法・乏（呉音）奉・俸・捧・丰・蚌・峯・逢・烽・蜂・鋒・縫・蓬・朋・崩・鵬・繃・封・幇・豐・鳳・矛・袤・某・謀・貿・眸・棒

此ノ外ハ大抵はう（ばう）ノ假名。

メ

めう
苗・猫・妙

此ノ外ハ大抵みやうノ假名。

モ

もう
蒙・朦・濛・艨

此ノ外ハ大抵まうノ假名。

ユ

いふ
ゆう
邑・悒・揖・雄・勇・熊・裕・融

此ノ外ハ大抵いうノ假名。

リ

りふ
りゆう
立・笠・粒・龍・隆・（りゆうハりうト書クモ妨ナシ）

此ノ外ハ大抵りうノ假名。

レ

れう
れふ
りよう
寮・療・遼・燎・僚・瞭・了・料・聊・寥・獵・鼠・凌・菱・稜・陵・綾・龍

此ノ外ハ大抵りやうノ假名。

ロ

らふ
ろう
蠟・臘・蔦・籠・瀧・朧・瓏・聾・隴・聾・樓・僂・螻・鏤・弄・陋・漏

此ノ外ハ大抵らうノ假名。

ヰ

すつ・ゆる等ノうノ列ノ音ノ下ニ來ルいノ發音ハゐノ假名デアル

水（ずゐ）・追（つゐ）・隨（ずゐ）・唯（ゆゐ）・類（るゐ）等

此ノ外ハいノ假名。

愛（あい）・英（えい）・明（めい）・清（せい）等

不許複製

垣内

大正十五年十月七日印刷
大正十五年十月十日發行
昭和二年一月廿六日訂正再版印刷
昭和二年一月廿九日訂正再版發行
昭和七年八月十七日第二版印刷
昭和八年一月廿二日第二版訂正再版發行
昭和八年一月廿五日第二版訂正再版發行

著作者　垣内松三

發行兼印刷者　東京市神田區榮士代町二丁目一番地　株式會社文學社　代表者　小林竹雄

發兌　東京市神田區榮士代町二丁目一番地　株式會社文學社　電話神田三五一番　振替東京三八七八番

關西販賣所　大阪市西區靱北通二丁目十八番地　株式會社盛文館　電話土佐堀一五二三番　振替大阪七四三番

國文鑒第二版
全五冊

一・二卷各定價金壹圓

神奈川縣立横濱第一高女
一D
榎絹子

広島大学図書
2000044856